
Wing Fabric ~はねころも~

空野妃紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Wing Fabric はねじろも～

【ZPDF】

Z9849C

【作者名】

空野妃紫

【あらすじ】

自分の出生の秘密も知らず、普通の高校生として生活してきた朔夜は、ある日を境に普通の生活を送れなくなる。朔夜の前にあらわされた青年は朔夜のために存在するのだといい。朔夜に出生の秘密を伝える。朔夜が誕生することになつた秘密。それは遙か昔の哀しみだった。朔夜は哀しみの連鎖に終止符を打つため、刃をとる。

昔々、とても貧しい青年がいました。青年は体の弱い母親がいて、母親にのませる薬代が家計を圧迫していました。青年は心優しく母親を看病しながら一生懸命はたらいていました。しかし、母親は大病にかかりこれまで以上にお金がいるようになりました。そこで青年は村のはずれにある湖に満月の晩にのみあらわれる見田麗しい白鳥を捕らうと夜な夜なその湖にあらわれました。青年はきっとその白鳥は高値でうれるだろうとかんがえたのです。

青年が息をひそめ草むらで身をひそめていると一匹の白鳥が降りたちました。その白鳥は優雅な身のこなし、美しい瞳に純白の羽。青年はこの白鳥に間違いないと眠り薬をぬつた吹き矢を白鳥にむけました。しかし、そのとき白鳥はみるみる姿をかえ美しい一人の女性へとかわつてしまつたのです。

天女は白鳥だったときとおなじ純白の衣を身にまとい湖の水と戯れていました。不思議なことに湖の水はまるで意思でもあるよううごきだし、月の光をあびてよりいつそう輝き、天女を慈しむように彼女と戯れます。青年はその舞い歌う美しい天女の姿におもわず心を奪われそして、不用意に天女のいる湖のほとりへといつてしましました。

人がいたことにおどろいた天女はあわててとびたとしましたが、青年の声が天女をしばしとどめてしましました。青年の母親が病にふしているとすると天女はその青年に身にまとっていた羽衣から一粒の薬をさしつけました。さっそく、家にかえり母親にのませると母親はたちまち元気になり、今までが嘘のように働けるようになりました。しかし、母親が元気になつても青年の心にはあの日みた美しい天女の姿が見えません。青年は満月の夜、その湖にいつてみることにしました。

湖でいつものように舞い歌っている天女のもとへ青年がやつてき

ました。天女もまたその青年をまつように毎晩この湖にきていたのです。それから毎晩、ふたりは月がのぼるころにこの湖であります。歌をうたい、かたりあい、ときには夜空を散歩することもありました。そして、幾日も幾日もすぎたころ青年は天女にいました。

私はあなたを心から愛してしました。どうか、私の妻になつてください

天女は喜び青年とともに人里へと降りていきました。青年の妻となつた天女はふたりの男の子を産みました。天女は夫のために美しい衣をおり家計をたすけました。みるみるうちに青年は村一の金持ちになりました。そして、十年がたつたころ、村をまきこむ争いがおきました。村の人々は争いへとかりだされました。青年も例外ではありません。

天女は夫の無事を祈りながら夫の帰りをまちづけました。しかし、天女のもとへ帰つてきた夫の姿は悲惨なものでした。息をするのがやつとの夫は天女にもう笑いかけることも声をかけることもありません。天女は嘆き悲しみ自分の命を夫にさしだしました。夫はみるみる回復し元気になりましたが、夫のもとにはもう天女の姿はありませんでした。

朔夜はいつものようにお父さんのつとめる病院にきていた。うまれたときから体がよわく一日一回の治療と月にいちど検査が必要だ。治療とはG-0-6とかかれた透明の薬品を点滴で一時間かけていれる。さいわいというべきかいまだに手術だけはしたことがない。それだけがゆいつの救いだつた。入院中に自分より小さい子やおなじくらいうの子供がたくさんおおきな手術をしているのを見てきた。精神的に不安定になつて癪瘍をおこしたりきゅうに泣きだしたりしている子をみて手術にたいする不安や恐怖心だけがつのつたのをおぼえている。

「朔夜、もうおわったのか?いつしょに『いはんにしょう』

点滴をおえてでてきたところをお父さんが声をかけてきた。お父さんは白衣をきていて胸ポケットには『広瀬高志』とかかれたネームプレートをつけている。母親はいない。私をうんとすぐに死んでしまつたらしい。はじめから母親がいなかつたせいか母親がいなくて淋しいおもいをした記憶がない。たまに友達の母親をみると『お母さん』ってどんな感じだろう?とおもうことはあっても淋しいとおもつたことはなかつた。

「体は大丈夫か?」

病院の食堂でうどんをすすりながらお父さんはいった。お父さんは血液病が専門で手術はしない。広瀬明人。お父さんの兄(つまり朔夜の伯父)は遺伝子学の権威でお父さんといつしょにこの病院ではたらいでいる。というよりこの病院はお父さんと伯父さんの病院で親(朔夜にとつて祖父になる)からつけつこだものだ。伯父さんには子供がなく朔夜をほんとうの子供のようにかわいがつてくれている。朔夜がもの心ついたときには母も祖父母もいなく、お父さんと伯父さんだけが身内だった。そして、伯父さんは朔夜の主治医でもある。

「うーん、最近めまいがするのとすこし寒気がすることがあるかな。でも、伯父さんにつたけど検査の結果では大丈夫だつて」

朔夜はきつねうどんの揚げをぱくつく。このきつねうどんは以外とおいしいのだ。じゅわ、とひろがるお揚げの味に舌が満足する。お父さんは「そうか」と心配そうな顔をすると箸をおいて朔夜の頭に手をおいた。

「あまり走つたりとかするなよ。無理してたおれたりしたらたいへんだからな」

朔夜はすこし心配しそうとおもいながらも素直に「うん」とうなづく。そして、今日一日のことをお父さんに話した。もうじき期末試験があつてたいへんなことと夏休みにはどこかつれでいつてほしいといついでのようになだつた。医者であるお父さんにどこかつれでいつもむらうのはむずかしいことだけだ。毎年の恒例のように朔夜

は「どこか遊びにつれていって」とこづ。夏休みなのだ。ひとりでは泊まりの遊びにはとてもいかせてはくれない。お父さんも伯父さんもふたりが声をそろえてからず、いうのだ。「そんな体でもしものことがあつたら」とちこさいときは納得できずによく泣いて駄々をこねたがいまではそれも心配やえだとおもつてゐるからあまり強くいつたりはしない。

お父さんとわかれたあとすぐに家にかえる。学校はもうこつてもHRしかのこつていてない。より道もせずかえつたのはすこし気分がわるくなつたからだ。真夏の太陽のせいかもしない。家にかえつたときには眩までした。いつものことだからじつとしていたらすぐによくなるのはわかつてゐる。

部屋への階段をあがる元気もなくてリビングのソファによこたわる。そのまま田をとじて気分がよくなるのをまつた。こくこくと時間がすぎるとともに気分はよくなつていつた。自分の病気についてあまりよくしらないことはあまりよくない気がするが伯父さんもお父さんもくわしくはおしえてはくれなかつたし、注意点だけ守つていればよかつた。しつていることは治療として投与しているローポンがいちばん適した薬であることと先天性の遺伝子病であることだけだつた。

すっかり気分がよくなると今度は小腹がすいてきた。やつせん飯を食べたばかりなのにそれなのにお腹がすいてくるなんて、そういういながらも冷蔵庫をのぞいた。冷蔵庫にはお肉、野菜、ちくわやベーコンなどの加工食品もおいてある。お父さんと伯父さんで時間があるときに食材を買いたしといてくれるからこつぱいある。そんな食材をさつとみてレモンが三つあることにきづく。そのひとつをとりだすと四等分にしてお皿にのせた。最近すつぱいものがなんだか食べたくなる。レモンをオレンジのようにかじりつくとあつというまにすべて食べきつてしまつた。口のなかに酸味があとをひいている。

階段をのぼつて自分の部屋にこくと七時まで寝ることにした。最近

すこし調子がよくない。食欲はあるからそんな深刻ではないだらうけど、いちおうきをつけないと。そうおもいながらホームウェアに着がえる。一ネットのパンツに雲の絵がかかれたTシャツ。ベッドにはこいとすつと眠ってしまった。よく寝てよく食べられるのは病人にとつて最大の強みだ。

コンコン

ノックの音で目をさます。あわてて起きあがるともう八時になつていた。晚ごはん！とおもつてあわててドアをあけると伯父さんがたつていてエプロンをつけていた。伯父さんが晩ごはんしてくれたんだとおもいながら、ほつとしてあやまる。

「よく寝てたからね。かわりにしといたよ。気分がわるかったのか？」飯は食べられそう？

伯父さんが心配そうにこいつた。朔夜のお腹がタイミングよくなつて伯父さんはほつとしたように笑う。

「食べれそうだね」

やさしい顔でいった。朔夜ははづかしくて顔を赤くすると意地悪をいう伯父さんをのこしてさつさと台所へとむかつた。

テーブルのうえには野菜中心の食事がならべられている。朔夜はあまり肉を食べない、野菜を好んで食べるから伯父さんやお父さんとはいつもすこしメニューがちがう。食卓にすわると食事をはじめた。

「レモン汁でドレッシングをつくったんだがどうだ？」

伯父さんは料理上手だから新作ドレッシングの意見をもとめてきた。

「すこしすっぱいような気がするけど、私はおいしい。それより、この酢の物もつと酢をたしていい？なんか最近すっぱいものが食べたくて」

基本的にはすっぱいものはあまり好きではないのだがどうしてだか最近はヨーグルトとかレモン、ひどいときには酢を水で割つたようなものが飲みたくなる。

「暑いからスッキリしたものがほしいんじゃないか。レモンも酢も体にいいからいいじゃないか」

「たしかにそうだけど・・・気分がわるくなつて吐いたり目眩がしたりするの。でも、ちゃんと食べられるしどうしたのかな?薬の副作用じゃないよね?」

最後がおもつたよりも深刻そうにひびいた。伯父さんはあごに手をあててすこしうなると「一回、胃カメラでも飲んでみるかい。だれがいちばんうまいかな」といった。その言葉にあわてて朔夜は首をふる。

「いい、胃カメラはいいから。それに吐いても食べられるんだからたいしたことないんだよ。胃は健康!大丈夫だから」

胃カメラなんてのみたくない。のんた子がすこく苦しかつたつていつていたのをおもいだす。胃カメラだけはうけたくない。消化器系に重大な欠損はないからこれまでカメラをのんだことがない朔夜はカメラだけはどうしてもいやだつた。伯父さんはそんな朔夜の反応をみておかしそうに笑う。からかわれたのかな、とおもつてすこしむつとしてほほをふくらますと伯父さんは真剣な顔になる。

「朔夜、朔夜の体はとても纖細なんだ。なにかあつたらお父さんがとても悲しむ。もちろん、伯父さんだつておなじだよ。大事にしてくれ。走つたり飛んだりあまり体に負担のある運動はさけてほしい。ひとりだけの体じゃないんだ。わかっているね?」

伯父さんの言葉に「わかってる」とこたえるとレタスをほおばる。最近、伯父さんもお父さんもますます神経質になつているきがする。「ひとりだけの体じゃないんだ」とお父さんもいつた。「朔夜がいなくなつたらお父さんはいきていけないから」ともいわれた。だから、伯父さんも「ひとりだけの体じゃない」というのだろうけど。でも、検査で問題ないならそこまで神経質にならなくても。それとも、私にいえないだけでなにか問題があつたのかな。

そのまま、食事をして楽しくすごした。朔夜は伯父さんのことも大好きで幼いときには「お母さんがいなかわりにふたりのお父さ

「んがいるんだ」と自慢していたぐらいだ。父親と伯父の愛を一身にうけてきた。ふたりにたいしての信頼感はどんなだれよりも強くてふたりを悲しませるようなことは極力しないように努力している。幼いころふたりのいじつけをやぶつて発作をおこしてたおれたことがある。田をさましたときのふたりの顔をおもいだすと無茶なことができなくなつた。

「飯を食べおえると伯父さんは食器をぜんぶ洗つてくれた。私は伯父さんが食器を洗つているあいだにのこつたものをかたづけたりテーブルをふいたりした。

「伯父さん、これから病院にもどるの？」

エプロンを食器棚のひきだしの突起にかけるとネクタイをむすんでいる伯父さんにきいた。伯父さんは慣れた手つきでネクタイをしめながらいづ。

「そうなんだ。まとめなきやいけない資料があつてね。今日はかえれそうもない。そうそう、高志も夜勤でかえれなくなつたから今日はひとりになるな」

そんなはなしきいていない。きっと私とわかれあと夜勤がきまつたのだろう。それはしかたないけどいつまでも子供あつかいはひどい。

「大丈夫。もう高校生になつたのよ。ひとりでも大丈夫」

朔夜は伯父さんを玄関までおくりながらいつた。伯父さんは「そうか」と笑うと朔夜の頭に手をおくと「いつてくる」といった。そして、玄関のドアに手をかけると最終チェックのようになつた。

「なにかあつたら電話してくるよ。すぐにだ」

「もう、わかつて。大丈夫だから。仕事がんばつてきてね」

伯父さんの背中をおしながらいづと伯父さんは意地悪に笑う。

「あんなに可愛かつた朔夜が伯父さんを無下にするよになつたんだね」

伯父さんはお父さんとおなじよつに愛してくれているけど意地悪なところがある。意地悪をされることがあるけどそれでも許せるのは

それ以上に愛してくれていているのがわかるから。

「それじゃあ、いつてきます」

「いつてらっしゃい」

伯父さんがでていくとすぐにカギをかけた。世のなか物騒だからふたりがいなときはかならずカギをかけている。「カギをかけていてもピックキングであけられたらどうする」と伯父さんにいわれてからはチェーンも忘れはしない。できるだけの防犯をすると二階にあがつた。お風呂にはいろいろかとおもつたけどなんだか眠たくなつてベッドにもぐりもんでしまつた。あした朝、お風呂にはいればいい。そうおもいながら朝までぐっすり寝た。

しぬきられた暗い部屋のなか、画面上にうつるふたつの胎児をみつめながら男は満足そうにほほ笑んだ。ふたつの胎児はたがいにむかいつていてる。完全な人のかたちをした胎児。

「やつと、きたか」

部屋にはいつてきた男にいつた。そして、その男は胎児をうつすディスプレイのまえにくるとその画面を見る。

「どうだ。順調に育つてているとはおもわないか。着床しただけでも奇跡だというのに双子だ。しかも、われわれのかんがえよりずっと遺伝的な純度がたかい。胎児の心臓の音も力つよい。まだまだ、油断はゆるさないが」

あとからきた男に説明する。椅子にすわっている男はマウスを作してこれまでの資料をとりだした。胎児はまるい卵から人のかたちにかわっている。一枚、一枚がその成長を証明するかのようだ。ならんだ写真をみながら椅子にすわっている男は感心したよういう。

「しかし、こうしてみればふつうの人間の胎児とまったくかわらんな。人とおなじように進化の経路をたどつている」

進化の道、魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類。人間の胎児もまたおのれの起源を記すようにその進化の道をたどつていく。それ

はどの生命でもおなじことで、生命は自分がそこに存在するまでの経路を示さなければ生まれることは許されないのだ。

「まあ、われらが女神もまた、おなじように進化の経路をたどっていたがな」

椅子をぐるりとまわした男はティスプレイとむかいあつようにおかれた壁一面の水槽をみていった。となりにたつていた男はなにひとつ口をひらいたことはしない。ただ水槽がポコポコと気泡をほくのを見ていた。

「K-01はどうした?」

地下牢ともいえるような部屋にいる被験者のことを男はきいてきた。

「一般常識から帝王学すべての学習を完了した」

みじかく男は報告する。椅子にすわった男はたしかめるよういう。

「語学もすべておしえおわったのか?」

「ああ。ただ、外にでたがつていて」

男はそういうとK-01がかいた絵をわたした。最近は鉛筆と紙をもたせるとその絵ばかりかく。おなじ人物の顔。

「またか。こまつたものだ。しかし、あつたことのない自分の主人をよくもここまで正確にえがけるとは」

男は絵のなかの人物をみていった。K-01にはすばらしい身体機能と脳、そして、人ではない遺伝子がながれている。生命のかたちをかたどったそのものは自分が主のためだけに存在するといつてきかない。できるだけの知識をK-01におしえこみより完璧なものとしてつくりあげたにもかかわらず困ったものだ。

「女神の体調がすぐれない。このままでは母体はだめになってしまう。胎児はとりのぞくべきだ」

すわっている男にできるだけ冷静に忠告する。しかし、男は顔色ひとつかえずにいった。水槽のなかの青白く光る水のよじに人の心がないような顔だとおもう。

「もう、つぎの段階に実験はすすんでいる。もし女神が耐えられなかつたとしてもなんの支障はない。そんなことより、この新しいふたつの命を祝福しようじゃないか」

そういうつて胎児の映像にむきなおると愛おしそうに胎児にふれる。胎児にふれている男にきづかれないように男は白衣の影で拳をにぎりしめた。爪がくいこみ掌に痛みがうまれてもその力を弱めることはなかつた。

今日も学校のかえりに病院にいく。治療だけなら学校がおわつてからでもじゅうぶんまにあう。もし、まにあわなくとも身内の病院だから融通はいくらでも聞く。でも、最近はめまいや吐き気があるからなるべくはやく家にかえりたかつた。

カーテンでしきられたベッドのうえによこたわりながらぽつ、ぽつと一滴、一滴おちていく透明な液体をみていた。もの心ついたときからなんどもみている光景だ。D-06とかかれたシールもおなじみのものだつた。点滴をみているのにあきて目をつぶる。寝るためではなく光りを遮断するため。管でつながれているあいだ朔夜には自由はない。そのことは産まれたときからよくしつている。幼稚園のときまではお父さんか伯父さんがいつも絵本をよんでもくれていた。おわるまでずつといろいろな絵本をよんでもくれたのだ。ときには一〇冊ちかくになつたことをおぼえている。

「朔夜、気分はどうだい？」

目をつぶつていろとお父さんの声がした。朔夜は目をあけるとお父さんの顔を見る。お父さんはいつもとおなじように優しい顔をしていた。お父さんの悲しそうな顔をみたことがない朔夜は父の顔をおもいがくべるといつもこの顔だ。

「大丈夫。それより、今日は晩ごはんなにがいい？いつもかんがえるのたいへん」

主婦みたいなことをいう娘をまぶしそうにみると高志はいった。晩ごはんのおかずをかんがえるそぶりもみせてくれない。

「なんでもいいよ。朔夜それより無理しちゃいけないよ。検査ではなんともなくつたつてもしものこともあるからね」

体をきづかってくれる言葉をきくのは何回目だろ。伯父さんもお父さんもほかの人だつてからはずといつていほどいの言葉をいつてくれる。もう、ききあきているのに。

「晩」はん、リクエストなかつたらお茶漬けだからね

「晩」はんのことをまつたくかんがえてくれなかつたお父さんにからかうようにこうとお父さんは「冗談とはおもわなかつたのだろ。『いいよ』といつてほほ笑んでしまつた。からかいがいのない人だとはしつていたもののやつぱりたまにはきのきいたかえしがほしいものである。

「今日はなるべくはやくかえるから。あ、そつだ。お茶漬けだけなら果物をかつてかえるよ」

「果物？」

どうして、果物なのかわからなくて朔夜はきいてみた。お父さん疲れてるのかな？でも、そういうときつてケーキとかチョコレートとかもつと甘いものがほしくなるんじやないのかな。

「そう、お茶漬けだけじゃ。体にわるいからね。せめて果物でもたべておかないと」

お父さんのその言葉にすこしあきれて笑つた。自分のたべるものにはまつたく興味がないくせに娘の食事にはすこぶるきをつかう。お父さんをみていると医者の不養生とはこいつことか、と納得できる。なぜ笑つているのかわからないのだろう不思議そうな目をしている。そこがまたおかしくて朔夜はくすくすと笑いつづけた。

点滴を終えてさつさと帰るとさつそくはんを炊く。夕飯の仕度のためにながく邪魔な髪をくくる。市販のお茶漬けではすこしさびしきがして、鮭と梅干をかつてからかえつた。鮭がやけたころお湯を沸かす昆布茶をいれた。鮭が焼けるとラップをかける。お父さんたちがかえってきたときにはこの鮭をだせばいい。シソとミヨウウガをきざんで、自分のぶんのお茶漬けセットを完成させて「はんが

炊きおわるまでソファですわってテレビをみていた。

「ピッピッと炊飯器がなる。『ほんが炊けたんだとおもいながらその音をきいた。しばらく蒸らしておいたほうがおいしい。今日は『ほんがメインだから手抜きはしたくない。『じつほんを炊くとき日本酒をいれておいたのだ。』こうすると『ほんがいつもよりつやかでおいしくなる。ほんとうは畳布でもじゅうぶんおいしこど気分的にきょうは日本酒にした。

リビングとキッチンのあいだにおこにある電話が急になつた。朔夜は受話器をとる。

『朔夜、すこし問題が発生して今日はかえれやうにならん。あちんと『締りして寝るんだよ』

ちいさい子供に注意するよつなことを『お父さんは朔夜がまだまだちいさな子供のよつにおもつてているのだろう』

「大丈夫よ、わかってる。うん。ちゃんとチーンもしつかうん。それじゃあ、がんばってね」

そういうと朔夜は受話器をおろした。そして、まな板のうえでかるべ梅干をたたきながら『しあらめの梅肉をつくる。お茶碗にごはんをよそるために炊飯器をあけた瞬間、ホカホカ『ほんの湯気がたちあがつた。

「うつ」

そのとたん朔夜は吐き氣をもようして流しにふした。数回えずいたがなにも胃になかったことがさいわいしてなにもでてこなかつた。なにも吐くものがなくとも口のなかが気持ちわるい。朔夜は口をすいいだ。キッチンのタオルで口元をおさえるともうすつきりしていだ。そして、あいたまになつていた炊飯器からなに『ともなくごはんをよせつ。そしてそこに梅肉、ミョウガにシソを順番にのせていく。すこし、梅肉がおいよつなきがしたけど、まあいい。梅干のお茶漬けの完成である。市販のお茶漬けにはないワンランクうえのおいしさに舌づみをつちながら朔夜はテレビを見る。けつきよくその日はお茶漬けを一杯もたべた。そして、あまた『ほんをみ

るべ、どうするかしばらへ悩む。明日はお弁当はこらないから、これじゃあいませんがおねすわれる。朔夜はおじきつにしてお父さんと伯父さんこじれていあげよつとおもいつくと、鮭をほぐしおじきつにした。鮭のおじきりと梅肉のじつをいれたおじきつをふたつずつアルミホイルにつつむ。

おにじれとちよつとしたつけあわせをもつて朔夜はお父さんと伯父さんをさがしていた。それぞれのさしこれをいれた紙袋をもつて血液内科の病棟にきていたが、お父さんの姿はみえなかつた。お父さんを探してキョロキョロしていると顔みしりの看護婦さんが院長室に伯父さんとお父さんがいることをおしえてくれた。朔夜は院長室へとむかつた。

夜の病院をふつうは怖いとか不気味とかじつていやがるけど、朔夜にとつては夜の病院は幼いころからそこにあるたりまえのようにあつたから恐怖心はない。でも、無性に悲しい気持ちになつた。夜は急患の患者が運ばれたり入院患者からも容体が急変したりする。そのたびに看護婦や医者のバタバタと走る足音、びん、びん、ときこえる電気ショックの音が悲しかつた。

「伯父さんいる?」

朔夜はドアをあけて伯父さんに声をかけた。でも、そこには伯父さんもお父さんもいなくて。朔夜は部屋にはいるとふたりのさしいれを机のうえにおいた。そして、どうしようかすこし悩む。一人がかえつてくるまでまつてているのは遅くなるといやだし。いまさら病院で泊まりたくない。入院していったとき夜になるとかならずといつていいほど「家にかえる」といつて泣いていた。うんとちいさいときのはなしだけど。

メモでも書いとけばわかるよね。朔夜は机におかれたメモ用紙とボールペンをもつた。お父さんと伯父さんにそれぞれがう言葉をそえてそれぞれの紙袋にいれる。こうしておけば伯父さんからお父さんにわたしてもらえるし、もしかしたら、ふたりともいっしょに

いるかもしれない。

「これでいいかな」

そういうと朔夜は机に背をむけた。なんだかきゅうに眠たくなつた。はやくかえろう。お父さんと伯父さんの顔をすこしみたいよくなきがしたけど探してまでみたいわけじゃない。ドアノブに手をかけようとしたときかつてにドアがひらいた。いやかつてじゃない、男の子があけたのだ。手術患者がきるような服をきた男の子だつた。歳は自分とおなじだらうか。男の子は朔夜を見てたつている。

「院長先生がしてるの? ここにはいないみたい。病室で・・・」
きゅうに手首をつかまれた。なにをされたのかわからなくて朔夜は言葉をのむ。どうしていいのかわからず相手のつぎの行動をまつしかなかつた。

「あなたはここにいてはいけない」

男の子はそういうと朔夜の手をひいて外へいこうとする。朔夜は自分が拉致されるとおもい手をふりはらおうとした。でも、男の子の手がしつかりと自分の手をこぎついてふりほどくことができない。

「ちょっとはなして」

朔夜は夜の病院だということも忘れて大きな声をだして抵抗した。そうして、抵抗しているとだれかの足音がちかづいてきた。朔夜はたすけにしてくれたとおもうとさらに声をはりあげて騒いだ。

「朔夜、大丈夫か」

あらわれたのはお父さんですこしほつとする。無条件にお父さんがきてくれたからもう大丈夫だとおもつた。ほつとした瞬間、きゅうに息苦しくなる。発作だつた。呼吸がうまくできなくなつて喉からはひゅうひゅうと音がなる。呼吸のしかたを忘れたようなそんな感じになつてたつていられなくなつた。苦しくて男の子の腕に爪をたててにぎりしめる。

「朔夜つ発作が、発作がおきたんだ。D 06をはやく投与しないと」

お父さんの声がとおくできこえた。男の子は朔夜をよこに寝かすと頭をかかえあげた。そして、あいているほつの自分の腕にかみつき歯で自分の皮膚をさいた。そこからあふれる自分の血液を口にふくむと口うつしで朔夜にあたえた。息もできない食道に無理やりなあたたかい液体がながれこむ。一口こくんとのみこむと薬を投与されたときとおなじように信じられないほど呼吸が楽になった。背骨がすこしきしむような深い呼吸をくりかえす。ゆっくりとした呼吸をくりかえすともうふつうの呼吸にかわる。

「おとうさん・・・」

よこにいるお父さんに手をのばすと手をにぎりかえしてくれる。意識はあるけどなんだか遠くて状況がわからない。でも、お父さんがそばにいてくれるんだから大丈夫。きっともうなにもかも大丈夫だから。

「あなたをうしなつてしまつ」

男の子は深刻な目で朔夜をみつめながらいった。その言葉に高志も深刻な顔をする。朔夜にはもうふたりの会話を理解することすらできない。ただ、ゆっくりと体の力がぬけていくのだけを感じていた。

「朔夜をたすけられるのか？」

朔夜をたすけられないのはわかつていた。そして、自分にはどうしてあげることもできないこともわかつていた。でも、彼ならできるかもしれない。彼はほかのものたちとはちがう彼は朔夜のためにいるのだから。しかし、質問のこたえをきくまでに明人がきた。

「高志つ」

男の子はその姿にはじかれたように朔夜をだいて窓ガラスにつっこんでいった。窓ガラスは体がふれる前に吹き飛び粉々にくだけちる。高志はおもわず手をはなしてふたりがさる姿をみていた。明人がちかくにきたときにはもうふたりの姿はそこになかった。明人はあわててくだけた窓ガラスのそとみてふたりの姿を目でさがしたが姿があたらぬことにはいらだつた声をあげた。

「くつそー、高志、大丈夫だつたか？」

明人の言葉にたちあがると「大丈夫です」とこたえてふたりがさつたあとの窓をみつめた。そとは暗く冷たくて月のあかりすらなかつた。闇のなかにげるようになつていていた男のうしろ姿が目からはなれなかつた。そして、青白い顔をした朔夜の顔もわすれられない。自分にはなにもできないのだけれど。

「高志、ここをひきはらうぞ」

明人はそういうてきびすをかえして自分の部屋へとかえつていつた。高志は自分の胸に手をあてて祈るように静かに目をとじた。ものじとがこれ以上わるいほうにいかないよつて、すこしでもいいようにじろりぶように。

朔夜にはかけているものがある。それは彼女が生きていくために必要なものだつた。さらに、彼女の体には負荷がありそれが急激に彼女の命をよわくしていた。

私ではもうあなたの糧になることはできない。そんなおもいで彼女の横顔をみつめる。やすらかに眠つてはいるがその横顔がなんだかいまにもきえてなくなりそうでこわかつた。

「つうつん

朔夜は目をさました。そこは自分の部屋でさつきまでのことは夢だつたのだとおもつた。お父さんにさしいれをするつもりだつたのに自分はいつのまに寝てしまつたのか。そんな錯覚をおこす。目がかすんではつきりと天井がみえないがそんなことはささいなことだ。最近よくあることだし、目だけじやないほかの機能もよわつているようだつた。

「きがつかれましたか？」

ききなれない声がして、そちらをぼんやりとみる。そして、レンズがあうと目についたその顔におどろいた。あわてて起きあがる。なるべく彼からはなれるように壁際にへばりつくよつにもたれた。

「無理をしないでください。あなたは大切な人ですから」

彼は表情をうごかさずにいつたがその目には心配そうな色がうかんでいてとても不安げな印象を受けた。だからだろうか警戒心がとけていくどころか不思議と安心してしまった。だれよりも自分をわかつていてそして、だれよりもちかい存在そんな感じがしたのだ。

「あなたは？名前はなんていうんですか？」

朔夜は彼にいった。朔夜がもう自分にたいして警戒心をゆるめてしまつてることを自覚しながら。彼はみじかく「K 01」とことえた。事務的な感情のあまりよみとれない声だつた。

「K 01？それは名前なの。もしかして名前がないの？」

朔夜は彼の言葉にそうかえした。いくらなんでもそんな名前をつける親はいないだろう。しかし、それなら彼のほんとうの名前はどうへいってしまったのか。そんなことをおもいながら朔夜は彼に提案する。

「そうだ。私があなたの名前をきめてあげる。それでもいい？」

「あなたがそうしたいのなら」

朔夜の言葉に彼はそうこたえる。朔夜はうれしそうに笑うと一生懸命名前をかんがえはじめる。なんだかひろひろてきた犬に名前をつけるときのようにわくわくして楽しかつた。かんがえているあいだずっと彼は朔夜のことをみていた。そして、朔夜はいい名前をおもいついた。

「そうだ！リヨクにしましよう。きれいな縁の田をしてるからリヨク。」

朔夜はその縁の目をのぞきこんでいた。きれいなその縁の目は自分をいやしてくれるようにおだやかにひかつていて安心した。そつとその顔にふれるときからひらした目をおおつまぶたがすこしひごいた。

「どう？きにいった？」

朔夜はそういうといつそつわしせつにその田をのぞきこんだ。ほんとうにきらきら、きれいな田だった。きれいな田をやさしくほそめるところは「はい、とても」とこたえた。その顔がよろこんだ。

でいるようで達成感と満足感がわきあがつてきた。こんな不審な人が自分の家にいるのにそれなのにそんなに警戒感していいない。

「朔夜、あなたにはなさなくてはいけないことがあります」

なのつてもいのにリョクが自分の名をいつたことにすこしおどろいたけどそれ以上にはなさなければならぬことがきになつて「なに?」とききかえした。すこし不安が芽ばえている。それはきたくないようなでも、きかなければいけないような」とのようにおもえた。それはまつたくの直感で確証はないけれど。

「あなたはこのままでは生きつづけることはできません。ほんらいなら私があなたの命を保つ役目をになつていてたのですが、私は人の性をうけてしまいました。そのせいで役目をうばわれてしまつた」彼はたんたんと語つている。そのことがみょうに安心した。事実だけを述べていくような口調。それに感覚のどこかでリョクがけつして自分に嘘はつかないようなきがする。求めればなにもかも眞実をはなすというへんな感覚。

「私は死ぬの?」

ちいさいときから抱いていた不安。いづれ自分は死んでしまうかもしけないという不安がいつもつきまとつていた。いづれ人間は死ぬけれど、ふつうそれはもつときのことで朔夜くらいの歳の子たちは死を実感することはあまりない。でも、自分はつねにそれを感じなければいけなかつた。

「こままで。ですがあなたがもう一度、私とおなじものを求めれば・・・」

そういうて果物ナイフをてわたした。それは家にある果物ナイフでほんらいなら台所にあるものだつた。朔夜はさしだされてもそれをうけとる勇気がなくてどうしていいかわからずただ不安な目での刃をみつめた。

「あなたがいなければ私は生きてはいけない。私にはあなたに従うことしかできない」

そういうてリョクは朔夜をみつめる。リョクの本気な目にふるえ

る手でナイフをさわる。その柄をしっかりとつかむと手のひらを傷つける。一本の線から紅い血が玉をつくつてそれがだんだんおおきくなり川のようにながれてベッドのうえにこぼれおちた。しかし、シミをつくねばかりでなにもおきない。

「大丈夫です」

なにもおきないことに困惑の色を浮かべた朔夜の手をにぎりしめてリョクはいった。血がながれる手をつかまると変化がおきた。にぎりあつた手から光がうまれる。なにがおきたのかわからず目をほそめるところどは朔夜の背中に違和感を覚えた。背中から羽根がはえたようにうすい淡い色の膜のような帯があらわれた。そして、それはひろがり朔夜の体をつつむようにちぢまる。そして、朔夜の体にすううときえていった。

「大丈夫ですか？」

リョクの声が耳にはいる。ゆっくりと目をあけると体がうまれかわったように感じた。体が今までになくかるくて力にみちあふれているような充実感があった。なにがあつたかわからないけど病気で死んでしまうような不安から解放されていることだけはわかる。

「なにがおきたの？」

自分におきたことがよくわからない。リョクはにぎりしめた手をはなした。

「あなたの命の糧を誕生させただけです。博士たちは『羽衣』とよんでいました」

「羽衣？」

そうききかえすと「そうです」とリョクはこたえてつづけてこうもいった。「まだはなさなければいけないことがあります」そして、そのまま朔夜の意思を無視するようにはなしあじめる。朔夜にはいろいろと疑問がのこつた。『博士』とはだれなのか。いま自分がしたことはどういうことなのか。そして、リョクはだれなのか。しかし、リョクは朔夜が質問する余裕もなく語りはじめる。

「あなたは人間とはちがいます。あなたは広瀬博士たちによつて羽

衣についた血痕からつくりだされました。天からおりてきた天女の復元として広瀬博士たちにつくられたのです。ですからあなたは羽衣をなくした状態では生きてはいけなかつた。そして、私があなたの羽衣としてあなたの一部であるはずでした。しかし、私は羽衣と人の遺伝子でつくれられてしまつたためあなたの一部としては役不足だつた。それから、朔夜あなたの体にはふたつの命がやどつてしまつてゐる」

頭はうごいていない。ただ混乱だけがうずまいていた。たしかにリョクは『広瀬』といつた。私とリョクがお父さんと伯父さんにつくられたかのようにいつたのだ。『羽衣』や『天女』はこのせいどうでもいいことのようにおもえた。朔夜の体に子供がいるともいつた。朔夜はこれまでセックスどころかキスすらしたことがない。そんな自分に子供ができるはずがないのだ。だつて『身ごもる』といふことは性交つまりセックスをしないといけないはずだ。

「だつて、わたし彼氏だつていないので・・・ごども・・・？」

朔夜の困惑した瞳をみつめながらリョクはいつた。たんたんと事実をつげるようその言葉をためらうことなくいつたのだ。

「人工授精です。あなたのお腹にやどつている子供たちは私たちとおなじく広瀬博士たちによつてつくられたのです」

その残酷な言葉に感情がついていくわけもなく。混沌としたおもいだけが頭を胸をめぐつてゐる。

「じゃあ、私は・・・」

お父さんや叔父さんにとって自分は愛情をそそぐ血縁者ではなく、研究所にいる檻のなかのネズミとおなじだつたのか。娘や姪としてうけていた保護や愛は貴重なモルモットへたいしてのものだとゆうのか。

「あなたしかいない。私にはあなたしかいないのです。あなたが望むなら私はあなたの望みをかなえます・・・」

リョクがそいつて手にふれてきた。あたえられていたモノがくづがえされた絶望、せつに望まれるようふれたあたたかな手のぬ

くもり。

「私もリョクもモルモットだつたの・・・」

その事実に涙があふれる。リョクは悲しい田の色でうなずく。その田の色はまるで朔夜の心そのものようだつた。くらくて悲しくてどうしていいのかわからない。けれど、現実だけはきたえられた刃物のように冷たく光つている。日常に隠されていた事実は恐ろしいぐらに残酷でうけとめることだけを強要しているよつておもえた。

「どうすればいい・・・」

リョクにきいたわけでもなく、ただその言葉が口からこぼれた。どうすればいいのだろうか。リョクがいつたことを嘘だとおもいこみたい。でも、手からつたわるぬくもりが、リョクの悲しさが、そして自分にかたりかける緑色の瞳が、すべてが嘘ではないと告げている。常識ではかんがえられないことが、事実であるのだと告げていた。

「あなたの望みそれだけが私にとつての事実です」

リョクは田線ひとつはなさずにすべてを語つた。もつ田常には帰れない。自分のお腹には命がやどつていて。産まなければならぬのか、それとも産まないでいいのかそれすらも自分はわからない。目をつぶつて死を望めばリョクはそれすらもあたえてくれるのかもしない。でも、幼いころからの死への恐怖がそれを許そうとはしなかった。今まで生きていいくことに必死だつた。産まれもつた病魔との闘いに朔夜は勝つことだけを望んできたのだ。そのおもいが死を恐怖だとうえつけてきた。

「私たちの産まれた場所へいきたい」

朔夜はそうおもつた。言葉だけの事実ではなく、目で、耳で、手でふれた事実がほしかつた。それらを感じることで、すべてをしることでしかうけとめられないよつなきがした。リョクが朔夜をだきしめる。窓があいてリョクの背に翼がはえる。白い翼ではなく、黒く羽根のはえた翼だつた。

「白い翼がいい・・・」

「・・・」

朔夜のつぶやきにリョクの翼が白へとかわる。まぶしいぐらいの純白の翼は大きくひらいて夜の闇のなかへときえていった。偽りの日々に心をうしなわぬようにつつみこむ腕のなかで朔夜は白い羽根が大地へと舞い降りるシーンをみていた。

この病院にいる看護婦も医師もすべて組織の人間だ。患者の一部でさえ組織の人間だつた。特別区域にいる患者はすべて被験者で、そのことを本人たちはしらない。被験者たちは重病人で集中医療室つまりICUにいるのだとおもつていて。彼らはD-06が人間の遺伝子にどう影響するか。そのためのサンプルでしかない。

「高志、資料とサンプルの運搬がおわった。ここからはなれるぞ」明人の言葉に高志はあやつられるように車へとのりこんだ。これからここは大惨事になる。爆薬がセットされたのだ。研究資料や研究施設をいつさい闇にかえすための爆薬がセットされた。被験者や一般患者を道づれに組織のすべてをけししたのだ。

「兄さん、朔夜たちはどうする？」

発作をおこしたおれてしまつた朔夜の姿をおもいながら高志はいつた。彼女のお腹にはふたつの命がやどつていて。組織は朔夜にただいな期待をよせていて。その彼女が自分たちの手もとからきえてしまつたのだ。

「朔夜はほかのものたちがあつていてる。俺たちはこれから上海の研究施設で朔夜とおなじものをつくるようにとの命令だ」

朔夜とK-01の実験結果は貴重な功績で、とくに朔夜の遺伝子とK-01の遺伝子をうけついだ子供たちはなにがなんでもつれもどさなくてはならない。

「車をだせ」

明人の言葉に運転手は車をだす。上海の研究施設はここの一倍があり、たくさんのサンプルが大きな水槽にいる。しかし、それらサ

ンプルは大気にふれると皮膚がとけ筋細胞、内臓、骨と焼かれてと
けてそのかたちをどごめることはない。朔夜はこの壁をこえた唯一
の存在だった。そして、子をやどす「ここにすら成功した貴重なサン
プル。

「あと三〇分もすればここはあとかたもない」

明人は起爆スイッチを押してつぶやいた。この施設は爆破されて
かたちすらなくなる。おもてむきにはガス爆発として処理される。
そして、ここに責任者である広瀬兄弟もこの爆発にまきこまれてあ
とかたもなくふきとばされる。ふたりの遺伝子でつくられたクロー
ンの一部をみつけられて、警察で死亡と確定し、世のなかからきえ
るのだ。

朔夜は院長室の地下にある部屋のなかをみていた。そこにはたく
さんの機器があつた。薬品のビンやメスに手術台もあつた。本棚に
はファイルがずらりとならんでいて、それをひらけると写真やグラ
フ、意味のわからない単語の羅列があつた。おくにすすんでいくと
扉がふたつあつた。ならんだ扉の右側をリヨクはあけた。リヨクに
うながされるまま朔夜は部屋にはいる。壁一面の水槽と水槽につな
がつた機器が目にはいつてきた。

「これは・・・」

朔夜は水槽に歩みよりながらつぶやく。青い液体にはなぜだか懐
かしさすら感じてしまう。そして、水槽にかかれたD 06のプレ
ートにきづいた。

「D 06」

D 06は朔夜が幼い頃からまいにち投与されつづけた薬品だつ
た。それがこの青い液体なのだろうか。朔夜は水槽になんの恐れも
なくふれる。この水槽はなんなのだろう。

「この水槽のなかで私もあなたも育ちました」

朔夜はリヨクの言葉に水槽から目をはなしてリヨクをみつめた。

「え？」

「この水槽にはたくさん私たちとおなじ生命がいた。ですが、まともに育つたのは私とあなただけ……」

リョクは朔夜のとなりにたつ。その表情は暗くてよくわらない。朔夜はもういちど水槽に目をもどした。ポコポコと空気をはきながら水槽は青白くひかっている。リョクは不意にうしろをむくとおかれているパソコンを起動させてなんどかクリックするとディスプレイに画像がうつった。

「あなたの子供です」

リョクはみじかくいつた。朔夜はその画像をみつめ、無意識にそつと両手で腹部にふれる。なんの変化もみせなかつた腹部に胎児の鼓動を感じたかったのかもしれない。たがいにむきあつているちいさな赤ん坊の姿を朔夜は不思議な気持ちでみていた。その子たちが自分のお腹にいるのだ。

「人間の胎児で、うと六ヵ月ぐらいです」

ふつうのならそこまでくると腹部がふくれてくるのに。その事実もまた自分が人間ではないということを語っている。右手で画面のなかのわが子の写真にふれた。そして、腹部にあてた自分のてのひらに胎児の鼓動をさがす。

「鼓動がしない……」

朔夜の言葉にリョクが朔夜の左手に自分の手をかさねる。そして、朔夜にいった。

「集中して……目をつぶって、手に意識を集中させて……」

朔夜はリョクの言葉に素直にしたがつ。目をつぶり手のひらに集中すれば、腹部にたしかなぬくもりを感じて、そして、そのぬくもりにこたえるかのようにとくん、とくんと自分とおなじ鼓動をきざむふたつの音がきこえた。そして、その音は不思議と朔夜の心をやさしくさせる。目を開けてディスプレイにうつるふたりのわが子を見る。無条件のやさしさがうまれて朔夜の表情をやわらかなものへとかえた。

「この子たちのお父さんはわかる?」

朔夜の言葉にリョクは表情をくもらせる。リョクの変化を不思議におもいながらも朔夜はリョクの返事をまつた。

「・・・・私は。・・・・その子たちの父親は私は」

リョクの言葉に朔夜はなにもおどろかなかつた。そりじやないかとおもつていたからだ。そして、どんな感情がうまれるよりもさきにほつとしていた。普通の男女のようにさすかつた命ではないけれど、すくなくともこの子たちは自分たちとはちがう。無機質で冷たい水槽のなで育つた自分たちとはちがうのだ。

「あなたがいらないというのなら私はそのまづがいい」

リョクの言葉の意味がわからぬ。リョクはいまこの赤ちゃんたちをおろせといったのだろうか。

「どうこういと?」

朔夜のやせしい表情がいつきに疑惑をふくんだものになる。リョクは悲しそうな目をとじるといづ。

「あなたの望みはかなえたい。でも、あなた以上に優先させるものは私にはありません。」この子たちがうまれることであなたの危険がふえることが私は・・・心配です」

リョクの言葉が理解できない。では、リョクはまづまれてこないほうがいいとおもつているのだろうか。どういづ形にせよ誕生してしまった命をもののように簡単に捨てる」とはできない。たしかに、私はこの子たちの鼓動を感じてそして、すくなくともその存在にやさしさを感じた。

「おろせつてこいの?」

朔夜のその言葉にかんぜんに顔をそらしてしまつた。水槽をみつめるようにむけられたその背中が朔夜の目には罪の意識と存在をひどく憎んでいるようになつた。こたえのないまま沈黙だけがつづいて、そして、時間だけがながれていく。朔夜はリョクに目をはなせなかつた。はなせば永遠にうしなうような、ただその姿をみるとだけしかできない。

ドン、とうい音とともに地面が揺れた。そして、つまづきと花火

のよつなおおきな音がきこえてくる。けたたましいサイレン音がとおこできこえて、あたりの気配がいつきにざわついたものになる。

「なに？」「

わからず」に朔夜はいった。リョクは朔夜を守るよつにだきしめる。それをまつてていたかのよつにとなりの出口から爆音がきこえた。鼓膜をやぶるよつなその音に朔夜の悲鳴もけされる。目をつぶつてちちこまる朔夜の体をリョクはさえてつぶやいた。

「逃げます」

そういうとしっかりと両手に力をいれて翼をひろげた。そして、ためらいもなくうへととんだ。ふつてくる瓦礫や爆風でとんでもくるガラス片から朔夜を守るようにつみこんで爆薬から逃れるよつに暗い空へとでる。そして、高層ビルの屋上へとおりたつた。

「もう大丈夫です」

朔夜にそうつげて朔夜から手をはなした。朔夜はとっさに底うようにお腹に腕をまわしていくことにきづいてその力をゆるめながら目をあける。そして、リョクの姿に喉をならした。おびえをみせる朔夜の瞳にしんそく悲しそうな瞳をしてリョクは背をむけた。

「みないでください・・・」

罪悪感にみちた言葉だった。自分の存在を許そつとはしないその冷たい背中に朔夜は手をのばした。白い羽根のはえるその背中にふれる。リョクの体がびくつとふるえた。

リョクはヘビの顔を人間に変化させるとちゅうのよつな顔をしていた。ほほまでさけた口にとがつた耳。後頭部から首、胸にかけてライオンのような黄色いたがみがあり、腕や顔の皮膚は爬虫類のものだった。手の指はきちんと五本あつたがその指も爪もトカゲのようだ。たてがみのような毛のはえた背中からは白い羽根がはえているがそのしたは獸のもので、黒い毛におおわれていた。

「リョク、大丈夫だから・・・」

朔夜はやさしくいって、リョクがふりむくよつにうながす。リョクは本来の自分の姿を軽蔑しているのだ。その自分の遺伝子をもつ

子供が朔夜のお腹にやどつてしまつたことには言葉ではいいくせないほどの罪を感じていた。

「おねがいですから、うまないでください……私はもうこれ以上……」

睫毛のないリョクの瞳には罪への罪悪感と自分という存在への嫌悪感そして、それをうけつぐ子たちへの恐怖感がこもつていた。朔夜はそつとリョクの胸にふれる。心臓があるそのうえに自分の耳をつけてリョクの鼓動に耳をかたむけていた。耳をつぶつて耳につたわるのはおなじようなどくん、とくんという鼓動だけ。

「大丈夫。リョク、大丈夫よ。私もリョクもこの子たちもなにひとつかわらない。おなじ音がするもの……だから、大丈夫だよ。リョク」

朔夜の言葉に力は瞳をとじる。涙をながすことのないその瞳には絶望という言葉しかやどらなかつた。自分には朔夜がすべてなのだ。朔夜の望みは自分の望み。朔夜の感じる痛みでさえ自分は感じたいとすらおもう。その朔夜が「大丈夫」だというのなら、「おなじ」だというのなら、なにも恐れてはいけない。すべては朔夜の意志なのだから。

バン。音をたててひらかれたそのドアはリョクをやさしい空間からいきにひきはがし、侵入者への戦闘体勢へともつていく。朔夜をかばうように背中にまわすと、とつぜんあらわれたものにらみつける。警戒しながら相手を観察した。拳銃か腰のベルトにある。中肉中背のその男は戦いになれたものの気配をまとう。博士たちのまわし者だろうか。それなら、拳銃をかまえてはいつてきて、そして、なによりひとりということはないだろ。

「アルの洞察力はばつちりだ」

男はそういうて、リョクと朔夜を観察するようにみでいる。リョクは体に力をいれた。すぐにでも相手に反応できるように体をすこしまえかがみにする。

「きみたち広瀬博士から逃げてきたんだろ」

この言葉をきいてリヨクは相手にとびついた。確實に相手の首筋にかみついたとおもつたが、かんでいたものは腰にあつたはずの拳銃だった。男はとっさに拳銃を腰からぬいてそれを首にあててガードしたのだ。男はそのままリヨクにはなしかける。

「ちょっとまた。オレは敵じゃない。きみたちを保護しにきたんだ。おい、その子なんとかってくれ！」

いつこうにゆずらうとしないリヨクにしひれをきかして男はいつた。朔夜はどうしていいのかわからずに困惑つてたおれこんでもみあう一人をみている。そんな、朔夜に信用してもらおうと必死なのだろう。男は呼びかけてくる。

「たのむ。信じてくれ！ オレはきみたちに危害をくわえるつもりはない。ほんとうだ！ くつ」

リヨクの牙が男の首筋にせまる。そうでなくとも、拳銃でのどをしめつけられかけている。そして、男は真っ赤な顔でリヨクをおしかえそうとしているが、かなうはずがない

「やめて！ リヨクはなれて」

朔夜のその言葉にはじかれたようリヨクは男からはなれる。男はむせかえるのどをおさえながらじばらく咳きこんだ。そしてやつとはなせるようになるのどをおさえたままたちあがつていつ。「たすかった。殺されるかとおもつたぜ」

リヨクはまだ、戦闘態勢をくずしてはいけない。朔夜をかばうようにかこいながら敵をにらみつけている。朔夜は「やめろ」とはいつたがどうしていいのか判断をつけかねていた。信じていいのか、わるいのか。でも、リヨクが人間に危害をあたえてはいけないようなきがしたのだ。男が一步ふみだそうとした。それをみて朔夜はさけんだ。

「こないで！」

リヨクの腕を力いっぱいにぎりしめてさけんだ。リヨクを制止するためだつたのにそうすることでもるえる体を支えていた。男は拳銃を朔夜たちのまえになげすてると両手をあげていつた。

「信じてもらえたわけじゃない・・・か？」

男をにらみつけるリヨクの腕をつかみながら朔夜は男をみていた。リヨクのようににじりこんでいるのではなく、ただみていた。

「保護するってどういうこと？私たちをどうするつもり？」

朔夜は男に問うことしかできない。そのこたえをきいてどう判断すればいいのかわからない。温室で育てられた自分には判断するだけの経験も材料もなかつた。

「きてくればわかる。きみのことならもう一年以上もまえからみてきた」

その言葉に疑惑にちかい感情がめばえる。

「一年もまえから？」

「そうだ」

朔夜のといかけに男はこたえた。そして、言葉をつないでいく。「きみもそこの彼も広瀬博士たちがつくったんだろう。オレたちはもつ何百年も彼らと対峙してきたんだ。彼らの非道をとめるために」私たちはしるべきことがたくさんあって、しらずにいきていくことは不可能なのだろう。そして、すくなくとも田のまえにいるこの男はなんらかの情報をもつっていた。けして信じたわけではない。でも、

「わかったわ。あなたについていきます」

それしかなかつた。田常の生活すらもどつてはこないのだ。爆音のなかを人々の悲鳴がうずまいていた。声もだせない人はその恐怖すらさけぶこともできなかつたのだ。そして、その原因は自分にあるのかもしれない。そうおもうとこのままではいられなかつた。しらなければならない自分がなんであるのか。どうして、お父さんたちは自分たちを産みだそうとしたのか。そのためにはこの男についていくしかなかつた。

朔夜はリヨクの背にかくれてそっとお腹に手をまわした。不安なおもいをうつけしたかった。そして、腕につたわるふたつの鼓動にもう心はきまつていた。リヨクが「あなたの望みは私の望み」と本

氣でいつていたのなら私の望みはもうきまつてしまつた。その望みにはリョクが必要だとおもつた。そして、この男も必要になると直感ににたおもいで決断したのだ。そう、信じたわけではない。

つれてこられたのは豪華客船。陸のみえない船のうえは自然と不安はなかつた。リョクがちかくにいてくれるからかもしれない。それは不思議な感覚だつた。リョクはそつと朔夜によりそうといつた。朔夜が不安がつていてるとおもつたのだ。

「大丈夫です。陸がみえなくとも私があなたを陸まで運びます。どうか、心配しないでください」

リョクの手をにぎるとにっこりと笑つた。その笑顔はこんな状況でできるようなものではなかつたけど、自然と笑うことができたのだ。リョクがいうとおりそのきになればいくらでも逃げることができるのだ。そして、豪華客船の頂点の一室につれてこられた。そこにはたくさんの中とおおきな机にパソコンがおかれている。パノラマのよつなガラスのまんなかにその部屋の主がいた。

「おまちしていきました。朔夜さん」

部屋のあるじはいう。歳は一〇代前半ぐらいだろうか。東洋人のよつな黒髪と西洋人のよつなすきとおつた肌をしている男はしたしげな雰囲気がある。なんでだろうか、リョクとおなじような同類のよつな感じがした。理屈ではない感覚を説明するのはむづかしいけど『同類』もしくは『同種』といつ言葉がいちばんちかい。

「どちらへどうづぞ」

そういうて机のまえにおいてあるソファへ座るようにすすめられた。朔夜はするべきかどうするか悩んでいたが、リョクがするようにながしたのですわることにした。リョクにエスコートされてソファにすわる。リョクは朔夜のすぐうしろにひかえるよつにたつていた。

「私はアレン・ラエリア。このフェインの創立者です。われわれはすくなくとも敵ではありません。とはいっても、なにからはなせば

信じてもらえるでしょうか？・・・そうですね、言葉をつづるよりもみていたくほうがいいかもしない」

アレンはそういうと机のひきだしから一本のナイフをとりだした。リヨクの気配がざらついたものになる。でも、アレンからは殺氣めいたものは感じられない。それどころか表情すら変化しない。やわらかくやさしいものだった。そんな男がとつぜん自分の手をさしたのだ。その刃は手のひらを貫通している。アレンはなんのためらいもなくナイフをひきぬくと朔夜にその手をみせるようにかかげた。

「つ・・・・・

言葉もなくその光景を朔夜はみる。こんなことをするとはおもつていなかつた。そして、男の手のひらの変化におどろく。それは、朔夜たちとおなじものだった。

「わかつていただけましたか？私はあなたとおなじです」

アレンの傷はアレンがはなしているともうふさがつてしまつた。アレンはそれをみるといつたん言葉をとめて胸ポケットから真っ白いハンカチをとりだしてその血をぬぐつた。

「私は朔夜と同種で、人間ではありません」

その言葉にリヨクが口をひらいた。リヨクからほさきほどのようにざらついた殺氣はきていた。そして、かわりに迷いのある表情をうかべている。

「あなたは私とおなじなのですか？主によって存在を許される私と・

・それとも朔夜とおなじなのですか？」

リヨクの言葉にアレンはしづかに語りはじめる。朔夜がしらないこと、リヨクがしらないこと。彼がしるすべてを。

「私は朔夜さんの種族のオスになります。日本では我々のメスことを天女というんですよ。昔話にでてくる天女です。天女にとつて羽衣なくしては生きていけない。それはあなたがたもしっていますね？」

とわれて朔夜はうなずく。アレンはそれをやさしい顔で確認するとなしをつづけた。

「リヨクくん、きみなら本能的にわかるだろうが、昔話のよつに天女にとつての羽衣は天へとかえるものじゃない。彼女たちが自分の力のすべてで誕生させたもうひとつ的心臓とよんでもいい。それと同時に羽衣は彼女たちの願いを叶えるためのものです。オスにはない、彼女たちだけの能力」

朔夜はリヨクを見る。リヨクは平然としている。羽衣を誕生させたのが願いを叶えるためならリヨクは私が願うこと叶えるのだろうか。リヨクは私がすべてだといつてたけど、こんな強制的なものだとはおもわなかつた。

「でも、それじゃあ、羽衣だけを復元すればいいんじゃないの？」

朔夜の疑問はあたりまえのようにわいたものだつた。天女の力のすべてだとゆうのなら羽衣だけを復元してしまえばいい。リヨクのように入人の遺伝子とかけあわしてしまつことが可能なのに、わざわざ天女をよみがえらせなくとも。

「それは、無理です。羽衣だけを復元することはできません。天女と羽衣これらはたがいに存在しあつてこそ機能できる。リヨクくんが人間の遺伝子をうけてでも成長することができたのは朔夜さんがいたからかもしませんね」

アレンの言葉にあらたな疑問がうかぶ。リヨクはたしかに私ちゅうしんだけども、けして自分の意志をもつていないわけではない。私のお腹にいる子供たちをリヨクはまちがいなく「産まないで」といつたのだから。でも、その疑問はリヨク自身の言葉でうちけられる。

「私のDNAは九〇パーセント以上が人間のもので構成されています。羽衣のもつ力だけをなるべくのこして朔夜とのつながりはなるべくないようにつくられました。しかし、私には朔夜が必要です。根底のところではまだつながっている」

「そうでしょうね」

リヨクの言葉をきいてアレンはふくむよつこづぶやいた。そして、朔夜にむきなあとアレンはいつ。

「私がフェインをたちあげたのはルフナをとめるためです。彼は自分の野望のためにたくさんの罪なき人々を苦しめています。そして、実験でうまれた産物を生命兵器として世界中にばらまいています。彼らは不完全でまだ力を有していないが人間よりも身体能力はたかく、すぐに傷もふさがる。そして、いつていの時間がすぎれば勝手に消滅する。天女や羽衣から誕生したものは私たちのようなものでないと殲滅はほぼ無理でしょ。きみやリヨクくんのような力が必要なんです。僕はきみたちと手をくみたいとおもつてます。どうか、力をかしてくれないか？」

朔夜はその言葉をとりあえず信じてみることにした。お父さんたちをこのままにしてはおけない。そして、兵器として消耗品のようにあつかわれる命をこれ以上存在させてはいけないようにおもえた。でも、ふつとおもつ。朔夜は肉や魚を食べることもましてや血などみたときには数日ねこんでしまつ。

「でも、私、血もみられない」

朔夜の言葉にリヨクがこたえる。朔夜が今までそうだったのは動物の血肉を処理する能力がなかつたからだ。

「もう、大丈夫です。羽衣が穢れをはらいます。あなたの体は今までとはなにもかもちがいますから」

リヨクの言葉に覚悟がきまる。覚悟のきまつた凜とした表情を朔夜はしている。戦う決意をした私のあとをリヨクはなにもいわずについてくるのだろう。私がやめるといわなきがぎり、どんな茨の道でもリヨクはなにもいわずにすすむのだろう。そんなふうにリヨクの意志をしばるのはけつして肯定できるものではないが、でも、自分にはリヨクが必要だった。

「わかりました。私にあなたたちの手助けをさせてください」

その言葉がすべてのはじまりだつた。けわしく血塗られた道への入り口であり、これまでの平凡な日常との決別を意味した。さしだされた手をにぎりながら朔夜はアレンにいった。

「それと、朔夜とよんでください。なれなくて」

リョクと朔夜は船のデッキにいた。海の地平線にまっかな夕日が沈んでいく。雲は太陽を中心に金色にかがやいて太陽からはなれるほどその色が赤にちかづいていた。その太陽を海の風をうけながら朔夜はみつめている。そのよこにはリョクがいてリョクは朔夜の赤くそまるよこ顔をみつめていた。

「リョク、私きめたの。この子たちをつむわ」

朔夜はそういうとリョクをみつめる。リョクもその言葉に朔夜の瞳をみつめる。そして、とても困ったような顔をする。朔夜はリョクに手をのばす。

「そんな困った顔しないで。リョクにはこの子たちのお父さんになつてほしいの」

リョクはその手をとつてひざまくとひざと口づける。それはまるでおじぎばなしにでてくる王子様のようだった。そして、田線をあげるとリョクはもうしわけなさそうにいつたのだ。

「私にはあなたとならびことは無理です」

リョクの言葉に朔夜はおなじ田線になるようにすわるとリョクにいう。

「大丈夫。リョクなら大丈夫。私とあなたは根っこでつながっているんだもの・・・リョクならきっと、つづん、絶対にいいお父さんになるわ。私もいいお母さんになりたい。産んであげたんの。つらいこともおおいかもしぬないけど、いきてみなければわからないことはたくさんあるから」

朔夜にはかなわないとおもつ。彼女の意志が自分の意志であることは本能のようなものなのに、こんなふうにおもつこと自体が不思議なことなのかもしれない。

「私にはあなた以上に大切なものができます。私にはあなただけだと覚えておいてください」

リョクの言葉に朔夜は笑つた。夕日はもうおおかたしづんでいて夜のとばりが降りてきている。星と月と夕日にかこまれた世界。世

界のすべてがそこにあるようで完璧だとさえおもつてしまふ。その完璧な世界でリヨクも朔夜もなにひとつ不安は感じなかつた。未来に希望はなく、茨の闇のはずなのに。朔夜はリヨクの手をとつてお腹にふれた。闇のなかにもきちんと光りがあるのだ。ここにちいさなふたつの光りがある。

朔夜とリヨクがフォインにくわわってからもう一年半がたつていた。この一年半、リヨクはさまざまな対戦をつんできた。リヨクはそうゆう教育をうけてきたのでまだそんなに苦労はしなかった。だが、日常生活はちがつた。一般的な常識がないリヨクには戦闘苦闘することがおおかつた。電車にのることもそのひとつだ。どうやって乗ればいいのか。どうして、切符を買うのか。そして、どの電車にのればいいのかがわからなかつた。一方、朔夜はお腹がめだつようになるまでのあいだに羽衣を使いこなせるようになつていた。実戦はリヨクが反対したのでまだしていないが、それでも戦力になるよつにがんばつた。

「リヨク、これで今日はおわりだ。どうだ、朔夜のよつすは？子供、うまれそつか？」

レセルバール・サトウはいった。レセルバール・サトウ、通称レスはあの屋上にあらわれた男でいまはチームメートだ。ほかにも、バーン・アルジャーノに医者のサラ・サファイがおなじチームで、リヨクたちは任務でフランスにいる。朔夜とリヨクはフランスのパリで暮らしていた。アレンの所有するマンションにふたりだけですんでいる。ほかのメンバーはそれおとなりとしてちかくにいる。そして、いまはフランスにある製薬会社と食品会社を調べてかえつてきたところだった。

「いいえ、朔夜はもうすぐうまれそつといつていますがその気配は・・・」

朔夜が妊娠してからもう一年ちかくたつ。朔夜がうむ決意をこれから半年後にお腹がめだちはじめた。サラが生まれてもおかしくないといつてから五ヶ月もたつていて、それでもいつこううまれてくる気配をみせなかつた。

「そつか・・・検査では異常ないんだろ？」

レセが心配そうにいった。たしかに、心音もしつかりしていて子供になにか問題があるわけではない。サラがなにも問題がないとうのなら我々にはうまれてくるのをまつしかなかつた。

「人間の遺伝子で穢れるとリョクはいつていたな。もしかするとそれが原因なのかもしない。古来日本では出産は穢れの意味もふくまれている。そとかんがえれば、羽衣がなんらかの影響をあたえているとかんがえてもおかしくはない」

アルがいつた。アルのいうとおりかもしれないとリョクはおもつた。血の穢れや気の乱れが朔夜の命をおびやかす。それを浄化しはらつているのが羽衣だ。リョクにはその力はもうないが彼女の体内にある羽衣はその力をもつていて。

「でも、それなら子供はうまれないのか？」

「いや、それはわからない。時期がくればうまれてくるのかもしない」

アルとレセがはなしているあいだ、リョクは朔夜のことをおもつていた。今日はサラのところで検診をうけているはずだ。すくなくとも、ひとりでいることはない。そんなことをおもつていていたときだつた。

「・・・・うまれる」

「「え？」」

リョクのその言葉にふたりはまぬけな返事をかえす。そんなふたりの言葉もきかずリョクははしりだす。朔夜のもとへとはしりだした。そんなリョクの背中をふたりはみつめて、顔をあわすとあわててリョクをおいかげた。

そのころ、朔夜はおおきなお腹をさすりながらサラとはなしをしていた。今日もサラの家で超音波診断と赤ん坊たちの心音をきいた。なかなかうまれてこない子供たちになにかあつてはこまるからとサラは毎日このふたつの検査をうけるようにといつた。そして、それがおわったあと朔夜はサラを自分の家にそつてお茶をたのしんで

いたのだ。

「なかなかうまれてこないわね。検査はいつも異常はないからいいけど」

サラは「一ヒーヒーカップをつくれにおきながらいつた。朔夜はお腹を両手でさすりながら赤ん坊たちを見る。

「でも、もうじきうまれてくるきがするんだけどな」

「そうね。どうせ私たちの常識が通用するわけじゃないし。それより、リョクとはどうなの？」

サラがいつた。その言葉の意味がわからなくて朔夜はまぬけにもそのままかえした。

「どう？」

「そうよ。だつて、夫婦でしよう？いまは子供がいるからセックスはできないけどキスぐらいはしたんじゃないの？」

からかうようなサラの視線と言葉に朔夜は顔をまっかにそめて反応する。サラはおかしそうにほほえむとこのおぼこい母親の心配をした。サラからみると朔夜はまだまだ子供でとても一児の母親になれるような感じではない。恋もしたことのないおぼこい朔夜のゆくすえが心配なのだ。

「そんなことしません！」

朔夜は恋すらしたことがない。ただお腹にやどつた子たちに外の世界をみせてあげたかった。育ててあげたかった。朔夜にはお父さんはいたけどお母さんはいなくて、どうせ子供を育てるなら両親がふたりそろつっていたほうがいいとおもつたからリョクに夫婦になるといった。できるだけふつうの環境で育ててあげたいから。

「ほんとうに一緒にいてなにもないの？」

寝室はおんなじだし、ひとつ屋根の家で不自然な感じもする。

「してません！それにリョクはそんなことかんがえてないです」

「そななの？」

不思議そうにサラはいつた。そして、カップに口をつける。朔夜はたたまれなくてカップに口をつけた。朔夜はカップに口をつけた

ままサラを見る。過激な質問をしたサラはなんでもないよつなすずしい顔をしている。うらめしい気持ちでサラをみているとつぜん、腹部に激痛がはしった。

「つ」

お腹をかかえてうずくまる朔夜にサラはあわててちがづいてくる。そして、すぐさま腕時計をみた。陣痛なら時間の感覚をはからなければいけない。胎児はすぐにうまれてはこない。そう、あわてることはないのだ。苦しそうにしている朔夜にサラは声をかける。

「朔夜、大丈夫よ。一回目の陣痛はすぐにおさまるわ」

あくまでも人間の場合だけど、とサラはおもつたがきっと彼女たちだつておなじだろう。サラは胸ポケットからボールペンをとりだすと自分の手のこうに『12：27』と書きこんだ。そして、朔夜の背中をさすつてあげる。朔夜はうめきながら必死に陣痛の痛みに耐えたがサラがいつたとおり数分もたたずにおさまった。

「もう大丈夫です」

ずっと背中をさすつてくれていたサラにそうこうと朔夜はゆつくりと上体をソファにもたれかける。そして、ふうーと息をはいた。その姿をみてサラが台所へとはなれていった。そして、朔夜にいう。「朔夜いまのうちに腹ごしらえしどきましょ。出産には体力がいるから、なにか食べたいものはある?」

「そうですね。冷蔵庫に昨日ののこりのスープがあるんです。それと、親子丢が食べたいんですけどつくれます?」

朔夜の言葉にサラは「オヤコドン」とつぶやくと朔夜にいづ。

「次の陣痛まで時間があるんですけども、ふたりでつくりましょ。ライスはあるの?」

「そうですね」

朔夜はたちあがるとさきほど激痛がうそのように消えてスタッフと歩いて台所へとむかう。そして、ふたりでならんで腹ごしらえの準備をした。

リョクは必死にはしつていて。車でかえるよりも自分の足ではしつたほうがだんぜんはやい。リョクの背後にはもうふたりの姿はなかつた。それでもリョクはきにせずはしつていく。

「朔夜つ」

リョクは勢いよくリビングのドアをあけた。そこにはリョクがおもつていたような苦しんでいる朔夜ではなく、どんぶりをかたてにスプーンを口にふくんでいる朔夜がいた。そして、リョクをみて不思議そうに首をかしげている。

「どうしたの？ そんなにあわてて？」

朔夜ではなくサラがいつた。朔夜は口をもぐもぐうかしている。リョクはたつたままこたえる。

「いえ・・・・あの、子供は・・・・」

口のまわりながらリョクがいつた。すると、今度もサラがこたえる。朔夜は口にふたたびスプーンをはじぼうとしている。

「そうそう、さつき陣痛があつたのよ。ちゅうどお皿だつたし、力をつけておじうとおもつて。オヤコドン、リョクもいかが？」

サラの言葉に力がぬける。出産は男がおもつてているよりもたいへんではないのかもしねない。リョクはとても「はんを食べるようなきにはなれず、それをことわると朔夜のとなりにすわつた。朔夜の親子丼はもう半分以上ない。朔夜はぱくぱく、もぐもぐとたべてなんともなさそうだった。そして、そのままたべおわつてしまつ。「じゅうさまでした」

手をあわせて朔夜はいつとかさねた食器を台所へはじぼうとしたのでリョクは食器をとりあげてかわりにはじぶ。サラの食器もリョクは台所へはこんだ。

「あまり運動してなれやうね」

サラはそんなリョクをみていつた。朔夜は田だけで肯定するとひとこと「隠れて」といつた。そして、台所で食器を洗つていのリョクに田をむけると朔夜はつづけていつ。

「かえつてくるまでに掃除とか家のことをすると怒るんですよ。運

動しないとふとつちやう「う

「いいじゃない、楽で。なにもしないよりしてくれるまうがずっと便利よ」

ふたりはそういうながらリョクが食器を洗いおわるまでリョクを魚にはなしをした。リョクが食器を洗いおえてしばらくしたあと、リョクとおなじようにものすごい勢いでリビングにレセとアルが突入してきた。サラと朔夜は一人のようすにくすくすわらい。そんな二人をきよとんとした目でみていた。その後、一回目の陣痛がおこり回をおひごとに間隔がみじかくなり、サラは男たちを外においた。陣痛がおこるたびオロオロするばかりで邪魔だつた。

「息をすつて、はいッふんばつて！」

朔夜はサラの言葉にあわせて息もたえだえに腹筋に力をこめた。信じられないほど激痛にたえながらも母になる本能が弱音をはかそうとはしない。朔夜はひたすら苦しみにたえながら子供たちと会えることをかんがえた。

「はあはあ、ふうッ。くうう！」

頭の線がきれるのではないかとこうほど腹筋に力をこめてふんばる。サラの声をたよりにタイミングをあわせてふんばる。そうして、たえること一時間後、ひとりめの赤ん坊の産声があがる。そして、その三十分後にふたりめの産声があがつた。

サラはふたりを湯船であらいタオルでくるむと出産の苦しみから開放された朔夜にふたりの子供をだかせた。とたんに朔夜の表情が喜びで華やかなものになる。

「ママよ。ずっと会いたかつた」

ふたりの子供にはなしかける朔夜の姿はサラに聖母マリアをおもいだせる。そんな微笑ましい母と子をのこして、となりの部屋にまたせている男共をよびにいった。サラの姿を見るなりまつたときにリョクが部屋にはいつていつた。

「うまれたんだな、やつと」

レセがほつとしたような顔をしていった。サラも自然とほほ笑む

と「ええ」とこたえて性別をつげる。

「男の子と女の子よ。母子ともに元気だわ」
サラの言葉にアルがいった。

「これで朔夜も戦いに集中できる。いずれ彼らもわれわれとともにに戦うことになる・・・」

うまれてきた子供たちの役割はおおきいものになる。朔夜がそうであるようにふつうの人間とはちがう。フェインにさずかった最高の矛だ。朔夜がくわわってからフェインは彼女の盾になつた。

「それまでにおわるだろう」

レセはそういうと朔夜とリヨクのいる部屋へといつた。アルは「そうだな」とつぶやく。月はなく、星ばかりが輝く空のもと祝福をうけた子供たちが過酷な運命を背おわないよう。彼らが大人になるまでに決着をつけなければならない。

無機質な研究室の暗い部屋。さわがしい地上の世界とはちがい、ここはいつも暗く無機質な機械音とつくられた生命の心臓の音だけが支配している。

手からすべりおちるようになってしまった女神のかわりのようになくたくさんの人形たちがうまれている、産声もあげることもなくときが満ちれば偽造母体からでてくる人形たち。今日もまた数対の人形がうまれた。でも、彼女たちは女神とは基本的にちがう。安定的に環境に適応できるために人間の細胞が45・03パーセントふくまれている。この0・03パーセントが人間に女神の力だけをあたえる数値だ。それを発見してからというものの毎日のようにつくりつづけている。

「高志、ようやく次世代がうまれたようだ」

数枚の報告書をつくえになげするようにおき明人はいった。つくえにちらばつた報告書には娘として育てた朔夜と羽衣と人間の遺伝子でつくったK-01の姿があった。K-01は朔夜をきづかうようによりそつていた。おおきなお腹の朔夜によりそつ姿は仲のい

い若い夫婦のようにもみえる。

「やはりひとりは男の子だつたんだね」

高志はその報告書を一枚とつていった。そこにはうまれてきた子供たちの性別などの情報と母親である朔夜についてかかれていた。そして、なにより目をほそめてみたのは文章のよこにはりつけられた写真だつた。朔夜が双子のうちのひとりを抱いてあやしている。その顔はやさしい顔をしている。幸せをたたえたようなおだやかな顔だつた。

「われわれがいま誕生させている子たちはながくはいきられない。以前のようにすぐに崩壊しないだけましだが・・・それでも不完全だ。しかし、これ以上人間の遺伝子を優先させると傷の治りのはやいだけのただの人間になつてしまふ・・・」

高志は兄である明人の言葉を朔夜と朔夜の子供たちのうつった写真に目をおとしながらきいていた。そして、兄にあわすように明人の言葉をとつてはなした。

「僕たちの予想がただしければ、うまれてきた子供たちは人間の遺伝子を子宮のなかで消滅させているはずだから、かぎりなく女神と羽衣の細胞情報だけをうけついでいるはず」

朔夜に子供をうませることにしたのにはわけがある。彼女たちは羽衣が必要だということはわかつていた。しかし、その羽衣のつくりかたがわからない。羽衣を調べてみると布のようにみえるそれは纖維ではなく遺伝子をもつ細胞だつた。しかし、固有に意志をもつものではなく。みずからは意志をもつことのない生命体だつた。動物の手足とかわらない。

そこで明人たちはこの細胞にいろいろなほかの生命の遺伝子をかけあわせてみた。どれもかけあわせることは可能だつたが、意志をもちはしなかつた。そして、最終的に意志をもつたのが人間の遺伝子だつたのだ。これについてははつきりしたことはわからない。そして、同時進行で羽衣の本体とでもいえる女神もなんどもなんども実験をくりかえしたが成功はしなかつた。そんなある日、羽衣と人

間をかけあわせた細胞がたちになりかけたそのとき、朔夜もまるでそれに平行するように誕生した。この経験をもとにいま誕生している彼女たちには羽衣、人間、女神の遺伝子が小数値の単位でぐみあわさつて固体として存在している。

しかし、朔夜はだんだんと体が弱つていき本来もつてゐるはずの力ももつてはいないようだつた。その命にさきがみえたとき遺伝子をのこすために子孫という形で保存しようとしたのだ。そこで、抜擢されたのが羽衣からつくりだしたK-01だつた。彼の羽衣の遺伝子情報がうまれてくる子供になんらかの影響をおよぼすとかんがえたのだ。そして、もうひとつ理由があつた。彼を観察していくなかで人としての遺伝を消去していくことにきづいたのだ。それは画期的な発見で、すべての人間としての遺伝を消去することはなかつたが、意志をもち、力をそなえ、この世界でいくための体をえたのだ。彼は朔夜がいなくても存在しつづけることができる。

「この報告書では子供たちに力があるかはわからないが・・・しかし、いちばんかんがえ深いのは朔夜に力があらわれたことだ。いや、目覚めたというべきだらうか。K-01と接触したことでおおきな変化があつたようだ。朔夜が手元からいなくなつたのは誤算だつたが、得るものはおおきかつた」

高志は満足そうにわらつてゐる兄に背をむけてこの地下の世界から逃げるようにしていく。そんな高志の背に明人はいつた。

「高志、明日パリへ飛ぶ。準備しておけ」

高志は返事もせずにていつた。明人はそんな高志にきをわるくすることもなく、報告書の写真を手にとつた。そこには、敵である三人の人物がうつるつてゐる。明人はたのしそうにその写真をみていした。パリには障害物があるが、かならず子供ごと朔夜をとりもどすきでいた。だれにも邪魔はさせわしない。障害になるのならそれを排除すればいい。それがどんな手段であるうとまわない。

朔夜が出産をおえてから一ヶ月がたつてゐた。朔夜はいま、ほ乳

瓶で子供にミルクをあたえている。母乳で育てたかったが母乳はふたりの赤ん坊を満足させるほどでなかった。リョクはもうひとりの子供にミルクをあたえながら朔夜を見る。ここ何日もふたりの夜鳴きで満足には寝られていないのに朔夜はみちたりた顔をしてミルクをあたえていた。

「紗枝、ミルクのみおわってるよ」

朔夜の声にハツとしたようにリョクはほ乳瓶を見る。ほ乳瓶はからでそれでもまだたりないとゆうように紗枝はほ乳瓶にしゃぶりついている。リョクが抱いている子は長女の紗枝。そして、いま朔夜のうでのなかでミルクをのんでいるのが長男の瑠希だ。ふたりはおなじ顔をしていてみわけがつきにくく、服の色が一人を区別する唯一の手段だ。しかし身体的にゆいいつの違いがある。それは目の色だ。琥珀色の目をした子がお兄ちゃんの瑠希、紫電の目をもつ子が妹の紗枝である。

「あ、はい」

リョクは紗枝からほ乳瓶をとりあげると一本目のミルクをあたえる。勢いもおどろえることなくこくこくと飲んでいく。

「紗枝はよく飲むのね」

朔夜は満足そうにいった。瑠希はあまりミルクを飲まないが、紗枝は食欲旺盛だ。瑠希があまり飲まないといつてもサラにいわせれば普通くらいの量は飲んでいるらしいけど。ふたりの食事の時間がおわるとこどもおねむの時間でミルクをのみおえてからしばらくなあやしてこるとかうすうすと寝息をたてた。

「おやすみ」

朔夜はそうゆうと子供部屋の電気を消してリョクのいるリビングにいった。子供たちが眠たいように朔夜ももう目が限界だった。

「やつと寝ついたんですか？」

リョクがソファでくつろぎながらいった。朔夜はうなずくとリョクのとなりに座った。座つてしまつとよけいに眠くなつた。リョクの肩に頭をおいてうと、うと、と目をとじてはあける。そんなよ

うすにリョクはきづかうようにいう。

「眠つてはどうですか？ 昨夜もあまり眠れていない」

そういうて、リョクは朔夜の頭を膝のうえにみちびく。そして、朔夜の体にショールをかけた。朔夜はあいまいに返事をかえすとそのまま眠つてしまつ。リョクは朔夜の寝顔に安らかな瞳をむけた。

そして、読みかけの本を読みはじめる。

そうしてどれくらいの時間がたつただろうか。中盤までよんでも本がもう読みおわつてしまつていて。それでも朔夜は目をさます気配はなかつた。となりにいる子供たちも目をさましていないのだろう。物音ひとつしない。リョクにはこの瞬間、瞬間がとまつているように感じられた。そして、すべての幸福がそこにあるかのようなそんな感覚にもとらわれている。

このまま時間はうごきださないと錯覚しそうになつたとき、となりの子供部屋からものすごい音がした。ガラスをつきやぶる音に朔夜は瞬時に目をさめし、一団散に子供部屋にむかう。リョクも朔夜とともに子供たちのもとへといつた。

「だれっ」

子供部屋についた朔夜がさけんだ。子供部屋はふたりの赤ん坊の泣き声と武装した三人の侵入者で騒然としている。にらみあつてうごこうとはしない侵入者にリョクはとびかかる。おなじように反応した侵入者はふたてにわかれた。リョクへとたいじするものとベビーべッドへとむかうもの。朔夜は敵にたちはだかりベッドで泣き声をあげる子供たちをまもる。腕からはうすい羽根のような布がのびている。あの日、リョクの力をかりて誕生させた羽衣だ。

「子供はわたさないわ」

敵をはじいた羽衣はシユルシユルとかたちをかえて朔夜の手に刃としてあらわれる。朔夜はあらわれた剣をかまえる。相手は両手に短刀をもつていた。実戦経験のない朔夜にどこまで通用するのかわからないがやるしかない。

朔夜がふかく息をしたのを合図にふみこむ。刃がぶつかりあって

甲高い悲鳴をあげる。とびちる火花は朔夜がなんとか相手についていることをしめしていた。リヨクは朔夜を気にかけながらふたりの敵を防ぐ。人のものではなくなった両腕は刃すらはねかえしている。

「くつ

朔夜がおされていてことにきをとられた瞬間、ひとりを逃してしまつ。逃れてしまつた侵入者は朔夜の腕をきりつけて子供たちをあつとくうちに手中におさめた。朔夜は子供をかかえた侵入者にきりかかるうとしたが一歩とどかない。朔夜の背後にまわつたほかの侵入者が朔夜にきりかかつた。

「くうツ

「朔夜つ

朔夜のふきだす血をみながらリヨクは叫んだ。まえにたおれこもうとする朔夜を背後から抱きとめると朔夜もつれさううとする。リヨクは朔夜を抱えた敵の首を左手でふきとばす。そして、朔夜をとりもどした。そのすきにふたりの侵入者は姿をけっていた。朔夜の体からでた血が朔夜の服を汚したがもう血はとまつていて。朔夜の傷がふさがるのをみてリヨクはほつと息をついた。

「おわなきや

傷がなおつたことも自覚しないまま朔夜はたちあがり侵入者を追おうとする。リヨクはそんな朔夜の腕をつかまるとそれを阻止した。朔夜は蒼白な顔で必死に抵抗しようとする。

「はなしてつ、リヨク手を、子供たちを追わなきやツ」

リヨクは力ずくでひきよせると両腕でしつかりと朔夜をおさえこむ。それでも暴れる朔夜にいった。

「もう追つても無駄です。あなたも体がもたない

暴れていた朔夜は不意にめまいがおそい。リヨクの腕のなかにくずれおちる。無理もない。羽衣をつかつたあとにあんな大怪我をしてその傷をなおしたのだ。体への負担があつてあたりまえのこと。

「どうしたの？」

「お願いします」

騒ぎをききつけたサラがはいつてきた。サラに朔夜をまかせるとリヨクは子供をさらつた侵入者のあとを追う。しかし、その姿はなく痕跡すらみつかりはしなかった。

あの「ひき」。間違いなく博士たちの試作品、いや、もしかしたらもつ完成しているのかもしない。子供だけではなく、朔夜もつれわうつとしていた。

リヨクは自分と同類であろう侵入者のことを考えながら部屋にかえった。部屋にはサラにさせられてやつとのおもいでたっている朔夜の姿があった。リヨクは朔夜の体をやわらかのように手をのばして、朔夜に拒否されてしまう。

「どうして、子供をたすけなかつたの」

ちいさくせめる声にリヨクはなにもいえない。サラは複雑そうな顔をしたがそのままにもいわず朔夜をリビングへつれていった。蒼白な顔でふらつきながらしていく朔夜のうしろ姿をリヨクはみていた。

サラから連絡をつけてレセとアルがかえってきた。ふたりはサラから事情をきく。朔夜とリヨクのことも。そしていまふたりは別々のところにいる。朔夜は自分の部屋で体力の回復をまち、リヨクはベランダでひとり町をみていた。

「リヨク、子供たちがつれていかれたところがわかつた。アレスだ。やつらはセヴェンヌ山脈に研究所をかくしもつているようだ」アルはリヨクの背中に声をかけた。リヨクはゆっくりとふりむくと無表情のままこたえる。

「わたしたちが目をつけていたところですね」

「そうだ。入り口もやつと特定できた。アレスに一軒の家がある。そこはおもてむきはぶつうの家族として暮らしているがその地下室はセヴェンヌ山脈につづいている」

アルはこたえる。リヨクはアルのよこよこさるとこいつ。

「朔夜に報告してきます」

アルはリヨクの腕をつかまえていった。リヨクはなにもいわすまえをみている。

「朔夜とはなしあえ。きみは道具じやない。意志をもつた個人だ。個人と個人がわかりあうには言葉をかわすしなかない」リヨクはなにもいわずにその場をさつていった。頭のなかでなんどもアルのいった言葉をくりかえす。

私はそんなこと望みはしない。

リヨクはなんども心のなかでつぶやく。アルの言葉をすべて否定するように。自分が朔夜の一部ではなく個人であることを強く否定した。

青い屋根にすこしクリームがかつた白い壁の家。ポストには手紙が一通。玄関の扉にはかわいいいアーチじょうのかざりがあった。ごくふつうのありふれた家。そこには若い夫婦がふたりですんでいることになっている。

レセとアルがかわいいアーチをかざつた玄関をたたく。そこからは若い女がでてきた。にこやかに笑みをたたえてでてきたその女にアルは冷静な声でつげる。

「ここに昨日ふたごの赤ん坊がはこぼれたとおもうんですが」

「いえ。そんなことはなかつたけど」

アルのとに女はなにをいわれているのかわからないとゆう表情でこたえる。そして、こたえながら玄関をしめようとした。レセは閉じようとする玄関のドアを手で阻止する。アルは自分の体で拳銃をかくしながらわざとにこやかにいった。もちろん拳銃は女にむいている。

「すみませんが、あそこにいる私の友人とともに地下をみせてはいただけませんか?」

アルはそういうながら拳銃の安全装置をはずす。力チャつという不吉な音をさせてからさらにつづけた。女はアルの背後にいる朔夜と目があいあきらかに表情をかえた。

「 もちろん、無理にとはいませんが」

女は拳銃とアルをみてしばらく沈黙するとあきらめたようにドアを開けていった。

「 どうぞ」

朔夜とリョクはふたりのやりとりのようすをみていたが、交渉が成功したことがわかるとその家の玄関へとむかつた。体をすこしよけて家にまねいた女を朔夜はみた。女の歳は一〇代前半くらいでブロンドの髪がふんわりとやわらかそうだった。

四人が家にはいると女は玄関をしめて、地下室へと案内した。アルとレセを先頭にリョクと朔夜はついていく。朔夜の顔色はもどついていてもうふつうに戦える。台所に地下へとづづく階段があつた。五段ぐらいの階段をおりていくとそのままおくへといく。しかし、そこにはレンガの床と壁ぞいにおかれた棚だけだ。棚にはいろんな物があがれていて、ごくふつうの地下の物置のようだった。

「 そこからはいらぬでください」

女はそういうと棚と壁のあいだに手をいれるとスイッチをおした。スイッチといつてもなにもないようにみえる。きっと手をかざせば反応するようになつてているのだろう。

「 なにもおきない」

朔夜がつぶやいた瞬間、とつぜんレンガの床がわれていく。ブロックとブロックのあいだは自然なようにみえたがよくみるとすきまがあつたのかもしれない。それにあわせて床がひらいてゆくとその後にはさらに階段があつた。その階段にはおわりがないようにおもえた。

「 いま電気をつけます」

女はそういうと先頭にたち、階段を数段おりると床がひらいたところにあるスイッチをおした。たちどころに蛍光灯がついていく。でも、蛍光灯がついてもまだ、そこが見えなかつた。女がおりていぐのをアルとレセが確認するとレセが朔夜とリョクもくるように合図する。朔夜はリョクの顔もみないでおりていった。リョクもその

あとをおつ。

底なしのようだとももつた階段はやつぱりながくつづいていて、一段、一段がひくくおおきいせいかよけいにながく感じた。ゆるやかな階段を永遠ともおもえるほどくだつていくとさらに扉があつた。扉はこれまでのものとちがい光沢のある鉄の扉だ。案内役の女は扉からでているちいさなわくに指紋をおさえつける。扉からピピッと音がなると指をはなした。扉が自動ドアのよつにひらいていく。

アルは拳銃を女につきつけたまま、感覚だけでどのへんにいるのかをイメージする。ゆつくりと下降しながら一キロはすすんだのかもしれない。しかし、まだ扉があり。そのおくにはうえへとつづく階段があつた。一五センチから一〇センチぐらいの段がかさなつている。アルはなにもいわず女をつながした。女はさらにすすんでいく。

「ここが最後です」

のぼりきつた最後の扉のまえでいった。最後の扉は指紋と声がかぎになつていて女の声と指紋を認証すると扉はひらいた。

「ここが最後だな」

アルは女に確認すると女はうなずく。それをみてアルは女の後頭部に拳銃のグリップをたたきつけた。氣絶した女を扉のむこうがわにのこして四人は研究所に侵入した。

「子供たちがいる場所はわからない。まず、メインコンピューターに侵入しよう」

各自の腕についた三センチ×四センチのディスプレイにこの研究所の地図が表示される。そこには自分たちの位置も点でしるされていた。それぞれ点の色がちがう。

「サラ、メインコンピューターの道を表示してくれ」

アルは腕にとりつけられている装置にむかつていて。すると四人の耳にあるイヤホンからサラの声がきこえた。

『OK、すこしまつていて』

サラが自分のノート型パソコンからハッキングした研究上の情報

と地図をてらしあわせてもつとも効率のよい道筋をだしていく。そして、それぞれの装置に転送した。

『どう? 表示されたかしら』

サラの問いかけに四人はそれぞれ自分の腕をみる。そこには赤い線と矢印で道順がしるされていた。さらに、サラは四人に指示をだす。

『研究データーが保管されている場所をアルとレセのほうにおくつておくわ。朔夜とリヨクは』

サラの言葉をさえぎつてレセがいった。

『大丈夫。うちあわせどおりにうごくわ』

サラはその言葉に『そうね』とつぶやくとさりげに言葉をつぐむ。四人の成功を願うような声で。

『幸運を祈つて』

その言葉をさかいに四人は打ち合わせどおり一手にわかれる。アルとレセは研究データーを盗みに、そして、朔夜とリヨクは子供たちを救いにいったのだ。

リヨクと朔夜はまず、メインコンピューターをめざした。どちらが遭遇したがリヨクにとつて、障害になることはない。それぞの腕の装置にはサラのコンピューターから妨害電波が送られて発信している。廊下に等間隔で設置されたカメラはいま映像をうつしたまま停止している。つまり、カメラの映像は朔夜たちがとおるまえのものがおくれているのだ。

『朔夜、これでとおれます』

メインコンピューターのセキュリティーは厳しく五つの箇所にそれぞれ複雑なカギがついているようなかんじだ。そして、すこしでも異変を感じると緊急システムが作動してプログラム自体がかわってしまう。

それぞれのプログラムをサラの指示のもとリヨクが解除していく。朔夜にはプログラムを解除するほどの技術はない。自分にでき

ることは羽衣をあやつり、敵をなぎたおしていくことだけ。それも、ほとんど経験をつんでいなんぶんあやしいものだった。

「いー」「いー」

朔夜はそういうとメインコンピュータールームにむかう。リョクはなにもいわずに朔夜のあとをついていく。朔夜はメインコンピュータールームのまえにきた。ここにくるまでに朔夜とリョクの体のすべてのデーターがメインコンピューターへとつうじる力ギとなるよう登録を変更してきたのだ。五つのコンピューターには複雑な登録システムと難解な防御システムがあった。それらをクリアーしていまここにたつていてる。

そんなにはおおきくないその扉は蝶つがいやドアノブがついているわけではなく、どちらかというと鏡の板がそこに一枚たつているような感じだつた。朔夜はそのまえにたつ。するとドアがうえからしたへと赤い光線をはしらせる。赤い光線は頭からつま先まで朔夜の体を調べる。指紋、脳のしわ、心臓の形に肺胞の数や形、全身の毛細血管、体を構成する臓器の形や血管の数やめぐりかたすべてが扉の力ギとなる。

『認証データー一致。どうぞなかへ』

扉は透明になり部屋のなかがすけてみえた。朔夜はそのかん心臓が口からでそうなほど緊張した。これで失敗すれば子供たちをたすけるどころか防御システムがさどうしてここからでられなくなつてしまつ。朔夜はほつとして扉をぐぐる。扉はまたもとのものにかわつてしまつた。リョクも朔夜とおなじようにしてそこをとおる。

その部屋にはだれひとりもいなかつた。部屋の中央に筒状の装置がメインコンピューターなのだろう。朔夜の予想にはんしてそこにはそれしかなかつた。リョクはディスプレイのひとつにちかづくと画面を操作はじめる。画面にはいくつかのカメラ画像と朔夜にはよくわからない文字の羅列がながれでいる。

「朔夜いきましょう。場所をそちらに転送しましたから」

リョクは朔夜にむかつていう。するとイヤホンからサラの声がき

こえてきた。それは朔夜の耳にもきこえてきているものでさつと四人にきこえているのだろう。

『リヨク、まつて。そこからアルたちの部屋をあけてあげてほしいの。じうやいメインコンピューターからじやないとあかないようになつているみたいなの』

「わかりました」

リヨクはこたえるとふたたびコンピューターにむきなおる。リヨクはふたたび朔夜にはよくわからない作業をしている。すると左のディスプレイの映像がかわってそこにはレセとアルの姿がうつしされた。アルはうしろ姿だがレセはカメラにむかってピースしている。そして、数分もしないうちにアルたちの扉はあいて部屋のなかへときえていった。

「おわりました。いそぎましょ」

そういうつてリヨクは朔夜のまえをよこさつた。なにもいわず表情すらない顔だつた。朔夜自身もリヨクと顔をあわせようとはしなかつた。リヨクの背中をおつよつに朔夜ははしる。腕の装置にはどこにむかへばいいのか標されている。ふたつの角をまがり三つの扉をくぐるとそこにはほかとはちがう空間がひろがつていた。絵画の背景のような部屋だつた。

そして、たくさんの女人人がいた。年齢はバラバラだが朔夜とそんにかわらない子からうんと幼い子までいる。彼女たちはギリシヤの女神たちのような服をきている。もしくはインドの女神象のようそんな布をまいただけの服を身にまとつていた。

彼女たちはこちらをみるだけで騒ごうともしない。朔夜は瞬時に羽衣をだしてかまえた。その姿をみて彼女たちはいろめきだつた。その反応はとても友好的なもので朔夜はうろたえる。

「朔夜お姉さまですの？私たちお姉さまに会つてみたかつたんですね」

そういうつてひとりの女がちかづいてくる。彼女はながく伸びたまづすぐな黒い茶色い髪をしていて、とてもやさしそうな印象をうけた。リヨクは朔夜のまえにたちはだかり女と朔夜をへだてた。する

と女はリョクをまじまじとみつめてから感激したようにいった。

「あなたがお姉さまの子供たちの父親ですね。赤ちゃんにどことなく似ていますもの」

朔夜は女の言葉に反応する。

「子供・・・？子供たちはどこにいるの？」

「案内してさしあげますわ。こちらです」

朔夜の言葉に女はにこやかにこたえる。女が歩くと道がわれていく。朔夜たちはそのあとにつづいた。あちらこちらで黄色い声があがつたり尊敬のまなざしをむけられている。朔夜にはそれがどうしてなのかわからない。朔夜たちがまねかれたその部屋にはちいさなベッドだけがおかれていてあとはただひろいだけの部屋だった。

朔夜がちいさなベッドにかけようとしたらとつぜん声がした。その声には聞きおぼえがあった。覚えがあるなんでものじやない、どこか懐かしかれえたある。そう、ながい間、無条件で信頼していた人の声。

「朔夜、ずっとあいだかつたよ」

声とともにあらわれたのはお父さんの兄、明人だった。

「おじさん・・・」

朔夜は手にもつた剣の形状をかえて、ただの布にかえてしまう。リョクはそんな朔夜のようすに警戒を強める。覚悟していたのにいざ会うとどうしていいのか困惑すらした。

「朔夜、やっと力にめざめたんだね。うれしいよ。ずっとまつっていたんだ」

なにもじらすに育てられていたときとかわらないやせしい表情。朔夜は頭でわかつていても心がついていかない。覚悟していたはずなのに、なんだったんだろうか。

「朔夜、きみの子だとおもうとほんとうにかわいい。こんな愛おしい子たちがうまれてくるとはおもいもしかったよ」

明人はそういうとベッドのなかの子供たちをのぞいた。その行動に朔夜はわれをとりもどすと瞬時に羽衣をもとの武器の状態にもど

す。

「彼らには人間の遺伝子がこれっぽっちも検出されなかつた」
その言葉に朔夜はカツとなる。子供たちになにをしたのかと。
「子供になにをしたのッ」

「なにもしてないさ。害がおよぶようなことをするはずないだろつ。
でも、まあ血液検査はしたがね」

朔夜のあらっぽい言葉とちがい明人の言葉はおちついている。覚悟していたはずなのにわかつていていたはずなのにいま朔夜は戸惑いや困惑をかくせない。この場の空気とはことなるほど赤ん坊はすうすうとおだやかな寝息をたててている。

「朔夜、きみが私たちのもとへかえつてくるというなら子供たちの未来は保障するよ」

明人は優しくいった。朔夜には「未来を保障する」といった明人の言葉の意味がわからなかつた。そして、混乱と戸惑いを抱えたままきく。

「どういうこと?」

明人は優しい態度をくずさず朔夜にかたりかける。朔夜が幼い子供のときのような、なにひとつかわらない優しい声と顔。でも、それと背反するような現実。

「朔夜が体に異常をきたしたように子供たちにもなにもおきないとはかぎらない。もちろん、朔夜の主治医が優秀なことはじゅうぶん承知している。だが、彼らにはきみたちの正確な情報がない。Ｋ０１、いやいまはリヨクというのかな。彼の情報ですらたしかなものはないだろう? げんにきみたちはなぜ子供がうまれるまでに三年もかかったのかわかつていのう」

子供がいるとわかつてからまだ一年半しかたつていのうはずだ。子供がかなり成長していったからサラは妊娠して五ヶ月だろうといつていた。それをあわせても一年もたつていのう。

「三年?」

朔夜のつぶやきに明人は子供にいいきかすような声をだす。

「やつだ。一年ぐらいだとおもっていたら。三年前のきみの誕生日にこの子たちを朔夜にやどした。まさか一度目でここまで成功するとはおもわなかつたがね」

朔夜はおどろきリョクはただその事実を悲しくきていた。朔夜は子供の身になにかおきたとき自分たちではどうすることもできなかかもしれない、という不安がわきおこる。そして同時に、ここになら、というおもいも。

「きみの血液もそつだが、調べたところによるところの子たちの血液も普通の人間のものでは適応しない。いくら傷のなおりがはやいとはいっても大量の血液を失えばきみたちでも死にいたる。知つていたかな」

明人はここで言葉をとめると寝ている赤ん坊のひとりの顔をのぞきこんでから、朔夜の顔をみつめた。朔夜の顔は不安で顔の色がきえている。

「しかし、ここにほきみたちとおなじ血液をもつた子たちがいる。ここではいかなる場合によつても対応できる。そうおもうだらう?」

朔夜は言葉がでない。ここにいれば子供たちにもしものことがあつたとしても対処できる確率は高い。実際にサラたちも朔夜たちのことをしろうと定期的な検診や検査をおこなつているがわかつていることはあまりにも少ない。

「あなたのもとへいたとしても私たちに未来はありません」

なにもこたえられずにただかたまつている朔夜にかわつてリョクがいう。その言葉はおもつていていたよりも強い意志を秘めていた。そして、リョクは返事をきくまえに明人にむかつてふみこんでいった。化け物のように変化した右手の爪をふりおとしたが明人にとどくことはなかつた。なにかに阻まれたリョクははじきかえされると身をひるがえして着地した。

「きみたちのことはなんでもしつている。私たちがつくり育てたのだ。どういう行動にでるか予見することはたやすいことだらう?」

明人はそういうと指をならした。するとどこからか赤ん坊たちを

さらつたやつらがあらわれた。そして、不敵な笑みを浮かべるといつたのだ。それは彼らへの攻撃命令でもあつた。

「あまり手荒なことはしたくはないが、しかたない」

リヨクはむかいくる敵にふみだす。朔夜を守るために両腕の形状がかわる。彼らの刃はけつしてリヨクの腕を傷つけることはない。腕に彼らの刃があたるたびに火花がとびかる。朔夜は刃をむけるべきなのかためらつていた。そんな朔夜をみてリヨクがさけぶ。

「朔夜、迷わないでッ」

リヨクの言葉に朔夜ははつとする。子供たちになにかあつた場合ここでなら対応できるかもしれない。でも、おきるかおきないかの出来事におびえて子供たちの未来に自由を奪うことはできない。子供に自由な未来をそんなおもいで出産を覚悟したのだ。リヨクだって自由に憧れてあの場所からでてきたのだろう。朔夜はそう信じている。それに、朔夜でなければ守れないものがあるはずだ。リヨクのようく悲しむものをまもつてあげたいしもうそんな存在を誕生させたくはなかつた。迷えば傷つけてしまう。

朔夜はおいかかつてきた敵に刃をふりかざした。ひとつふりでおそいかかってきた敵はたおれる。血がふるなか朔夜は刃をかまえなおす。両手でしつかりともつた刃を明人にむけた。

そのころ、アルたちは研究データーを収集していた。朔夜たちがメインコンピュータームでこここの部屋のカギを解除してくれたおかげでおもつたよりもスムーズに作業がはかどつていた。データーは大量にありどのデーターが必要なのかサラの指示をききながらあつめていく。

『レセ、瑠希と紗枝の出産にかかるデーターはない? 子供たちのデーターがほしいわ』

サラの言葉に「へい、へい」とてきとうに返事をかえすと大量のデーターのなかからさがしあじめる。なにがうつとおしいかというとCDディスクにかかっているのはアルファベットと数字のみの記

号ではまったくおなじようにみえる。それらの記号の意味を知らないレセたちはひとつひとつ確認していかなければならない。朔夜たちに扉をあけてもらつときにはこの扉のアルとレセ以外の登録はすべてけしてもらつた。だから、じゅうぶんに時間がある。それにここからでは外の気配は感じられない。しかし、なにも音がしないだけで扉のむこうではここをあけようと躍起になつてゐるかもしない。時間があるのかないのか微妙だ。

ディスクの中身を見るための機械音がどこかどこかでなつてゐる。ここにあるコンピューターは五台。それらすべてにアルファベットのことなるCDディスクをいれていく。『KG 3 561』とかかれたCDディスクを見る。するとそこには胎児の写真とその母体のデーターが画面にあらわれた。

「サラ、朔夜たちじやないが子供のデーターがでてきた。母体と胎児のデーターがそれぞれのつていて・・・ちょっとまつてくれ・・・成長にともなる子供の遺伝子の変化ものつてるぜ。どうする?」

サラはレセの報告をきいてなんのためらいもなく『KG 3』のデーターをすべてもちかえるように指示をする。CDディスクは五枚もありそれらをすべてせおつてきたりュックにいれる。

「サラ、きになるものをみつけた?」

アルは画面をにらみながらいつた。サラはアルの言葉に冷静になに?』とかえした。

「人間を女神にかえる実験データーだ。みるかぎりはじまつたところのようでデーター自体はすぐないがもつてかえつたがいいとおもうのだが」

『OK。もつてかえつてきて。人間をかえるつていうところ、気味がわるいけど』

「わかつた」

サラの指示をうけてアルは一枚のCDディスクをもちだした。『

G H K F 000』とかかれたそのディスクはほかにはない。その

とき、サラは朔夜とリヨクの異常にきづいた。あわてて映像をつないでふたりのようすを見る。そこには朔夜とリヨクはもちろん高瀬明人もうつっていた。そして、彼の合図で例の兵士たちが朔夜たちをおそいはじめる。

『たいへんよ！朔夜たちのところへはやくいつてあげて』

サラの声に状況を把握したアルとレセはあわてて回収したデーターをしまいこむと部屋の扉へむかう。そのとき扉がかってにひらいた。しかし、アルたちはあわてない。予想内のことだが一刻を争ういまはうつとうしいだけだ。

扉が破壊されてそれとほぼ同時にどびこんでくる銃弾をよける。銃弾をおうように敵がなだれこんできた。レセは敵がリヨクとおなじく01のタイプかどうかをみきわめてほつとする。すくなくともこの部屋にはいつてきた三人はふつうの人間だ。アルとレセはたがいに目で合図をすると拳銃をなん発か発砲する。それにあわせて三人の敵も銃を発砲した。

朔夜は一心に刀をふるつていた。よけいなことはなにもかんがえず戦うことだけをかんがえる。吹き散る血をあびながら必死に自分を殺した。ここで刀をとめるわけにはいかなかつた。朔夜は一心不乱に刀をふりあげては敵をかたづけていく。腕をおとされたもの、腹をきられたもの、それはさまざまで、すべての兵士を戦闘不能にしていた。リヨクもまつたくおなじだ。

明人は自分たちが劣勢だと判断すると子供たちを抱きかかえ逃げようとした。しかし、乱暴に抱かれたためか子供たちが目をさます。そして、その瞳はみるみる涙をためてぬれしていく。

『まてッ』

子供の泣き声に朔夜は反射的にさけぶと刃をなげる。その刃は確実に明人のところへととんでいったが明人をとらえることはなかつた。例のよくわからない壁が邪魔をしたのだ。

『朔夜こんかいはこれで失礼するよ』

ひやりとした乾いた笑いをこぼすと明人はいつた。文字どおり鬼神のような朔夜にきおとされて明人は一瞬でもこの壁の存在をわすれたのだ。

子供を抱いて逃げようとする姿に朔夜の冷たい闘志は燃えあがつた。鬼神などではあらわせないほどの殺氣をひめたつめたい顔だ。刃よりも鋭くひかるまなざしで一直線に子供たちのもとへとむかう。刃をひろい、その壁に刃をふりおとした。

朔夜はさげびながら腕に力をこめる。けつしておしかえしてくる力に負けないようにその力をやぶるよう腕に力をいた。そんな母親の声に反応するように子供たちの泣き声は烈火のごとく勢いをつけていく。そして、次の瞬間、明人の両腕をなにかがきりさいた。そして、明人はその衝撃に子供たちから手をはなした。

「リヨクッ！」

朔夜のさげびにリヨクは敵をたおし背をむける。朔夜にとびこむようにはねると防御することもなく壁へとつっこむ。リヨクが壁にぶつかる瞬間、朔夜はその壁をはねとばした。リヨクはそのまま子供たちにつつこんでいくと床にすべりこんだ。リヨクは明人を數メートルはねとばした。

「リヨクッ！」

朔夜はリヨクへとかけよる。リヨクの両腕で子供たちが無邪気にほほ笑んでいた。そして、朔夜に手をのばしている。朔夜はその顔にほつとして胸をなでおろす。鬼神とまで感じた朔夜の表情があつとゆう間に母のものへとかわる。

「はやくこきましょう」

リヨクはそういうと子供をだいたま出口へとかけていく。朔夜はふりかえった。はげしくふきとばされた明人はうずくまつてうめいている。立つことはできないのだろう。朔夜の胸にあつたのは肉親の情なのか、命あるものをモノのようにしかあつかえないものたちへの哀れみだろうか。

「朔夜、はやく」

リョクにうながされて朔夜はふりきるようにはしりだした。女神と称される彼女たちが悲鳴をあげている。朔夜は彼女たちの攻撃にそなえて神経をとがらせるが彼女たちはなにもしてはこなかった。部屋をでると悩みもせずによいの出口へとむかつた。たかぶつたいまの体には拳弾すらむそく感じる。

「おい、朔夜！」

とちゅうでアルたちと合流する。アルとレセは出口までて愕然とした。出口はふさがっていたのだ。しかも、うしろは敵にかためられてひきかえすことは困難だ。

「おねがいします」

リョクはそう言つと子供をそれぞれアルとレセにわたした。アルとレセはなにをするのかわからず不安な目でふたりを見る。

「朔夜、ここから地上までは約一キロです。できますか？」

朔夜はうなづくと神経を集中させる。敵のおつてをふりきるにはこれがいちばんだができるだろつか。そんな朔夜みてリョクはまえにたつ。朔夜はもちろんアルやレセをも背中にかばうよにしてたつとリョクは姿をかえた。漆黒の羽根、さけた口ととんがつた耳、爬虫類の肌に獸の足はまさに異形のものの証。かこんでいた敵はリョクの姿にあとずさる。化け物を見るような目をしている。

「や、やれっ！」

それでも敵のひとりは攻撃をうながした。無数の銃弾はけつしてリョクの体をつらぬくことはできない。リョクは応戦することはなくただ、朔夜たちを守るように攻撃をすべて防いだ。

朔夜はあせつていた。ここでつかまればアルたちの命はなくなってしまうだろ。人の命がかかっていることのプレッシャーからかおもつよにこがすすまない。神経をたかぶらせて自分のうちなる力を開放させる。言葉では簡単なことなのに実際はうまくいかない。一キロさきのはるか地上まで穴をあける。そのためにはいまつかえる朔夜の力のすべてがいる。あせりやプレッシャーのせいかうまく集中できない。ジレンマだけが朔夜を支配する。そんな朔夜に

リヨクが声をかけた。

「大丈夫です。心を鎮めて、なにもかんがえないで……そう、あなただけを感じて」

朔夜はリヨクの声に誘導されるようにすりつゝと自分のなかへとおちてゆく。さつきまでのざわつきが嘘のようにピタッとおさまる。なにもかんがえず自分のを感じてそれを体にためていぐ。

「朔夜、います！」

リヨクの声にみちびかれ朔夜は両手を天にかかげる。手のひらに自分の力を凝縮しなつた。はなれた力はなにものにも負けることはなく地を天をつらぬいた。朔夜はその場でたおれこむ。リヨクは悲鳴のような叫び声をあげるとまわりのもの鼓膜をやぶく。耳をおさえたおれこんだすきに朔夜たちをかかえて空へとまいあがつた。朔夜のおこした風に身をまかせて地上へとまいあがる。翼をひろげて空たかく、おいかけることは不可能なところへとにげていぐ。そんなりヨクたちの姿をみていた妖しい陰は姿をけした。

円柱の水槽のなか、コラコラとながい髪がゆらめいている。ふくよかな女性の体をちたものはその身になにもまとうていない。そんな円柱の水槽の水がぬかれしていく。そのなかでひとりの目をさます。うまれてからずっと彼女にとつて世界はこの水槽のなかだけであつた。水槽の水が完全にぬかれるとガラスがとりはずされる。彼女ははじめて外の世界へとでていくのだ。歩行という行動自体はじめてなのだ。彼女はすぐにたおれてしまう。

そんな彼女にひとりの研究員がちかよつてきた。ちかづいてきた研究員は年齢三〇代前半の男性でなんの警戒もしていない。彼女は顔をあげて研究員をみつめる。そして、にやりと笑うとちかづいてきた男の腕をとる。そして、そのままたちあがつた。男はとうぜんのようになその頬りない体をわざえる。赤みをおびた茶色い髪がふわふわと散らばる。

「・・・・」

彼女は男の耳元でなにかつぶやく。男はその言葉らしき音に疑問をもつと同時に耳たぶをかじりとられてしまった。男は悲鳴をあげてはなれようと暴れるが彼女はしがみつき、ダークブラウンの瞳をほそめてそのまま首にかみついた。まわりの研究員はわが身かわいさに男をそのままにして彼女を隔離するため壁をおろしていく。そんな光景を見物していたのは銀の髪の青年。

「理性がないのか・・・・」

そして、青年は彼女を隔離した部屋にいく。おいしそうに男を食している彼女へとむかつた。彼女をなんなく捕らえると、その両腕をしめあげる。彼女の腕はキシキシとしなる音をたてる。彼女はその痛みに悲鳴をあげた。

「檻のなかで子だけうませてやる」

彼女の耳につぶやくと腹部をおもいつきりなぐりつけて氣絶させ

た。おとなしくなった彼女を研究員にわたすとスタスタとあるいていく。彼女は遺伝的には完璧であるにもかかわらず理性という宝をもっていない。つまり失敗作だ。やはり唯一の成功品は彼女でしかない。

朔夜はベッドのうえで目をさました。無事だったのか、そうじやなかつたのかまだ冷静に判断はできない。返り血をあびた体はきれいになつていてパフスリーブ型のワンピースをきていた。ここはどこなのだろう?と部屋をみていたときだつた。コンコンとノック音がきこえた。朔夜はが返事をするまえに訪問者は返事をまたずしてドアを開けてしまつ。ドアを開ける乾いた音がひびく。

「田代めましたか?」

やせしい声の主はリヨクでその姿と声にほつとしている自分に気づく。どうしても、リヨクの姿をみると無条件にほつとしてしまう。朔夜はあわてて布団を頭からかぶつた。リヨクは朔夜の寝ているベッドにこしかけると布団のうえから朔夜の頭をなでた。ただなにもいわすになでているリヨクに観念して朔夜は布団からおずおずとままずそうに顔をだす。

「子供たちは?」

朔夜はといかけた。リヨクは朔夜から目をそらす。

「大丈夫です。アルとレセは鼓膜がやぶれて音がきこえない」と文句をいつていますが

朔夜はリヨクの言葉に無事にかえってきたことを確信する。そして、同時にリヨクの横顔からのぞく悲しげな瞳にきついた。朔夜がリヨクの変化した姿をはじめてみたときのあの瞳とおなじ悲しさだつた。朔夜はおもわず手をのばす。

「朔夜?」

リヨクは意図がわからず不思議そうな声をだした。どうしてどう、リヨクのあの悲しそうな目をみるとなにかしてあげたくなる。

今回のこととで自分がなんの役にもたたないことがよくわかつた。そ

れなのになにかしてあげたいなんておこがましいけど。

「朔夜……」

リョクがふたたび名前をよんだが朔夜は返事はせずそのままリョクの腕にしがみついていた。リョクはそんな朔夜に手をのばそうとしたとき、急になんの合図もなしにアドアがひらいた。あわてて朔夜がはなれる。

「ようすはどうだ？……」

そういうことはいつてきたレセはふたりのようすをみて、みるみるとひやかすような顔へとかわっていく。朔夜はそんなレセになにかいわれまことわきに声をだした。

「大丈夫。もうおきれるから」

そついつてベッドからでてこいつとする朔夜にレセはアレンからの伝言をつたえた。

「アレンが大丈夫そなうなら部屋にきてくれだつてさ」

レセのその言葉で朔夜は自分がいま海のうえにいることをじる。ここはフェインの本部、豪華客船のうえなのだ。

「わかつた。着がえるからまつてて」

朔夜の言葉にレセはひやかすようにリョクと朔夜にいつ。リョクはでていこうとベッドからたちあがつたところだった。

「リョク、手伝わなくていいのか？」

その言葉に朔夜は顔をまつかにすると怒鳴るようにふたりにいつた。普段でも一人で着がえているのに。

「はやくでつて！」

その勢いにおされながらもレセはたのしそうに部屋からでていく。リョクもおいたされふたりで朔夜のきがえをまつた。そんなリョクにレセはいつた。

「お姫様とはなかなおりできてないのか？」

「いつも着替えは一人でしますよ。朔夜は」

リョクはさえない顔でこたえる。レセはそんなリョクの態度に溜め息をつくと「はやいほうがいいぞ」とひとことだけのこしてその

場をさつていった。リヨクはなにもいわずその場にたちつくしたままだつた。人とつきあうことをしらなかつた自分がどうすれば“なかなかおり”できるのだろうか。まったくどうすればいいのかわからなかつた。

おおきな空の絵をはめこんだような窓ガラスのある部屋にはまったくおなじ顔の男がふたり。顔も背格好もなにもかもおなじ一人は色がちがうだけとゆう感じだ。アレンはいつもどおりの上品なスースをきいているが、もうひとりは黒いカツターシャツに黒いズボン。シャツのまえはゆつたりとあけられていてアレンがしているネクタイのチューリップのモチーフにかこまれた青い石のネックレスがひかつている。一人は髪の色と瞳の色もちがつている。アレンの馴染み深い黒い髪とはちがうせいか違和感を覚える。その男は白銀の髪をしている。

ふたりはむかいで座つている。白銀の髪をした彼は朔夜をみてどこかなつかしそうに微笑んだ。でもアレンは表情ひとつかえようとはしない。朔夜はどうすればいいのかすこしこまつたがリヨクがアレンのとなりにすわるようにうながす。

「朔夜、彼はルフナ・ラエリア。私の兄だ」

朔夜がソファにすわつたと同時にアレンは自分の「コピー」のような男を紹介した。

「え？」

朔夜の声を無視して、アレンははなしをすすめていく。アレンに兄弟がいたことなどしらなかつたしルフナは敵の名前ではないのだろうか。自分たちはルフナをとめるために活動してきたはずだ。

「大切なことをはなさなくてはならない。それは私とここにいる兄さんがみてきたことだ」

朔夜がどういうことかわからずとまどつているルフナが朔夜にほほ笑みかけていった。

「朔夜、僕達はいくつにみえる？」

朔夜はアレンとルフナの顔を交互に見る。ふたりの顔はとてもきれいにととのつていて実際よりは若く見えるのかもしれない。でも、ふたりは青年とよばれるような年齢だろう。

「・・・25歳前後ですか」

朔夜のこたえに満足そうにちいさく笑うとルフナはいう。

「そんなに若くみえる？僕たちの年齢は正確にはわからないが1000と数100といふところかな」

朔夜はおどろいた。そして、ふたりの顔をふたたびみつめたが、どうみても20代中盤という感じだ。だいいち人間ならならもうとつくに死んでいる。でも、アレンは人間とはちがうからこういうことがおきているのかな。それじゃ、朔夜も歳をとらなくなるのだろうか。

「不思議そうな顔をしているね。僕たちはね、ある程度の成長をとげると容姿の変化はなくなるんだ。つまり、ベストな状態までくると老いることがないんだ」

アレンは朔夜のほうに体のむきをかえると朔夜に説明をはじめた。「天女や女神がほんとうに天からまいおりたものだとおもうかい？ じつは私たちはこの地球上に存在するれっきとした生命体なんだ。そのものたちの末裔が私たちとその遺伝子でつくられた朔夜、きみだ」

とつぜんのはなしに頭がついでいかなくて朔夜はよけいに困惑の色を深めた。しかし、アレンはきにすることなくはなしをすすめてしまふ。まるで理解を求めてはいないともいうふうに。

「私たちの種族は進化の頂点をきわめた。高い知能、おもいのままにかえることのできる姿、そして、なにより人が進化のなかでしていった脳の機能の70パーセントをも自由にあつかうことができた。しかし、どの種族もおなじように進化のなかでなんらかの犠牲をはらいながら進化していく。たとえば渡り鳥が長時間とんでいるために肺の構造を複雑にしたために肺病を発生しやすくなつたように、私たちの種族もその犠牲をはらうことになつた・・・」

アレンはそこで言葉をきつた。朔夜はつづきをうながすようにアレンの言葉をくりかえす。なにがいいのかよくわからない。ここまでのはなしを聞くとなにも犠牲とよべるようなものをはらつてきたようにはおもえなかつた。

「犠牲？」

アレンはそれでもそのつづきをいおうとはしなかつた。それをみかねてルフナがはなしはじめる。

「僕たちがはらつた犠牲。それは生まれてくる子たちが全部メスだけだということだ。生命にとつてはいちばん深刻なことだ。種をつなぐことができなくなるからね。そして、僕たち以降まったくオスがうまれなくなつた。つまり、どこかでオスを調達しなければいけなくなつた。そして、異種族同士で子をつくることを可能にするために誕生したのが羽衣だ。人に羽衣をわたすことによつて子供をうむことができるよつになつた。しかし、それだけではおわらなかつた。きみもよくわかつてゐるだろ？」

ルフナはそういうと朔夜の目をまっすぐにみつめる。そして、朔夜はアレンとのもうひとつちがいをみつけた。ルフナの瞳の色は黒い色をしている。しかも、アレンの親しみやすい眼差しとはちがい、ルフナの黒い瞳には他をよせつけないような感じがあつた。

「羽衣をてばなしてしまえば彼女たちは数年もしないうちに死んでしまう。しかも、そうしてうまれてきた子供たちは純血ではなく人との混血で力をうしなつてゐるものたちがおおかつた。もし、もつていたとしてもお粗末なものだ。僕たちの足もとにもおよばない」

「でも、瑠希は男の子なのに」

朔夜の言葉にルフナは恍惚とした表情でこたえる。それはまるで国を救つた英雄をたたえるようなはなしかだつた。

「きみのオリジナルはゆいいつオスもうめるメスだつた。彼女はオスもメスも両方わけへだてなくうんだ。僕たちの妻である彼女はたくさんのお子を産んでいった。彼女によつて滅びへの速度はおちたかのようにおもわれた・・・しかし、彼女は人間のオスに恋をして

しまつた

朔夜はルフナの口調がすこしかわったようなきがした。その変化は「ぐごく微妙なもので確信はないけれど。アレンはルフナの言葉に説明をたしていくようにはなしあじめる。

「彼女はその男に一枚の羽衣をあたえた。通常、一枚しか誕生させることのできない羽衣を彼女は一枚も誕生させていたから、私たちは彼女をとがめはしなかった。だいたい私たちと人間ではあまりにも寿命がちがうから一時のことだとあまくみていたんだ」

アレンはそこでいつたん言葉をきると悲しいことをおもいだしながら言葉をつなぐ。

「男の村のちかくで争いがうまれた。男はその争いにまきこまれて瀕死の怪我をおつた。彼女は迷うことなくのこりの羽衣で男をたすぐた。私たちがそのことをしつたときにはもうつておくれだつた。彼女はその男の数十年の寿命のために自分の命をささげたんだ」

冷静をとりもだしたルフナはここからが本題だとでもいうような顔で朔夜にはなしあじめた。

「きみは彼女のすべてをうけついでいる。そのことはこんなかいの出産で男女が平等にうまれたことではつきりとしている。僕の願いは滅んでしまつた種族を復活させることだ。そのためにきみには僕の花嫁になつてほしい。純血である僕と君が子をふやせば種族はふたたび栄え、栄光のときはかえつてくる、そうおもわないかい？」

ルフナは朔夜に自分のもとへくるように誘つていた。ルフナはそういうとたちあがり、おおきな空へとあるいていく。朔夜たちはたちあがることなくルフナをみている。ルフナは窓に背をむけると朔夜にほほ笑みかける。

「きみのナイトはかなり優秀だね。さつきから私にたいする警戒をゆるめようとはしない」

ルフナはリヨクをみていた。朔夜はリヨクを見る。いつもとかわりないようなきもするけど、そういうわれればリヨクの気配がどことなくとぎすまされた感じだ。そのときだ、とつぜん空をとらえてい

たおおきなガラスが割れたのは。ガラスは内側にはじけどぶ」とはなく、そつまるで自分からかつてに割れたようにすらみえる。

「朔夜いい返事をまつてるよ」

そういうとルフナは窓のしたにとびおりる。ルフナの体が落下して一瞬きえる。朔夜はあわててたちあがると姿をたしかめに窓のほうへとむかつた。そして、したを確認しようとしたとき、白い羽根のはえたルフナが羽ばたいた。そして、そのまま羽ばたきながら姿をけした。“愛おしい”という言葉がいちばんあうだろうあの瞳はなぜ自分にむけられたのか。朔夜はそんなことをかんがえながら見てしまった彼のうしろ姿をみていた。ひろがつているのは海ととけこむような青い空。

ルフナがあらわれてから一週間がたつていた。朔夜たちは本部である豪華客船のうえで生活している。いろいろと情報がはいつてきているようだがもうひとつ裏がとれていなかつた。でも、そのなかでひときわ気になる情報があつた。それは韓国で人間をG-06にかえる大規模な実験がおこなわれていることだ。これは確かにたいへんことになる。ルフナのいつていたことはもうひとつ現実みがなかつたが、これが可能であれば現実みがますことになる。

朔夜は子供たちといつしょにお昼寝中だ。そのよこでリョクは読書をしていた。ながれるクラシックの音楽が午後のおだやかさを物語つていて。今日のぶんのトレーニングをおえた朔夜はほんとうに幸せそうにねむつていて。

瑠希が目をさました。きれいな紫の瞳をねむたそうにあけている。リョクは本をベッドサイドにおくと瑠希をだきあげる。まだ、おきるにははやい時間だ。やさしく寝かしつける。寝たりないのだろう瑠希はすぐにまた眠りはじめた。

朔夜のよこに瑠希を寝かせると子供にかこまれて寝ている朔夜の前髪をそっとかきあげる。幸せだと感じる瞬間だった。そのとき、ノックの音がした。リョクはおこさぬようそつとドアへむかう。そ

こにいたのはレセでレセは外にでるよう親指でしめした。彼もいまお昼ねの時間帯だとよくしっている。

部屋からでるとアルとサラがいた。ふたりはむずかしい顔をしている。こういう顔をしているときに仕事のはなしでいいはなしでたことはない。リョクを見るなりサラがノート型パソコンの画面をみるようにリョクのほうにむけた。その映像には複数の人間が点滴でつながっていた。点滴の袋にはもう薬品ははいっていなかつた。そして、次の瞬間、点滴につながれた人間が異形の姿へと変化したのだ。それは、この世の生き物とはおもえないもので形はちがうけれどリョクとおなじようにみえた。

「これは・・・」

リョクのつぶやきにサラはこたえる。映像のなかの異形の化け物は無機質な白い部屋のなかであばれてい。分別がつかないのだろう。

「人間を強制的にK-01と結合させたのよ。ただ、どうしてこんな姿になるのかはわからないわ」

「G-06との結合は無理でもK-01つまり羽衣との結合は可能ということだ。そして、この映像もみてくれ」

アルがそういうとサラが映像をきりかえる。全身を黒で武装したあの兵士がひとりその部屋にはいつてくる。しかし化け物は襲おうとはしない。それどころか甘えるようなしぐさでちかよつてくる。さらになにちがう映像ではなんと拳銃の弾が頭にあたり死んでいたのだ。リョクの体は鋼よりもかたく銃弾くらいはなんともない。

「これでわかるように、強度はまったく人間とかわらない。しいていえば頭を打ち抜くかまつぶたつにするしか死ないようだが」

レセがいった。これは失敗なのだろうか？リョクはかんがえる。ルフナは完全な種の復活をねがつっていた。そうかんがえるとこれは失敗作なのだが。

「問題なのは三日後にこの薬品が韓国にばらまかることよ。韓国の人口が約4万人、なんパーセントの確率で発症するのかはわから

ないけど半分でも2万人の人人が異形化するわ。しかも、これを治療する手だけはない。もちかえつてきた資料にもあつたけど、K-01は他の生物の細胞と結合すると結合された生物はそれをのぞかれた状態で生きることは不可能。つまり結合したが最後、もとにもどることは100パーセント不可能ということね。しかも、すこし操作して人間の遺伝子にしか結合しないようにしてあるわ

「そうなると、人間はやつらを始末するつてわけだ」

レセがいった。なるほどはなしがみえてきた。ルフナの狙いがわかつたのだ。純血が朔夜、子供たちそしてアレンとルフナの5人しかいない。たとえ朔夜がどんなに純血の子供を男女へだたりなくうめたとしてもそれはほんの少数でしかない。そのまま、ねずみこうで増えたとしても人間が頂点をきわめている状態では繁栄はむずかしい。つまり単純に人間は邪魔なのだ。約60億の人間を始末しなければならない。

「この映像でもわかるようにおなじ遺伝をもつものを仲間としてかれらは決して攻撃しないわ。たぶん、朔夜やリヨクに襲いかかってくることはない。でも、みてわかるように人間は襲うの。たぶんK-01をもたないものはすべて彼らの標的になるとおもうわ」

K-01で化け物にかえた人間の人間をおそわせ。襲われた人間もその発症した人間をおそう。奇妙な伝染病だとおもわせること治療法がないことがその悪循環に拍車をかけて人間はみずから滅ぶというわけだ。

「阻止する手段は？」

リヨクの言葉にサラはあたらしい情報をつたえる。

「三日後の正午、チヨンジュの上空でK-01をのせた爆弾が爆発するわ。大気拡散でひろがったときの被害は予測できないけれどまちがいなく爆発地点から半径100キロは汚染される」

「発射してしまうまえに回収すれば問題ないのでは？」

リヨクの言葉にサラは残念そうに首をふるところたえる。

「発射場所がわからないの。韓国の研究所も正確には場所が特定で

きていない。そうなると上空でとめるしかなければ、この情報もどこまで信憑性があるかうたがわしい。ほとんど運ませだわ。運よく発見できたとしてもどうして回収できる?」

「私は朔夜なら爆発をとめることができます。あとは正確な位置さえわかれば」

「正確な位置・・・」

サラはつぶやくとふとおもいつく。ひきだしから一枚のディスクをとりだすとデータをおこした。それは朔夜とその子供たちのデーターだった。

「これを見て、朔夜と瑠希のデーターなんだけど・・・」

三人はパソコンをのぞきこむ。サラはマウスでみてほしいデーターをひきだした。それは偶然とれたデーターだった。

「朔夜の脳波を測つているときのものよ。ここをみていて・・・わかる一瞬、脳波が乱れたでしょ。次はこれ、瑠希のデーター・・・。わかった? 瑠希の脳波も乱れたでしょ? 朔夜の脳波が乱れるほんの一瞬まえなの」

レセもアルもリヨクでさえサラがなにをいいたいのかわからない。それでという顔をしている三人にサラはさらに説明をつづける。

「いいこのとき、朔夜と瑠希は別の部屋でそれぞれ脳波をしらべていたのよ。瑠希がとつぜん泣きだ。そしたら、朔夜が反応した。今まで偶然だとおもつてたけど、朔夜の脳波が乱れるときがたびたびあつた。正確なデーターがないからいいきれないけど朔夜と子供とのあいだにはなにかテレパシーのようになにかあると呼びあうとおもう。実際、脳波が乱れたあとはすぐに朔夜は子供たちのところへいこうとするわ」

サラの言葉をきいてアルとレセはひとつおもいあたることがあつた。それは朔夜が子供をうむときだ。リヨクはなん数十キロとはなっている朔夜の出産を感知していたのだ。人外なやつとあまりきにしなかつたが、これがサラのいうテレパシーなら応用すれば爆弾の

場所があるていど判明する。

「なるほど・・・リョクも朔夜の異変にはいちばやくさびくな
アルはそういうとリョクをみた。

「みずから意志をもたない細胞の状態なら「まくいけば」いちばん
ぶこともできるわ。リョク、いまからテレパシーで朔夜をおこして
ここによんでもくれる?できるかしら?」

サラの言葉にリョクはうなずくと目をとじて集中する。朔夜のこ
とをかんがえて朔夜によびかけてみた。これで正解なのかよくわから
ないがそれでいいようなきがする。その状態で数分がすぎた。

「やっぱ無理か・・・」

レセが残念そうにつぶやいたとき、コンコンとノックの音。三人
はドアに注目した。ゆっくりあいて顔をだしたのは朔夜だった。

「あの~、リョクいます?」

「これなら、いけるかもしれないわ」

ようこぶサラの声にうれしそうにふたりも賛同する。リョクは目
をあけると朔夜にほほえみかけた。朔夜はなにがどうなっているの
かよくわからず、顔に疑問をはりつけていた。

韓国チヨンジュ上空。地上は雲に隠れてここからはみることはかな
わない。そして、朔夜とリョクはそんな場所にいた。時計をみると
あと5分で正午になる。リョクは朔夜とともにK-01をつんだ爆
弾をよびよせようとしている。リョクが朔夜にしたこととおなじよ
うにしてているのだが、大丈夫なのだろうか。一応、地上でサラにも
探してもらっているがレーダーにうつらないよう操作されていると
かんがえるほうがまともだ。

朔夜の羽衣は鳥の羽になつていてその翼は清らかでうつくしい。リ
ヨクも姿をかえ自分の翼でとんでいた。このまま地上に降りたてば
人々は天使と悪魔が降臨したとおもうかもしれない。

刻々と時間はながれていくが爆弾があらわれる気配はない。朔夜が
失敗したのだろうかと不安になつた矢先、とおくから地響きのよう

なひくくおもい音がした。それは確實にちかづいてくるようだつた。朔夜とリョクは田をあけるとあたりをみまわす。きこえてくる音はあまりにもたよりになく方角をたしかめるには条件がわるい。それでも、耳をくばり、目をはりながら懸命にさがす。そのとき、朔夜の田にキラッと光るもののがみえた。朔夜はより集中してその光を見る。

「リョクっ、あれッ！」

朔夜は光りをとらえると背をむけて耳をすましているリョクに声をかけた。リョクも光りの物体をとらえる。ふたりは一瞬、目をあわせると爆弾のほうへと腕をのばした。そして、集中する。

遠くできこえていた地響きがだんだんとちかづいておおきなものになる。会話が成立しないほどにちかづいてくる。朔夜は必死でアレスを脱出したときの感覚をおもいだそうとする。それでも、あまいうまくいかない。シミコレーションですらあまりうまくはいかなかつた。ほほぶつつけ本番になつてしまつた緊張と不安。

せまいくる圧力と轟音。朔夜の体にはそのリアルさとおれてしまいそうな心があつた。このままで成功しないと心が折れそうになつたとき、リョクが耳元でなにかいつた。言葉はわからなかつたがひとりではないことをおもいだす。不安な気持ちをリョクがささえてくれるることをおもいだした。ここにくるまえリョクはいつてくれたのだと「なにがあつてもそばにいる」と。

ひとりではないことがこんなにも心強い。朔夜はこの雲のしたでふつうに生活する人々のことをおもつた。ここだけではない。これが爆発したら世界中の人たちがふつうの生活をなくしてしまつ。自分がそうだったように。爆弾は朔夜をおしかえそうとゆつくりと前進している。

「わわわああああああ

朔夜は叫んだ。自分がどんな声で叫んでいるのかももうわからないほど轟音はちかづいていて、朔夜にとつてこれがラストチャンスだつた。かわせるギリギリまでがんばる。このチャンスを逃してし

まつたらリョクは朔夜の命を優先してこの場からはなれる。そのことはみんな承知している。

不意に朔夜の世界から音がなくなつた。さつきまでの轟音や圧力、風もない。ただ、そこには朔夜の意志だけがある。そして、朔夜のなかでみちでいくなにか。体のうちからとめどなくあふれでるようなそんな力をかんじた。その力のながれに身をまかすことだけしかしたくなかった。いや、できなかつた。正解を体が細胞がしつくるようなそんな不思議な安心感。

リョクは迷つていた。朔夜がなにかをつかみかけていることはわかるがもうこれ以上は。朔夜の身をなによりも優先すべきなのに、それはあたりまえなことなのに、朔夜の力を朔夜のおもいを信じてみたい。たとえそのせいであぶくなつたとしても自分の身を犠牲にして朔夜を守ればいい。そんなおもいがリョクを抱いた瞬間。朔夜の雰囲気がかわる。感じたことのない朔夜の感覚にリョクは不安よりも安堵を感じた。いける。

K-01をのせた爆弾が変化をみせはじめる。スピードが急激におそくなつたのだ。それだけではない、爆弾をつつむ弾力のある力。そして、手のほんの数センチさきでとまつた。それだけではない。つまっていた爆弾のタイマーもとまつている。完全に無効にすることができたのだ。

リョクがそのことを確認し爆弾をさせられるためそつとふれる。爆弾が起爆しないように分解していく。一色の液体がまざると爆発するしづみになつていた。コードをきりそれぞれの液体がまざらないよう分解しパラシユートをつけておとしていく。レセがとちゅうで回収することになつていて。リョクがK-01を手にもつたとき、朔夜の瞳に意志がやどる。朔夜はそのとたんにさせられる力をなくした。しかし、K-01は回収したあとでおちていけはしない。朔夜はどうやらトランス状態になつていたようだ。

「朔夜、おわりましたよ」

リョクの言葉に朔夜はK-01を見る。K-01は卵のような力

プセルにはいついていて、おおきさもリョクの手におさまるものだつた。といつてもいまのリョクの手はおおきいからダチョウの卵くらいといったほうがわかりやすい。でもこれぐらいのものでサラのつていたほどの被害があるとはおもえないのだけど。

「はやくもどりゅう。つかれちやつた」

朔夜はそういうと白い羽根をばたかせる。リョクも朔夜をおいかけて黒い羽根をばたかせる。ふたりはおわつたことへの安堵と達成感で油断していた。そのとき、リョクの体をなにかがかすめた。リョクも朔夜も反応がおくれる。猛禽類が獲物をとらえるような鋭い「づ」。

「やつぱりみにきて正解だつた」

リョクからK-01をうばつたものはそういう。リョクは自分がK-01をもつていなくて相手の手元をみてはじめてきづく。

朔夜はその顔をみて信じられずつぶやいた。

「ルフナ」

白い羽根のはえたルフナはやさしく笑うとK-01をゆつくりとおとした。朔夜はなにがおこったのかわからず反応がおくれる。それでも、のこりの力でK-01をひろつた。空中にういたまま不安定な状態のK-01。リョクはそれをうけとめにいきたいがそれができない。ルフナの気配がそれを許はしないのだ。格がちがう。その本能的なおもいが体が無謀にうごくことを拒む。

「朔夜やつぱりみは油断できない」

朔夜はK-01を自分のもとへ移動させるだけの力はない。それをえているので精一杯だつた。そんなことをみぬいているのルフナはK-01に自分の力をぶつけた。朔夜はその力をはねかえすことができなかつた。そして、K-01は衝撃をうけて加速して落してしていく。

「あつ！」

朔夜はあわてておいかける。おなじように落すとそれをおいかけた。しかし、力をつかいすぎた朔夜にはもう羽衣を維持するだ

けの力はなかつた。朔夜の白い清らかな羽根が崩壊していく。そして、そのままきをうしなつた。ものが落下するように朔夜の体がおちていく。

「朔夜ッ」

リヨクは朔夜をおいかける。リヨクには朔夜たちのように遠隔操作をするような力はない。空気の抵抗をなるべく殺すようにリヨクは朔夜にむかつて落下する。そんなふたりをみてルフナは満足そうにつぶやいた。

「残念。チェックメイト」

そして、その場からきえる。のこつたのは舞いちら一枚の羽根だけ。

リヨクは朔夜の体に手をのばすと自分の腕のなかにひきいれる。しっかりと両腕で抱きしめると黒い羽根をひろげた。羽根は落下の圧力に負けることなくしつかりとひろがり落下を阻止した。そのままで、二、三回はばたくとリヨクは腕のなかの朔夜の安否をたしかめる。

「んう」

朔夜はちいさく声をもらした。朔夜は無事なようだ。リヨクはきをうしなつた朔夜を安全な場所へとつれていこうとした。とおくからレセののつている飛行機がみえた。リヨクははやくこの場から撤退しなければいけないことをつたえる。そして、なるべくはやくその場からはなれた。

地上におちた卵型のカプセルは落下の衝撃で放射状にとびちり、風にのつてひろがつた。K-01によつて異形化したものたちは人としての心をうしないみにくく羽根をばたかせ世界へととびちつた。水をも汚染し一ヶ月後には朝鮮全土を侵食した。朔夜がそのことをしつたのは三日たつたあとのテレビのニュースでだつた。

テレビでは異形化したものへのあつかいについて連日、口論されそれでも解決はしなかつた。各国独自で対策をねり、ある国ではそ

れらをとらえ隔離し、ある国では殺した。感染経路や感染条件もわからない人間たちはただ不安に怯え恐怖した。感染者があばれて檻を破壊しようとしている。それをみたものたちがあわてて麻酔銃をうつてているシーンもあった。

朔夜はその光景に責任を強く感じた。一度はこの手につかんだのだ。もつと自分がしつかりしていればこんなことにはならなかつた。朔夜は自責の念にかられ、ふさぎこんでしまつた。世界では二次感染がおこり保護をうたつていた人々にもそんな余裕がなくなると本格的に患者の殲滅へとのりだした。ルフナがえがいたように世界はかわつていく。

朔夜がふさぎこんだまま一年がすぎた。朔夜はあれからまるつきり食事をとらなくなり、自室からでてきこなくなつた。圧倒的な流れにはかなわないことへの絶望が朔夜からすべてをうばつていく。子育てをすることもなくただ、海の上をうかがふこの船からみえる空をみてすこす日々。体をささえるのは管からながれる透明な栄養剤だけだつた。すっかりやせ衰えた体には以前の服がかなしくうつる。リヨクによつて手いれされた長い髪だけが元気だつたころの朔夜の面影をもこしている。

リヨクは朔夜に子供たちをあわせなかつた。とてもあわせてあげられるような状況ではなかつたのと、リヨク自身、朔夜の反応がこわかつた。もしあわせてみてなんの反応もなければもう朔夜が自分のところへはけつしてもどつてこないようなきがして。

サラは点滴を補充するたびに朔夜に声をかけたが、朔夜はどんなはなしをしても反応しなかつた。だた、流れしていく空を見るだけ。朔夜の体にはもうなにもやどつてはいないようなそんな状態だつた。フェインの衛星通信にアクセスがあつた。それはルフナからだつた。アレンはそのしらせをうけるとただちに回線をつなぐように指示した。アレンはセンター司令室でルフナのアクセスにこたえた。

『やあ、アレン。ご機嫌いかがかな？』

ルフナの声だけがひびいた。アレンは返事をしない。少しまがあき、ルフナはきにするようすもなく本題にはいりはじめる。

『朔夜はいないのか？もし、いないならよんできてくれ。いますぐにだ』

「朔夜はとても外にでられるような状態じゃない」

『それじゃあ、はなはすすまない。K-01のワクチンのことだ。きになるだろ？朔夜がきたまアksesしてくれ』

アレンが断るとルフナはそういうて回線をきつた。部下が回線をつなげててくれたがつながることはなかつた。そして、アレンはあきらめたように朔夜をつれてくるようにとアルにつげた。アルはどうぜんのように困惑したがそれでもそれしか手がなかつた。ワクチンがほんとうか嘘かわわからないが、自分たちにその用件をけりとばすだけの度胸はなかつた。

数十分もたたないうちに朔夜があらわれた。レセとサラもいっしょにいる。朔夜はリョクに抱えあげられそれでもここに意識はないようだつた。白い服の裾からのぞく白く細い足が痛々しかつた。アレンはふたたびルフナにアクセスするように指示する。回線がつながつた。

「ルフナ、朔夜をつれてきた。K-01のワクチンのはなはほんとうか？」

アレンの言葉にルフナは『ああ、ほんとうだ』とこたえるとつづけてはなしはじめた。

『あれは実験のなかで偶然できた産物だ。いや、発見したといっていい。リョクきみがそのきっかけだつた。なぜ、あのような姿になるのか？理性がないのか？それは羽衣の本体がないことに関係する。リョクきみは朔夜よりさきにつまれたからそんな姿になつた。しかし、朔夜がこの世に誕生するには羽衣であるリョクがさきに生まれてくることが必要だ。君たちが戦つたことのある兵士たちはリョクとおなじように女神を誕生させるためのものにすぎない。』

リョクは朔夜をみた。朔夜はなにも反応せずうつむいて自分の手

をみている。サラは疑問におもつた。主のない状態でうまれることで理性をたもてないのならリヨクはどうなのだろうか。

「矛盾があるわ。あなたのいうことが正しいのならばリヨクがいま理性をたもてていることはありえないわ」

サラはいった。サラの返答にたんたんとした声でルフナが返答をかえす。

『リヨクの場合、まったく主が存在しなかつたわけじゃない。細胞レベルであるが朔夜は存在していた。しかし、そこからさきに発展するにはリヨクの存在が必要だったというわけだ。その証拠にリヨクは主の完全な誕生をまちのぞんでいただろう?』

サラたちはその言葉にリヨクをみた。リヨクはそのことを否定はせず肯定の意味でうなづく。自分という存在を意識するもつとまえ、それこそ誕生とともに朔夜をおもいつづけた。あえない日々のなかでつのつていったのは彼女なしではいきてはいけないとゆうおもい。会えばそのおもいはより深くなつた。

『今回ばらまいたものは主をまったくもちはしない。つまりK-01は主が存在するが、今回のK-02には主はいない。さらに厳密にいふとK-01にはうまれながらに人間の遺伝子をもつているとことだ。遺伝子は形成のとちゅうでそれぞのバランスをとりながら形づくる。そのことが、リヨクたちに理性と考える力をあたえている。女神の一部であつて個別であるのはそのためだ。しかし、K-02はちがう。複数の羽衣から形成されていることと人間の遺伝子をもたないため生き物にふれるとそれに寄生して支配しようとすると。その性質をいかしたまま人にだけ反応するようにしたのがK-02だ』

K-01とK-02そして、女神の関係はわかつた。では、どうすればその支配から救いだせるのか、アレンはきく。

『説明はわかつた。それでどうすればいい?』

『簡単なことだ。指示してやる主をつくればいい。女神の遺伝子を感染者の体にいれることで体のなかに主をもつことになる。まったく

く、ただの人間にもどることは無理でも人の姿にもどり理性をとりもどす。そして、つづったワクチンがS 98だ』

そこで言葉をきるヒルフナは朔夜にかたりかけた。その声はたんたんとしたものではなく、やさしく口説くよにはなしあじめる。『朔夜、僕とのはなしを覚えていただろつか？きみが僕のそばにいてくれるというのならこのワクチンをわたしてもいい？』

ここにいるものはその条件に絶望をかんじた。朔夜の状態がありにもわるすぎる。いまのはなしすら理解できているかわからない。こんな状態の朔夜をわたしてしまつことはできなかつた。もちろん元氣であつてもわたせるはずなどない。

『もちろん。子供もきてくれるとうれしいけど、きみをえいればそれでいい』

とても了承できる内容ではなかつた。はなしあわなくともこたえはきまつている。アレンは断わろうと口をひらくつとしたとさ。

「私だけいく」

それは一年ぶりにきく朔夜の声だつた。しかし、弱々しいものではなくしつかりとしたものだつた。それでも、ながいあいだ食事をとつていなかつたせいか声にはりはなかつた。

「朔夜、私はつ」

リヨクはひさしぶりに朔夜の声がきけたことよりも、一年ぶりにきいた朔夜の声に拒絶されたことがショックだつた。リヨクの言葉に朔夜はしつかりとリヨクの瞳を見る。そこには強い意志がやどついていて有無をいわせないほどの強さがあつた。

「ルフナ、私だけがいればいいでしょ。子供は必要ないでしょ。おなじように有無をいわせないという意志をふくんだいいかだつた。だれもなにもいえなくなる。音も動きも一瞬とまる。それをうごかしたのはルフナの声。

『もちろん。朔夜だけいればいい』

「どこにいけばいい？」

『むかえにいくよ』

朔夜は「わかった」とこたえる。そして、念をおすよつてこいつた。
「かなづ。Ｋ０２のワクチンをもつてきて」

『わかつていいよ。もつてこなかつたらひどいめこあつへ。』
ルフナのこのふざけた言葉に朔夜はこたえる。

「逃がさないわ」

朔夜からでたとはおもえないような声ですごんだ。烈しい感情をしずかにふくんだそれは、その場にいるものを凍てつかせるほど効果があり朔夜を説得しようとかんがえていたもののおもいも同時にうちくだいた。ルフナの声も神妙な声にかわる。

『一時間後にもかえにいく』

そして、通信はきた。朔夜はリョクからおりるとやせほそった両足でしつかりとたち、ほほがこけてしまった顔でリョクにアレンにそして、その場のものたちへいった。

「子供たちをたのみます」

その一時間後、護衛をつれたルフナが朔夜をひきとりにきた。朔夜は最後に子供たちに子守唄をうたつた。それは、よく朔夜がくちずさるもので、また、広瀬高志に歌つてもらつたものだつた。お父さんはへタクソだつたけど。

朔夜は子供たちがやすらかに眠つたのをたしかめると迷いなく部屋をでる。リョクの瞳がたえられないものを見るように悲しくて、朔夜はきつとわすれられないだろうとおもつた。朔夜とひきかえにワクチンを手にいれたがだれの心にもやりきれなさがのこるのだろうか。

朔夜がさつていいくその背中をひきとめるために手を腕をのばしてだきしめたかった。いまならまにあつとゆうおもいともうまにあわないとゆうおもいどちらも正解でどちらも不正解のようにおもえる。けれど、その判断はつきはしない。

朔夜の表情にもその背中にもいっそこの迷いはなく。潔いほど覚悟をきめていた。そのことがみんなの心に哀愁をいろいろこしていく。そして、さつていいくの音がはなれるその音のくもしさに

リョクの瞳からはひとすじの涙がながれていて、だれもその涙をとめようとしなかった。しづかにながれる涙はリョクのおもいの深さやおおきさをあらわしているかのようだ。リョクがはじめてながした涙はぐるしくて哀しいおもいだけが胸にのじる。もう、会えないかもしない朔夜の姿はながれる涙でにじんではつきつてしまふことめることができなかつた。

あれから六年の月日がたつていた。朔夜が自分たちのもとをさつたあの場面はいまだわすれられない。子供たちはもう七歳になつていて、ふたりはおなじ顔をしているのに紗枝は朔夜に雰囲気がどうなく似てきた。リヨクは“朔夜みた”とゆう報告をきくたびに子供たちをつれてその場所にむかつた。しかし、朔夜をみつけることはかなわなかつた。

「パパ、ママはきれいよね？」

ふたりはリヨクの膝にのつてアルバムをひろげている。アルバムのはじめのほうは朔夜と子供たちがうつつていの写真だつた。お腹をおおきくしている朔夜やうまれた子供といつしょに寝ていての写真はリヨクがみてきた朔夜だ。リヨクは膝のうえにのつていての紗枝にいう。

「そうだね。ママはいちばんきれいだつたよ」

紗枝とは反対の膝にのつていての写真がどうぜんのようになつた。

瑠希はやんちゃ坊主でおもわぬことばかりをして手をやかす。

「あたりまえだろ。だつて、おれらのママだぜ」

ふたりをつれて朔夜をさがしに世界中をあるきまわつたせいが子供たちはいろんな国の言葉をはなすようになつた。ただ、日本語だけはリヨクがおしえた。日本にいく機会がなかつたからだ。子供たちが日本語をはなすことでの朔夜とつながつていてのようなきがした。だから、普段はなす言葉は日本語になつていての。

「B u o n a o r e n o」

そういうてドアをあけたのはサラだ。サラはイタリア人だからイタリア語をはなす。朔夜がいたときにはしらなかつたことだ。アルはドイツ人、レセはフランス人。これも朔夜がいるときにはしらなかつた。興味がなかつたから朔夜以外。でも、いまは朔夜だけをあもいつづけるのはつらかった。わされることはできそつもないなら、

せめて意識がそこへいかないようにしてほしい。

「今日も元気そりでよかつたわ。パパ借りていいかしら?」

サラは子供たちの頭をやさしくなでるとそういった。子供たちは「いいよ」とわらいながらこたえる。朔夜がのぞんだ幸せがここにあるのに朔夜の姿はそこにはなかつた。サラはアルバムのなかでわらう朔夜の写真を目に入れると、

「サラ、おれたちのたんじょうびおぼえてる?」

瑠希がいった。瑠希はプレゼントにほしいものをみんなにいいふらしている。プレゼントはふたりの楽しみで毎年くる誕生日、クリスマス、なぜかバレンタインやホワイトデーがちかづくとそれわざわざわざだした。そして、あと三日でふたりは八歳になるのだ。

「わかつてゐるわ。日曜日におおきなプレゼントをもつてお祝いにいくわ」

サラの言葉になんども念をおしている瑠希と「わたしも、わたしも」とさわいでいる紗枝。そんなふたりをなだめるとふたりで部屋をでる。部屋をでるとさりの上着からカギがおちた。

「サラ、おちたよ」

紗枝はきづいてサラにしらせた。サラはふりかえると紗枝を見る。紗枝は手をつかわずにサラにおちたカギをわたす。サラはそれをうけとつた。そして、「Granze」というと部屋をでていつた。紗枝にも瑠希にも朔夜とおなじ力がある。リヨクのように体を変化することはできないが不思議な力があつた。

ふたりをのこして表にでるとサラは仕事のはなしをはじめた。朔夜とひきかえにえたK-02のワクチンはたしかに画期的な効果をしめしたが、まったくおなじものをつくることはかなわなかつた。複製品としてつくつたワクチンは姿を人間にもどすことはできても理性をとりもどすことはできなかつた。

「これが今回完成したワクチンだけどでもやつぱり理性をとりもどさせることはできないわ。核となる物質はやっぱり女神、彼女たちから採取しないとダメみたい。核がないままじゃどうしても完全な

ものはつくれないわ」

資料とともにサラが説明をはじめる。Ｋ－02の完全なワクチンの半分を世界中にばらまいた。といっても、Ｋ－02のように大気中にながす方法はできなかつた。直接、ある一定のワクチンを接種させなければならなかつたのだ。かといって、なんの知識もない各国の代表者にそれをおくりつけてよいものか悩んだ結果、自分たちでワクチン接種をすることにきつた。

「おくれてきたワクチンでは対処しきれない、とゆうわけか」いまにも溜め息をつきそうな声でアルはいった。リョクはこれら自分がどううごけばいいのかきく。リョクにとつては人間がどうなつてもよかつた。ただ、憤りだけがつのつた。朔夜を犠牲にしたにもかかわらず対処できない。そのことが悲しく無力におもえた。「どうします。へたに人間の姿にもどすとみわけがつかなくなつてしまつ」

リョクの言葉に八方ふさがりなようなきがして、レセが溜め息をつく。朔夜がいなくなつてからもこうして活動しているが具体的な方向性はみえていない。Ｋ－02におかされた人間のように未来を創造するだけの力がなかつた。ただ闇雲にはしつっているだけだ。

「リョク、いちど日本にいってみないか？」

アルの言葉にリョクはどう反応すればいいのかわからない。朔夜と自分がうまれた場所。その場にはもうなにものこつてはいないのに、いまさらいつてなんになるのだろうか。

「子供たちがいま私たちの希望だ。未知の力を彼らは遊びのなかでコントロールしている。日本で生活させることができが彼らにとつていい刺激になるかもしれない」

「いいでしょ。そのかわり条件がある。朔夜が育つたあの家をからられるのならいきます」

リョクは覚悟をきめた。子供たちはずっと母親の姿をついている。アルバムをひらきながら母親のはなしをかならずきいてくる。母親の育つた日本にもいつてみたいとふたりはいつていた。それでも、

いげずにいたのは自分のかつてなエゴからだつた。怖かったのだ。彼女の存在をのこす国にいくことはものすごく恐ろしいことのようにおもえた。

「わかった。用意しよ。」

そういうつてアルはケイタイで電話をはじめた。相手はアレンだろ。ふたりはまえもつてはなしあつていたにちがいない。リョクは日本をおもいだす。どの国よりもながくいたのにどの国よりもとおく感じる。いまリョクにとつて日本はそんな国だつた。子供たちにこのことをしらせたらさぞよろこぶだらう。いちど母親の育つた国をみてみたいとさわいでいた姿が目にうかんだ。母親を追いかけている一人にはいい刺激になるかもしれない。

朔夜が育つた家は売りにだされていた。それをアレンが買いつてくれたのだ。売っていたらここにもどつてくることはかなわなかつたかもしれない。子供たちはバタバタとはしりまわつて家のなかを探索している。あとからレセもくることになつていて、ここで生活するのは自分たち三人とレセとの四人だ。レセは子供たちの護衛役だ。リョク自身もしばらく休みをもつっているが、いちよう護衛をつけることにした。

リョクがこの家にきたのはあのときの一度だけだがそれでも、朔夜の気配がどこかしらに感じられる。家具が十年もそのままおかれているせいかもしれない。ほこりっぽい部屋の空気をいれかえるため窓をすべてあけた。さわやかな風が家のほこりっぽさだけを一掃する。

「パパ、にかいにベッドがあつた。ママのかな？」

リョクの手をひっぱつて瑠希がいった。そのまま瑠希はリョクを二階につれていこうとする。リョクは手をひっぱられ、そのままつれていかれる。ふと朔夜をおもひ。こうして朔夜に手をひいてもらわないと自分はふみだしていく道すらわからない。

朔夜の部屋はあのときのままだつた。家具にかかつっていた布はも

うとりのぞかれていて、床にまるめられている。ベッドにつづぶしている紗枝はいいにおいがするといつてようこんでいた。リョクは窓をあける。ベッドにすわると子供たちが膝にまとわりついてきた。

リョクに質問をする。

「じいがママのおへや？」

紗枝はそういうて部屋をみわたす。リョクが「やつだよ」とこたえるとふたりは口々にいつた。

「わたしここでねる」

「おれがここでねるんだ。さればこわがりだからパパとねろよ」

「パパとここでねるの」

ぎやあぎやあとケンカをはじめたふたりにリョクは「う。「三人でねましょ。しばらくパパも仕事がないから、いつしょにいられますし」

リョクの言葉にふたりはパアとうれしそうな顔をすると「ほんと、ほんと」と念をおしてくる。リョクは「ほんとうです」といつてふたりを納得させた。夕方になるとかたづけもだいぶんおわついていてセにふたりをまかせてリョクは外にでた。ゆつくりとこのあたりをみてまわりたかったのだ。朔夜がふつうに生活していたときのまますべてがのこっているとはこれっぽっちもおもわないが彼女があるいた道だとおもつと寂しさが補えるようなきがした。ただ彼女を感じたい。

日がほとんど沈んでいて赤い空をおつようこ暗く青い空がかぶさっている。日本の空だ。この空すらリョクはみて育たなかつた。あまりみたことのない懐かしい空。坂をくだつていく、そのままぶらぶらあるくとリョクが育つたその場所は更地になつていた。縁の空き地になつたその場所にたつ。その場所にねむるリョクの思い出は暗い牢の部屋とまづだいな時間。

「・・・・・」

地下牢があつたその場所にたつた。そのときの名残はやはり跡形もない。あの生活がうそのようだつた。朔夜の存在すらなかつたよ

うにおもえてくる。では、どうして自分はここにいるのだろう。

空はすっかり濃くなり太陽の気配のかわりに月の気配があたりをつんでいた。帰る気にもなれずあてもなくあるく。交差点で信号にひっかかった。赤い信号がかわるのをまつて。そのとき反対側の交差点にたつひとりの女性に目がとまつた。目が意識するまえに心が緊張する。リョクはおもわずあゆみだそつしたが、となりにいる人に腕をつかまれた。

「あぶないですよ」

信号は赤、車道にはたくさんの車がいきかっている。ふたたびその交差点をみたがそこに女性の姿はなかつた。リョクのつもりつもつたおもいがみせた幻影だつたのだろうか。それとも彼女はそこにほんとうに存在したのだろうか。いまはそれすらたしかめるすべはない。

それから数日がすぎた。子供をつれて散歩にいく。こんな生活をしているせいでの供たちはおなじ年ごろの子供たちと遊んだことがほとんどなかつた。もちろん学校にいったこともない。勉強はリョクがあしめた。ルフナが子供たちをあきらめていないとゆうのがフレインの見解だつたからつねにレセやアルが護衛としてつきそつている。

「パパ、あそんできてもいい？」

ふとさきづくと公園のまえにいた。瑠希や紗枝とおなじ年齢の子たちはない。みんな小学校にいつている時間だ。

「いいですよ。田のとどくところにいてくださいね。それと力はつかつてはいけませんよ」

ふたりは「はーい」と返事をすると公園へとほしつていった。元気で好奇心おうせいなのがあのふたりのいいところだ。おかげでどこにつれていつても馴染めなくて苦労するところがない。リョクは公園のベンチにすわりながらふたりをみていた。木陰になつていてすずしい風がふいている。ゆるりと前髪がゆれた。公園にいるお母さんの視線をきにする素振りもみせない。子供たちはジャング

ルジムにのぼつていい。瑠希はすこしあぶないこともしているが、あれぐらいならだいじょうぶだ。もともと丈夫だからあれくらいのところから落ちてもけろりとしている。

「ふう」

溜め息をついてうなだれる。交差点でみた女性はみまちがえだつたのだろうか。そんなことばかりかんがえていた。ここに彼女がいるのだろうか。この日本に。人目をきにせずおいかければよかつたとすらおもつてしまふ。羽をひろげてどびたてばあいつけたかもしれない。

ひとりの男の子がきゅうにうずくまる。ガタガタと体をふるわしきっていた。男の子のお母さんがわが子の変化にきづいてちかづいて声をかけていた。男の子はなにもこたえない。するととつぜん背中がもりあがつてたちまち姿をかえた。Ｋ０２を発症したのだ。あたりは騒然となつた。わが子をつれて逃げる母親、泣き叫ぶ子供、あばれるＫ０２の発症者。

騒ぎにやつときづいたリヨクはジャングルジムを見る。子供たちはジャングルジムのてつぺんで不安そうな顔をしてみていた。紗枝なんて目に涙をためている。リヨクが子供たちのところへかけようとしたとき、変化した化け物が母親をおそおつとしていた。リヨクは母親のまえにたち、ふりおとされた刃のよつた手をうけとめた。

「さがつてください」

リヨクは母親にいた。しかし、母親はなにもいわすすわりこんだままだ。わが子がこんなことになつてしまつたことへの衝撃とおそわれた恐怖でうごけないのだとリヨクはおもつた。リヨクは力まかせに腕をひきちぎる。これでは死なない。すぐに再生してしまう。基本的に捕獲することになつていて、迂闊にも今日は捕獲ロープをもつていない。殺すしかないとおもつたとき、足に母親が必死になつてしまつてきた。

「殺さないで！お願い、私の子供なのッ」

リヨクはその行動にとまどつ。どうすればいいのか悩んだ瞬間、

首にむかって手がふりおとされた。リヨクは反射的に腕でガードした。しかし、そこに刃のような手があたることはなかつた。化け物は背中から血をふきだしていた。リヨクにしがみついていた母親は発狂したような声をだした。しかし、子供はもとの姿をとりもどしていた。母親は子供をだきしめてなんどもなんどもわが子の名を呼びながら泣いている。

なにがおきたのかリヨクにもわからない。たおれてきた感染者の背後に刀をもつた女性がたつていた。洗練された戦士のような鋭い雰囲気のある女性だ。しかし、懐かしいこの感じはわされることはない。

「・・・・・朔夜・・・・・」

リヨクはつぶやいた。それはけつしてリヨクの記憶のなかにいる朔夜ではなかつたけれどまぎれもなく朔夜だつた。朔夜は刃を布にかえ一瞬でけした。彼女はかえり血すらあびてはいない。リヨクに背中をむけた朔夜はそのままさつていこうとする。

「朔夜ッ」

リヨクは朔夜の腕をつかむ。けつしてはなさないよつて強く握つた。しかしそんなリヨクにふりむきもせず朔夜はひとつと「はなして」といつただけ。その拒絶の言葉に手から力がぬける。

「パパ」

紗枝の声がリヨクの手に勇気をあたえる。ふたたびしつかりとにぎりしめる。いつのまにかジャングルジムからおりたふたりの子供はちいさな瞳をゆらしていた。朔夜をみて紗枝はいつ

「ママ？」

朔夜はその言葉にわずかに反応する。しかし、子供たちをみようとはしなかつた。ふたりの子供はよりそつて朔夜をみていた。朔夜はリヨクにもうこちびこち。

「はなして」

リヨクはそれ以上朔夜を拘束できなかつた。ゆっくりと手をはずす。手がはなれた瞬間、朔夜は姿をけした。子供たちはリヨクには

しつよつてきてわんわん泣いた。リヨクはなだめるようにふたりの頭に手をおくと朔夜のいたその場所をみた。六年ぶりにみた朔夜にはリヨクの好きだった明るい笑顔はなかつた。

その日の晩。朔夜はうまれそだつた家を遠田からみていた。明かりがついていて昔のなにもしらないころの家のようだつた。そこには朔夜がうしなつたものがすべてあつた。もつ平穏な生活は望まないと決意してみじかくきつた髪はあまり効果はなかつたらしい。リヨクが子供が田本にきていたときいて、のこのことみにきててしまつてゐる。

公園で瑠希と紗枝をみたとき、ひと田でわが子だとわかつた。おおきく成長した子供たちに母親だと名のる資格はないとわかつていてもこの腕にだきたいとおもつてしまつた。姿をみせるつもりはなかつたのにアクシデントがおきてしまつた。「ママ」と呼ばれた瞬間、我をわすれてしまいそうになつた。

おおきくなつていて。朔夜の記憶にあるふたりの姿は言葉もはなせないほどちいさくて、自分の腕のなかにすつぱりとおさまつていて。一生懸命ミルクを飲んでいた紗枝。元気に手足をうごかしていた瑠希。お腹にいるとしつたときから愛おしかつたわが子。

二階の朔夜の部屋だつたその窓から明かりがきえる。部屋はしづまつてしまい、まどろむ氣配をみせる。朔夜は記憶のなかにある幼いわが子の寝顔をおもいうかべた。いや、いつでも目をつぶれば自然とうかぶ。安心した穏やかな顔で安らかな寝息をたてていたわが子。もう、この腕にだくことない。

ルフナはゆつたりとした椅子にすわりながらちいさな男の子に本をよんでいる。やさしい黄色い光りのなかにある白銀の髪がキラキラとかがやいて神のようだ。子供の目は朔夜とおなじ色をしていた。そして、ルフナとおなじ白銀の髪。子供は無邪気な顔で絵本の絵を指さしている。西洋の絵画のよつたなシーンだつた。

「おかえり」

ルフナは朔夜にきづいてほほ笑んだ。朔夜はルフナに返事をかえすと子供をだきあげた。子供は三歳で幼い顔をうれしそうに朔夜にむけている。朔夜は子供の髪をなでた。白銀のきれいなやわらかい髪はふさふさとしていて朔夜の指のあいだから逃げていく。

「きょうはどうひつてたの？」

幼い声がきいてくる。朔夜はやさしい声でこたえる。

「外にわるい人がいないかみまわりにひつてたのよ」

「わるいひといた？」

「いたよ。でも、メッてしといたからもう大丈夫」

朔夜は子供の鼻をかるく摘みながらひつた。子供はうれしそうにあまりそばにはいられない母親とじやれている。

「ママとおはなしがあるからお姉さんたちのところへひつてきなさい」

子供にルフナはひつた。子供は素直に返事をすると朔夜の腕からおりてとことこと出口へと歩いていく。朔夜はそのしきる姿に今日みた子供たちの姿をかさねてしまつ。そして、せつせつまでの顔とは正反対の表情でルフナとむきあつた。

「はなしつてなに」

「あいかわらず、僕には冷たいんだね」

「そんなことないわ」

「僕には笑いかけてもくれない。笑つた顔をみせてほしいよ」

ルフナの言葉に朔夜は言葉をかえさない。ルフナはあきらめたような表情をしてはなしあじめる。

「もう、やめたらどうだ。きみがどんなにがんばっても感染を防ぐことはできないよ。それに」

「だまつて」

朔夜のしづかな制止にルフナははなすのをやめた。かわって朔夜がはなしあじめる。朔夜はこの六年間どこへひつてもかならずルフナのところへとかえつてきている。今回も中国へひつてきたばかりだ。

「かならずあなたのもとへ帰つてゐる。それさえ守れば好きにしていい、といったのはルフナ、あなたよ」

「たしかに・・・でも、家族の時間も大切にしてほしいものだね。きみとの約束どおり人間にはもう手をだしていないんだから、やさしくしてくれてもいいだろ?」

ルフナはそういうと朔夜の腰に手をまわす。そのままちいさな子供のように頭をおしつける。ルフナの甘えるしぐさに朔夜はこたえようとはしない。六年前、リヨクたちと別れたあとルフナと約束をかわした。リヨクたちのもとへけつしてかえらないかわりに人間にはもう手出ししないこと。それはいまでも有効でルフナは守つてくれている。

「今日リヨクにあつたわ」

朔夜の言葉にルフナは頭をはなしてみあげた。両腕は朔夜の腰にまわつたまま。そのままルフナは「それで」と朔夜をうながした。それはまるで約束をたしかめるような響きだつた。いや、約束の効力を強めるためにいわれた言葉だ。

「それだけよ」

朔夜はそういうとルフナからはなれていった。ルフナの頭に朔夜の言葉がのこる。なにもかたらず「それだけ」といったことに約束の不安定さを感じた。それでも、約束を破ることはできない。破棄してしまえばやつとのおもいでつなぎとめている彼女は水がこぼれるようになくなつてしまつだらう。そして、もう一度とかえつてはこない。

「愛している・・・か」

ルフナはフェインの彼女の言葉をおもいだしていた。彼女が人間の男に羽衣をあたえて身ごもつたときルフナはフェインをせめた。そのとき、フェインはいったのだ。

『彼を愛しているから』

その言葉にルフナははじめて彼女にフェインにひどく拒絕されたよくなきがした。これまでに僕たちのあいだにできた子供たちはなん

だつたのだろうか。ルフナなりに愛していたのに。彼女が自分からはなれてもうかえつてこないようなそこしれぬ不安。それとおなじようなものを感じていた。

あれから一週間がすぎていた。朔夜がいた、と報告してからアルとサラが日本にきた。あのあとも子供たちはパニックをおこしていたがいまは落ち着きをとりもどしている。いくら時間がたつても落ち着きをとりもどせないのはリョクのほうだった。

「公園で感染した男の子の資料と警察から口ピ一した資料」

サラは机に一枚の紙をおいた。そして、説明をはじめる。K-02についてのはなしだ。子供たちはいまお昼寝ちゅうでよく寝ていた。

「男の子は完全に感知していたわ。まるでK-02のワクチンを打つたよ。そして、朔夜の血液が現場におちていた。不思議におもつて黄、検査用に採血した血液をK-02に感染したマウスに注射してみたの、するとすぐに治つたわ」

「なんだつて？」

その言葉にレセが訝しげにこたえる。それがほんとうならばあのとき朔夜をひきかえにワクチンを手にいれる必要はなかつた。

「ほかにもアレンの血液や瑠希や紗枝の血液でも試してみたけどレプリカとおなじ完治まではいかなかつた。つまり、朔夜の血だけが感染者をなおすことができるの」

「では、朔夜の血液からワクチンをつくることは」

「簡単にできたわ」

実際、精製に一時間ほどしかかからなかつた。サラはカバンからちいさな瓶をとりだした。そのなかには黄色い液体がはいつていて、K-02のワクチンとまったくおなじようにみえた。

「しかも、威力はこっちのほうがうえだつた。朔夜からつくりだしたほうはたつた一滴あれば充分に効果をみせたわ」

「じゃあ、あのとき朔夜をひきわたしたのはなんだつたんだ。俺た

ちははめられたのかよつ

レセは怒りをあらわにいった。あのときワクチンとひきかえにきていつた朔夜の姿がリヨクの頭にうかんだ。

「おちつけ。つまり朔夜がいればワクチンの量産は可能といひことか？」

アルはいうとサラをみた。サラは疲れたようにメガネをとつていつた。フレームのないメガネがつくえにおかれる。

「そうゆうことになるわ」

そこにいるだれもがやりきれない顔をしていた。そのまま沈黙がながれる。しかし、リヨクはちがつた。彼女をとりもどしてもいい理由がここにできたのだ。彼女のそばにいられない理由などもうない。「朔夜が彼のもとにいる理由がなくなつたということですね」

リヨクのおもわぬ力強いものいいに三人はリヨクを見る。リヨクの顔には後悔や悔しさはなく、ただまえをみつめようとする強さがあつた。やらなければならぬことがはつきりとしているものの強みなのかな。リヨクは決意にみちた瞳でいう。それはアルたちに告げたものではなに自分への言葉だつた。

「ルフナをおとしましょつ。もとをたたないと朔夜がいてもきりがないですから」

朔夜はたしかに自分を拒絶した。それでも、そばにいることを望んでしまう。博士たちがそうつくつたのならそれを叶えようとあがくことになんの罪があるだらう。朔夜はリヨクのすべてで、リヨクは彼女のすべてではないけれど、それでも、自分には彼女が必要だ。リヨクの言葉にアルは患者の救済よりもルフナに重点をおくことを決意した。たしかにもとをたたなくてはなん解決にもならない。

「私が船からもどるまでおとなしくしている」

アルはそれだけをいうと日本をはなれた。司令官であるアレンに協力をえるため。フェインの全力をかけて終わりにするために本部へとむかう。レセもサラもそれでいいとおもつた。この六年、まったくルフナのことを調べていなければなかつた。寝るまもおし

むほど彼らの研究所や行動を監視していた。それでも、手がだせなかつたのはＫ－02のことと朔夜のことがあつたからだ。でも、もうそんな遠慮はいらない。朔夜が感染者を治す力ギならやすやすわたくしておこことはない。

アルが本部にむかつてから数日がたつている。もつアルは本部についているころだらう。サラがいつていたが豪華船はいまインド洋にいるらしい。許可がでしだいかえつてくるといつていたが、もうそろそろかえつてきてほしいころである。やはり会議がながびいているのだろうか。

「パパ、ポストにあてがみはいつた」

紗枝はそいつて手紙をもつてきてくれた。いまからレセとおでかけでレースいっぱいの服と明るい髪につけられたピンクのリボンがかわいい。リヨクは「ありがとう」といつてから手紙をうけとる。「レセのゆつことをきいて、氣をつけていつてきなさい」

紗枝はうれしそうに笑うと「いつてきます」といつてからリヨクのほほにキスをしてでていつた。窓の外から二人のたのしそうな声がきこえてとおざかつていく。

真つ白な封筒には送り主はかいておらず、かかれている字にもみおぼえはなつた。リヨクの名前だけかかれた封筒をあける。封筒とおなじ大きさの一枚の紙とクレジットカードのようなプラスチックのカードがはいつていた。そして紙に書かれた文字をよむ。

『親愛なるリヨクへ。今日の午後六時、私のうちでパーティーをする。なんにんできてももらつてもかまわない。きみの親愛なる友、ルフナより』

そのカード以外なにかはいつていなか封筒をみるともつ一枚紙があつた。そこには地図と暗証番号がかかれている。リヨクはその地図と暗証カードだけをもつとあとは「ミミ箱にしてた。時計をみると一三時一九分をさしてた。約5時間、時間がある。地図を見るといまからでればじゅうぶんまにあう。リヨクはあわてて身支度をととのえると家をでていつた。

レセたちは七時前に家にかえってきた。子供たちは買つてきたおもちゃをあけて遊んでいる。レセはリョクの姿がみえないのでサラに連絡をとることにした。もしかしたら、ふたりで仕事のはなしをしているのかもしね。

「サラ、仕事ではいつたのか？」

『いいえ、アルもまだかえってきてないし、オフのままよ。どうかした？』

「リョクがいないんだ。今日はどこもいかないでいつてたから、仕事かとおもつて」

『買い物でもいつたんじゃない。きにしそぎよ』

サラの言葉に「そうだな」とこたえると電話をきる。なにか嫌な感じがするが、最近ナーバスになつているのかもしれない。だいたい、リョクも子供ではないし、それに、自分よりリョクのほうが強いし丈夫だ。しかし、リョクは一時間たつてもかえつてこなかつた。

地図にかかれたとおりにきてみた。案内人がたつていてリョクをおくへとまねきいれる。おくられてきたカードはキーカードで、そのキーカードをつかつて部屋にはいるとそこにはルフナがまちかまえていた。ゆつたりと白いソファにすわつていて彼以外だれもいない。

「ようこそ。きてくれるとおもつていたよ」

そういうでルフナは手をさしのべたがリョクはおうじない。ルフナはうけとつてもらえなかつた自分の手をみてから「まあいいか」といつてガラスぱりの壁を見るようにいつた。そのしたにはくつろいでいるたくさんの女性と子供がひとりいた。子供の髪はルフナとおなじ色のようだつた。子供がひとりだけちがう服をきた女性にちがづいていく。

「朔夜・・・・」

リョクの肩に手をかけて、ルフナがいつた。それは、自信にみちた言葉のようにリョクにはきこえた。

「私と朔夜の子だ。かわいいだろう？男の子だよ。甘えん坊だがやさしい子なんだ」

ルフナの言葉以上に子供と朔夜の姿に衝撃をうける。朔夜に甘える子供とそれをあたたかくうけいれる朔夜の姿がそこにあった。幸せそうに笑う朔夜は自分がうしなつてしまつたものそのものだつた。それでも、リョクのおもいは不思議ときえはしなかつた。自分がこれほど欲深いとはおもわなかつた。

「あなたは子供で朔夜をしばりつけていりますか？」

おもつたよりも挑戦的なひびきだつた。その言葉にルフナの表情がかわる。リョクもまたきびしい顔になつた。リョクはまつこうからルフナをみた。ルフナもその挑戦をうけるようにリョクをみすえる。

朔夜は子供の相手をしながらいやな感覚を感じていた。それは具体的に言葉にできるようなものではなく第六感が感じているような不確かで不確定なものだ。でも、確実に朔夜をおちつかせなくさせる。

「パパを探してくるわね」

とうとう朔夜はそういうとルフナを探しにいった。なんとなくルフナのそばにいたほうがいいようなきがした。いつもの部屋にいつたがそこにはいなかつた。朔夜はそれでも部屋をみてまわる。だれにきいても「しらない」とこたえるだけだつた。外にでたとはかんがえにくい。自分がいるときにルフナが外へでかけることはほとんどなかつたから。

胸にかけたキーカードで部屋をあける。この部屋からは彼女たちがくつろぐ姿が一望できる。そして、そこにあるシーンに朔夜の表情がかたまる。ルフナに頭をふまれているリョクの姿があつた。リョクの体は傷だらけで耳からも血をながしている。

「なんで・・・」

やつとのおもいででた言葉だつた。ルフナは朔夜をみるとリョクから興味をうしなつたよにはなれていく。リョクはぼろぼろに傷

つきながらも朔夜をかすかにひらく目でみていた。そして、必死に朔夜の名をうわごとのようにつぶやく。朔夜は傷ついたリヨクのもとへかけようとした。その行動をルフナに止められる。

「そつちにいくの？」

ルフナの言葉に朔夜は絶句する。そして、動きをとめた。それでも、ルフナにいった。体中に警告音が鳴りひびいていた。

「やぶつたの」

「彼は人間じやないだろう。きみとの約束はまもつていてる」

朔夜はないもいわない。たしかに人間に手をだすなどはいつたがそのほかのものにはふれていなかつた。約束は破棄されていない。

朔夜はリヨクをちらりとみていう。

「殺すの？」

「どうしてほしい？」

ルフナはこたえがわかっているのに朔夜にきいてくる。このといこそ朔夜にはこたえられなかつた。そんな究極の表情をしている朔夜にルフナは笑いかけるとかるくいつた。

「殺さないよ」

そして、部下に連絡するとリヨクを隔離してしまつた。タンカーにのつてはこぼれていいくリヨクを朔夜はみることができなかつた。心配なまなざしをむけることはたぶん許されはしない。

ルフナが寝たころをみはからつてリヨクの幽閉された場所へいった。特性の白い扉は朔夜たちの力がきかない。朔夜にはこの扉をあけることはかなわなかつた。それでも、リヨクが心配でこんなとこまできてしまう。そつとみるとリヨクは粗末なベッドのうえでなにもかけずには眠つていた。傷は癒えていていつものリヨクの顔だ。服には生々しい血のあとがある。朔夜はしばらくそこでリヨクをみていた。けつして声をかけることなくみているだけ。そして、だれにもきづかれないようにそこをはなれた。

リヨクは目をさます。朝なのか夜なのかわからぬ。そんな部屋はあの育つた場所をおもいだせる。あのころの自分とい

まの自分がかなつて夢か現かもわからない。やつとのおもいで自分の状況をおもいだすとリョクは冷静に自分の体の状態をたしかめた。

手をにぎつたりひらいたりしてうごくがどうかたしかめる。肋骨にひびがはいつていたが、それはもう治つているようだつた。おきあがると、足を見る。ここが一番ひどくおられた、とゆうよりも砕かれたとゆう表現がいちばんただしい。

足はさすがになおつていませんね。でも、内臓は無事だ。

リョクはおもつたよりも状態がいいことにすこしほうととする。時間はどれぐらいたつたのだろう。完治するまでうごかないほうがいいと判断するとリョクはよこになる。それになにもふつつの部屋にとじこめられているとはおもわなかつた。あの。地下牢のようにきっと力はつうじない。目をつぶれば朔夜の顔しかつかばない。そのままで朔夜の夢を見る。

朔夜は家をみていた。その家はごくありふれた一般の家族が住むようなちいさくておだやかな表情をした家だつた。しかし、そこでありふれた生活をおくつたのはもうなん十年もなん百年も昔のことのようなきがする。もう、朔夜には縁のない場所。

そのころレセはリョクがかえつてこないこととゴミ箱にすてられたいた手紙をよんであせつていた。リョクがルフナのもとへいったのは明確な事実だがその場所がわからない。アルと連絡をとるとアルはいそいでかえつてくる、といつて電話をきつた。もし、場所がわかつたとしても子供たちだけをのこしていけはしない。子供たちの安全を優先するようにきめているからだ。

リョクの安否がわからないことで子供たちも不安な気持ちをかかえているようだつた。瑠希も紗枝も泣きだしそうな気持ちをぐつと我慢している。パパなら大丈夫だと、自分たちのもとへかならずもどつてくるのだと懸命にわるい気持ちをおさえつける。

「瑠希、あれ」

リコクの姿をさがすように窓の外をみていた紗枝が瑠希にいった。

「璐希は紗枝が指さしたさきを見る。でも、なにもなかつた。

「なにもないじゃん」

「よくみて、ママがー。くひこやねのうえにじやない

瑠希は黒い屋根をさがした。たしかになにかほつんとしたものがみえる。よくよく田をこらせばそれはたしかにママだつた。

「ママーママならパパをたすけてくれる。レセにいわなくちゅつ

瑠希がそつこつととなりの部屋にいるレセのもとにこいつとしたじてうそこどものせのせにてこむじやないとき。

「あ、ママじりかこいちゃう

瑠希は窓にへばりつくと朔夜の姿を見る。すわっていた朔夜がこちちに背をむけてたつている。いまもじこかへつてしまこやうだ。

「紗枝、こいつ。ママをおいかけるんだ

瑠希はそつこつと窓をあけてそこからでていこいつとする。紗枝はすこし躊躇いをみせたが意をけつして瑠希の後をあつた。

朔夜がその場をさろうとしたとき、だれかがひつしに呼ぶ声がした。朔夜は空耳なのかなとおもつたが、なぜかもう少しこことどちらなければいけないとおもつ。そして、そのまま三〇分がすぎたがなにもだれもあらわれなかつた。今度こそその場からさろうとした。

「「ママー」「

子供の声がきこえた。朔夜はあたりをみまわす。でも、子供の姿はみあたらない。やつぱり空耳だとおもいはなれていこいつとするまた「ママ」とよぶ声がする。

「ママ、したをみて

朔夜はその声にみちびかれるように道路を見る。そして、おなじ顔をしたふたりの子供がいた。朔夜は動搖する。なぜ、ふたりがここにいるのだろう。ふたりはフロインによって守られていたのに単独で行動してくるなんて。

「ママ、パパをたすけて、ぼくたちもてつだつから

瑠希は朔夜をみあげながらいった。ふたりはどうも自分の体をうかすことができないらしい。朔夜はふたりをのこしてさろづとした。そんなお願いくことはできない。ルフナとの約束が朔夜をじばっている。

「ママ、まつて

紗枝はいった。朔夜はふりかえる。ふたりは必死だつた。すぐるよういうるませた目でみつめられて朔夜はもう、どうしようもなかつた。お腹にいるときから愛おしかつたのだ。そんな子供たちにこんなふうに泣きつかれてきて母親として朔夜はつっぱねることができなかつた。母親なんてなれるわけないのに。それに、子供たちにはリョクは必要だつた。

「おうちにかえりましょ。レセとはなしをしないと

そういうつて、朔夜はふたりを抱きかけた。子供の足で走るよりも朔夜が抱いていつたほうがはやい。子供をだいたま朔夜は羽根をひろげる。そして、そのままとびたつた。朔夜はちいさな手をみた。

「しつかりつかんでいてね

ちいさな手が必死に朔夜にしがみつく。朔夜はおととしなつて腕に力をこめる。もういちど子供たちを抱ける口がくるとほおもわなかつた。

朔夜は庭におりたつた。家のなかにいるサラと田があつた。サラは信じられないようなものを見る目で朔夜をみていた。

「信じられない・・・

朔夜はなにもいわずに部屋になつた。部屋は朔夜が生活していきたときのままだつた。家具も柱の傷も壁にかいだちいさな落書きもなにもかもそこにあつてなにも変化はなかつた。あのころもどつたと錯覚してしまいそうな姫ひでかわらない。

「レセはどこにいるの

「レセ? よんでもくるわっ

朔夜の言葉にそういうのこすとサラはレセをよびにいつた。朔夜

はソファにすわる。三人がけのソファのまんなかにすわると瑠希と紗枝が朔夜のとなりにとづせんのようすわってきた。そして、朔夜の膝にそれぞれちいさな手をおいた。

「ママ、オレもパパさがしにいく」

瑠希の言葉に紗枝も「わたしもよ」といった。朔夜はふたりを見てからいつ。つれていけるわけがない。あんなところ。あそこには・・・

「ダメよ、あぶないから。ここでパパの帰りをまつていてあげて・・・ちゃんとつれて帰つてくるから」

朔夜の言葉にそうすんなり納得してくれるのはすもなく瑠希はリングにかざられた花瓶の水をあやつってみせながらいつた。
「だいじょうぶだつて、紗枝だてこんなことできるし。パパよりはつよくないくけど、レセよりはオレのほうがつよいもん」

朔夜はその光景におどろく。研究所にいる一世たちはこんなできはしない。それどころか、朔夜とおなじように母体としてうまれてきた子たちのなかにも力をもつているものたちは全体の三割にもみたないのに。

「ほんとうに朔夜がかえってきたんだな」

驚いて一人をみていた朔夜に部屋にはいつてきたレセはいつた。その声は事実だけをのべていた。ほんとうに帰つてきたわけではないことをわかつているようだつたが、念をおすように朔夜はいう。朔夜はすわつたままレセをみあげる。レセの顔はなにもかわっていないように感じたが、やはりすこし老けていた。朔夜の六年とレセたちの六年はちがう。

「帰つてきたわけじやないわ。リョクをたすけるまで手をくむのよ」

六年前とは朔夜の雰囲気もはつする言葉もちがつていた。すくなくとも六年前の朔夜はこんないいかたはしなかつたし、こんなに影をまとつてはいなかつた。みじかくさられた髪にも痛々しさをかんじる。

「リョクのいる場所まで案内するだけ、あとはかつてにやつてくれ

「らしい」

「案内だけって、どうやってオレだけでリョクを助けることができる」

「日本の研究所はほかのところよりもセキュリティーがよわいの。それは、あそこにいる一世や一世の子たちが自由にしきまわれるよう配慮された結果よ。外からのアクセスは不可能なかわりにかかるのアクセスは子供でもできるほど簡単」

「つまり、侵入されできればやりたい放題とやうわけね。私もいつしょにいけばいいのね」

朔夜の説明に要領をえたようにサラがいった。朔夜はサラをみてからさりに説明をつづける。

「リョクのどじこめられている部屋には私やリョクの力はつうじない。だから、コンピューターで解除するしかない。でも、そこだけはセキュリティーがきびしくてたぶんサラにしかできない。コンピューターは建物のなかにあるものだつたらどこでもアクセス可能だわ。すべてがメインコンピュータのようなものだから・・・それとこれが暗証番号」

朔夜はそのへんにあつた紙『deit』とかいてわたした。サラはそれをうけとると一瞬だけみて胸ポケットにしまう。

「朔夜、ひとつきいていいから。どうしてあなたの血液だけがK02を完治することができるのかから。わからないのならいいけど」

「フェインとルフナやアレンの子供から採取したものだからよ。彼女たちの遺伝には色濃くフェインの遺伝がうけつがれている。そんな子たちばかりを選抜して遺伝情報をもとに復活させられた子たち。つまり私の遺伝子をかららずもつていてその割合がおおきい子をルフナは育てている。羽衣は女だけの能力だから、男であるアレンやルフナは関係ない」

「だからね。だから、瑠希と紗枝の血液では反応がちがつたのはそういうこと」

レセは大人しくはなしをきいていたが口をはさんできた。

「じゃあ、紗枝には羽衣がつくれるわけだ。つくれうとおもえば」

朔夜はうなずいた。可能だらうとおもう。一世たちのなかでは自分で羽衣をつくつた子たちだつている。

「とりあえず、いそぎましよう。リョクがいつまでも無事だとゆつ保障はないから」

朔夜はたちあがつてそういうとレセやサラもそれに賛同するとそれぞれ準備にいつた。準備がおわるとふたりは子供たちにいきかせるようになんども口がすっぱくなるほどいった。「ついてこないよう」「きちんと留守番すること」「家からけつしてでないこと」かわるがわるいう二人に瑠希と紗枝はものわかりのいい返事をかえすし。そして、瑠希と紗枝はみおくりもせずいそいそと自分たちの部屋にもどつていった。

朔夜の案内で国会議事堂のまえまできていた。レセとサラには正装できもらつていて。朔夜は顔パスだからいいが一人はちがうのだ。あやしまれないようにしないといけない。正門から堂々とはいつていく朔夜にレセは小声でいつた。

「おい、ここつて議事堂だぞ。大丈夫なのか？」

朔夜は目線をうごかすことなく小声で説明する。

「組織の支援をどこがしているとおもう。これだけの研究の資金や物資、人員の支援は日本、アメリカ、中国、ロシアにフランスなどさまざまよ。主要国のほとんどすべてといつていいわ。とくに日本は力をいれているの」

「へえ、フェインは個人の大富豪ばかりだけど。どにだつたかはおぼえてないけどな」

「新人類をつくるプロジェクトとして力をかしているのよ。つきない命がほしいとおもうのは権力者のさがね。ときにルフナは戦争の火種をつくることもあるわ。各国ルフナにいちもくをおいているから。なん百年たつても衰えることも死ぬこともないルフナの遺伝が

ほしいのよ。そして、その遺伝をもつたものが新人類だとうだがわない。Ｋ－02の件だって支援している国は実験のひとつだとおもつていいだけだもの

朔夜は一室にはいる。そこはなんの変哲もない部屋で不自然なところはなにひとつなかつた。ひときわ存在感のあるつくえもなにひとつへんなところはない。朔夜はつくえにちかづくとそのひきだしの鍵をあける。カチヤとゆうかわいた音がひびいいた。

なにもおこらない。レセがそうおもつた瞬間、かざられた絵のうしろから機械音がきこえた。朔夜は絵をはずす。絵のうしろには人がひとりよゆうとおれるほどの中方形のあながあいていた。

「こつたつくりだな」

フランスでのことをおもいだしながらレセがいった。半分以上あきれている。朔夜はそんなレセを無視してなかにはいった。なるほど、侵入は不可能にちかい。国会議事堂の警備がゆるいわけはないく、そこに組織独自の警護とこのからくり。

「地下好きだな。せめて、階段じゃなく、エレベーターとかエスカレーターにしてほしいよ」

レセがぶつぶつといっている。サラばきょりきょりとまわりを観察しながらすすんでいた。

そのころ子供たちは車のトランクのなかにいた。部屋にひきかえしたふりをしてトランクに守備よくもぐりこんだふたりは車がとまり、大人たちがさつていく足音がやんだのをみはからつてトランクを開けた。用心深くひらいた隙間からまわりをみてから瑠希は得意そうにいった。

「やっぱ、よんどいてよかつたな。『危険回避100選』」

「よんだのはわたしでしょ。それにちからをつかえばよかつたんじゃない？」

「わかつてないな。ロマンだよ。おとこはロマンをあうんだよ。それより、はやくでめぞ。あやしまれる」

瑠希のこつた言葉の意味に疑問を感じつつ紗枝は瑠希のあとをお

うように車からおりた。トランクをしめるのに手がとどかないから、力をつかってしめた。そして、しばらく歩いてから紗枝はいった。

「瑠希、どににいけばいのかわかつてゐるの？」

紗枝の言葉をきいてから一、二歩あるいてからぴたつと止ると瑠希はいった。

「わからない」

「えつ？」

ちいさこ声でいわれたせいで紗枝の耳にははつきつと聞こえなかつた。もう一度きいてきた紗枝に瑠希はさけんでいった。

「だからわからない……」

「わからないって」

怒鳴るようにいった瑠希に紗枝は大声でかえす。そして、あきれだよつにいった。

「じゃ、あてもしかたないじゃな」

「だいじょうぶだつて」

瑠希はきまずそうにいったその時、耳にどこから歌が聞こえる。言葉としてはつきりと発音したような歌ではなく、歌詞のない歌声だつた。

「瑠希？」

紗枝は瑠希のよつすがおかしいことにきづき声をかけた。すると瑠希は耳に手をあてるど「歌がきこえる」とこつたのだ。紗枝も耳を澄ましてみたけどまったくきこえない。なにもいわず怪訝な顔をしている紗枝に瑠希はいつ。

「きこえるよ。すこくきれいなうただよ

「ぜんぜんきこえないってばつ。瑠希ー？」

瑠希は紗枝の腕をつかむと強引に歌のきこえるほうへと歩きだす。瑠希は歌によびよせられているように感じた。歌をうたつているものが自分をよんديて瑠希にはそれに逆らつことができなかつた。紗枝の手をひいて国会議事堂の門をくぐる。

「瑠希、おいたされちやつよ」

紗枝は瑠希の常軌をいつした行動に戸惑う。それでも、瑠希はためらうことなくすんでいく。不思議なことにすれ違う大人たちは紗枝たちがいることに気づいていないようだった。紗枝は瑠希の横顔を見る。その横顔は意志がないようどこをみているのかわからなかつた。そして、そんな瑠希の姿をみて紗枝はいつかサラからいた『トランス』とゆう言葉をおもいだす。きっといまこうしてきづかれずに侵入できるのはトランス状態で潜在的な力をしている瑠希のおかげだろう。

しかし、トランスは危険だともきいていた。瑠希がもしそうならはやくやめさせるべきである。でも、いまやめてしまえば大人にみつかつて外に追いだされてしまう。それはあまり歓迎できない。紗枝は瑠希のようすを注意深く観察した。もしものときは自分が瑠希を守つてあげないといけない。

ルフナは自室でモニターにうつる小さな子供の姿をみていた。そして、その子供がどこへむかつているのかも見当がついている。映像の中の大人たちはそこに子供がいることに気づいていないようだつた。監視室にいた監視員はその映像にうつった子供たちを見て、処理にいこうとしたがルフナはそれをとめた。

「まちなさい。ほつておいていい、僕のお客だ」

ルフナの言葉に監視員は戸惑つたが、最高責任者がそういういるのに末端のものがなにかいえるわけでもない。

ルフナはここに子供がいるとゆうことは少なくとも彼らもきているのだろう。もしかしたら、アレンもくることになるかもしれない。六年ものあいだ彼らとは冷戦状態だつた。ルフナ自身もこの状態にたえかねていたのだ。

朔夜がうまれたこの日本で決着をつけるのもわるくはない。すべてを動かしたのは朔夜の誕生がきっかけだつた。彼女はすべての母になるためにうまれてきたのだ。その偉大なる母を誰もが求めてい。しかし、母の御胸に抱かれるのは選ばれた子達だけだ。ルフナ

の子カリヨクの子がどちらが次世代の王になるのか。その時がちかづいていた。

「役者はすべてそろわなければならぬだらう」

ルフナはあるところへ電話をかける。何回かのホールのあと『はい』とゆう声が聞こえた。ルフナは電話口の相手にしたしげに笑いかける。その笑みが相手に見られることないとわかつても、これからおこる運命の最終章をかんがえると笑みがこぼれた。

「アレン、最後のゲームをしよう」

朔夜が動かした我々の運命の輪は大きくまわりその終焉を迎えるとしている。はるか昔、自分たちが追い求めた思いへの最終章をむかえようとしているのだ。そして、運命は軋みながらそのこたえを導きだすのだ。この朔夜がうまれた日本で。

レセたちは順調よく作戦をすすめていた。朔夜はほんとうに案内だけでけつして手を貸そとはしなかった。いつも、すこしはなれて二人の作業をみているだけだった。まるでその瞳は人形のようにただみているだけだ。

「OK。こつちはもういい」

レセは腰を伸ばしながらいった。サラのパソコンにこの施設のすべてのプログラムがそのままうつされる。セキュリティー、施設の構図、配管の配置、研究データーとそれらにかんすることすべてがそのままサラのパソコンにうつるようになった。サラはレセのケイタイに施設の詳細な地図をおくる。ここまでほんとうになんの問題もなくきた。あっけなすぎて怖いくらいだ。

「ほんとうに侵入してしまえばあっけないわね」

サラはなんの感情もなくいった。ここに施設はほんとうにほかの施設とはまったくちがう。ここにいる子たちには施設内であれば自由があたえられている。自分たちの力が力ギとなつていろいろなところへいけるのだ。しかし、ゆいいつ彼女たちが自由にでいいきないところがある。B区だ。リョクはそのB区の310号室にとじこめられているようだつた。サラはそれをつきとめるとパソコンをとじた。その情報はもうレセのケイタイに表示されているはずだ。

「いきますか」

レセは送られてきたデーターをみていった。そして、その部屋をでていこうとしたとき、アナウンスがながれる。

『ロブロックにいるサラ・サファイ、レセルバール・サトウ。楽しんでもらっているだらうか？朔夜もいるんだらうへ。さつきからバレだよ』

「ルフナ」

そのアナウンスをきいて朔夜はつぶやいた。この声はたしかにル

フナのものだ。なぜばれたのだろうか。監視カメラの映像をうつしかえてもいたのに。ロブロックの映像はいまだれもなにもうつってはいなはずなのに。

『こここのほんとうのセキュリティーは僕の力なんだ。ここは朔夜がほんとうの意味でうまれた大切な場所だからね。朔夜、彼らをつれて僕の部屋までおいでよ。ちゃんとおもてなししないといけないだろ？』

ルフナのアナウンスはそれでおわった。朔夜たちは顔をみあわせると互いに承諾をえるようにうなずいた。居場所がばれていののだ。朔夜はもうあとにはひけない。ルフナがなにをかんがえているのかはわからない。それはいまだけのことじやない。この六年ずっととなりにいてルフナをみてきたが朔夜は彼がなにをしてほしいのか、したいのかまったくわからなかつた。彼のすることには統一性があるようではなかつたし、自分のおもいが形になつても喜ぶことはなかつた。

瑠希につれられてきたのはたくさん扉のある通路だ。ここまで誰にもきづかれずにこれたのは瑠希のおかげだけど瑠希の体が心配でもあつた。紗枝はこの異質な空間に体がくすんでいた。壁や床、扉がすべて白い色で統一されている。無機質なその白い色は恐怖すら感じる。ここにはいるまでは大人はスーツをきていたり白衣をはおつたりしていたが、いますれちがつた人の格好は白い防具服に、マスクで顔をおおつていた。瑠希はあいかわらずトランクス状態で呼びかけてもなんの反応もしめしてくれない。みためやこの場の雰囲気がかわつたことだけじやない。この場所は自分たちにとつていいところではない。はやくはなれたいと紗枝は本能的に感じていた。

「瑠希？」

いちばん奥にある扉のまえで瑠希はとまつた。名前をよんだがとうぜんのように返事はかえってこない。瑠希は扉についた四角いでつぱりまで体をうかす。その四角いものは金属の色をしていてボタ

ンが横に三つ、縦に四つ、ついていて全部で二個あった。瑠希は何回かボタンを押し、すると扉はあっけなくひらいた。部屋のなからには歌がきこえてくる。

「・・・ママ？」

その部屋にいたのは鎖で手足をつながれた女性だった。彼女は朔夜とおなじ茶をおびた黒い瞳と赤みをおびた茶色の髪をしていて、まったくおなじ顔だった。しかし、朔夜とちがいながい髪をしていて雰囲気もちがう。紗枝が朔夜だと錯覚したのは一瞬だけだつた。

「瑠希」

瑠希が鎖でつながれた人へとちがいでいこうとする。紗枝は瑠希の手をつかんでとめようとしたが、瑠希によつてはねとばされ壁へととばされてしまった。しかし、紗枝に瑠希の力をはねかえす力はない。潜在的にもつていたとしてもいまそれをコントロールするだけの能力がないのである。紗枝は体をおもいつきり壁にぶつける覚悟をしてかたく目をつぶつた。

その映像を朔夜たちはルフナの部屋でみせられている。朔夜はけわしい顔でその映像をみているしかなかつた。紗枝の体が壁にぶつかりそうになつたとき、朔夜はたえきれず目をつぶつた。普通の人間ならあの距離で力をくらい壁にぶつかれば即死だ。紗枝はまだ力をつかえきれない。まちがいなくただではすまない。

「ああ、残念。邪魔がはいつた」

ルフナの言葉に朔夜は恐る恐る瞼を開ける。壁にぶつかるはずの紗枝のちいさな体はアレンの腕のなかで守られていた。朔夜はしんそこほつとした顔をした。朔夜に子供たちの映像をみせてから母親の顔になつていて。ルフナはそれがきにいらぬ。

「アレンはテレポートが得意だからな。よかつたね、朔夜」

「サラはきびしい顔つきでルフナにたずねた。

「あなた子どもたちをおびきよせたの？」

「まさか。僕にそんな能力はないよ。ねえ、朔夜」

そういうてルフナは朔夜を見る。画面からながれる歌を聞きながら朔夜はいった。この六年、自分の体にながれる血の習性を学んできた。自分がどうゆう種族なのかをきちんとルフナから教わってきたのだ。

「歌よ。瑠希はこの歌にひきつけられているの」

サラは朔夜の言葉を怪訝な顔つきでききかえした。たしかにきれいな声だがサラの耳には普通の歌のよつにきこえる。けれど、おなじようにきいてるレセの耳にはサラとはすこしちがうようにきこえていた。

「歌？ どうゆうこと？」

朔夜は歌いはじめる。曲は最近よくきく外国の歌手の歌だ。どこまでものびるような安定した声量、耳に心地よい音程。レセは思わずその朔夜の歌にききいった。ルフナでさえその声を楽しむように瞼をとじて堪能する。朔夜は一人のようすをみて歌をやめた。

「わかる？ 彼女たちにとつて歌は異性をひきつける道具なんだ。鳥がパートナーを求めて鳴くようにな。昔話でもあるだらう『舞い歌舞姿におもわず男は羽衣をかくしてしまつ』とね」

ルフナはそういうて説明をする。そして、おかしそうに映像をみるとさらに説明をするよつにつけたしていく。瑠希は鎖につながれた女性の首に抱きついている。

「僕たちオスは匂いでメスにきにいられる。遺伝的にはなれた者の匂いを彼女たちは魅力的な匂いとしてうけとりカップル成立だ。瑠希は今年で八歳くらいだらう。普通はもうそろそろパートナーをきめている年ごろだよ」

「この映像に映つているのは朔夜とおなじよつにみえるけど」

ルフナにサラはいった。白い服をきてまったく朔夜とおなじ顔をした女は雰囲気こそちがうが朔夜とまったくおなじ身体的特徴があった。

「彼女は朔夜とおなじだよ。遺伝的には彼女と朔夜はまったくの同一人物だ。もちろん、彼女は朔夜とちがつてできそこないだけだね。」

くすくす、瑠希はふられるよ。彼女と瑠希の遺伝はちかすぎるからね」

そして、どこかおかしそうにつづけた。これまでの自分たちの歴史をはなす。人がもう信じなくなつた伝説の起源をはなしているようでもあつた。

「彼女たちは類まれな歌声でときには女神や天女として人にうけいれられた。彼女たちは自分たちにそなわつてゐる神秘の力でたくさんの幸福を人にあたえ、それがまた彼女たちを神のような存在へとたかめていつた。いまでも、不思議な力をもつ人間がいるだろう。あの子たちは彼女たちの子孫だよ。そして、彼女たちが消えてしまつたころ、人間の一部は彼女たちの子孫を魔女として排除したこともあるんだ。ながい、ながい時のながれのあいだにその力は弱まり、彼女たちの歴史は物語のなかにだけのこつた。こうして、すべてから忘れさせていくことを“滅び”といわずしてなんというんだらうね？」

ルフナの言葉にレセとサラは言葉につまつた。そうかんがえると世界各地にのこる神秘的なはなしは実話としてうけいれられる。彼女たちはたくさんの能力をもつてゐる。白鳥としておりたつた天女の物語や人が突如、獣へと変化する物語。世界にある物語や神話は彼女と彼女たちの子供がおこしたことなのだろう。

「朔夜、僕いつたよね。僕を裏切つたら人間を滅ぼすよつて。どうしてこんなことしたの？」

ルフナは朔夜をせめるようにいつた。朔夜はなにもいえない。どうこたえるべきかかんがえていた。あまり刺激するとほんとうにやつてしまいかねない。ルフナはあまりにも人間に影響をあたえすぎるので、自分の発言が人間の命をにぎつてしまつてゐることに朔夜はいやな汗をながす。あのときのような過ちは犯したくはない。もう、ふつうの人々の生活をおびやかすようなことはやめてほしいのに。やはり、今回の自分の行動は軽薄すぎたのかもしれない。

「いいよ、こたえなくて。でも、償いはしてもらつ

「償い？」

ルフナの言葉に朔夜はぐりかえすようにつぶやく。ルフナはレセとサラをみていう。

「一人を殺してよ。人間ふたりの命だけでのこりの六〇億人は助けてあげる。すこししかやぶつていなければ妥当だらう？ それとも、完全に破棄する？」

名案だらうともいいたいのかルフナはいった。朔夜はその言葉に目をみひらいた。信じられない言葉だつた。どうして、ルフナには人間の命も自分たちの命もおなじような重さがあるとつたわらなりのだらう。どんな命にだつてその命は平等の輝きがあるのに。

「どうするの？ できないならいいよ。全部、僕が殺していくから」

そういうてルフナは二人に力をむけた。朔夜はとっさにあいだにわつてはいり羽衣でその力をさえぎつてしまつ。ハツとして、なんとか誤魔化さなければ、六〇億の人の命がかかつていて。そして、冷酷な言葉をはきながら朔夜は羽衣を刃にかえる。

「私がすればあとの人間は助けるのね」

その言葉をうれしそうにルフナはきいた。レセとサラはそんな朔夜にあとずさるが、なにもいえない。驚くほどその言葉は朔夜を動搖からすくつてくれた。朔夜は無表情で剣をかまえる。朔夜は剣をにぎりしめる。強くにぎりしめた。そして、ふみこむ。切つ先は弧をえがき青く光つた。

ダン

「ふーん」

サラとレセはどじてしまつた目をあける。刃は床につきたてられていた。朔夜はうつむいたまま動こうとはしない。朔夜の表情はまったくわからない。ルフナはいつのまにか手に短刀をもつていた。それを、無表情のまま投げつける。その軌道のさきにはレセがいた。

「朔夜ッ」

朔夜は腕で短刀をうけとめる。朔夜の腕には短刀がささつていた。朔夜はそのままルフナにむきなおる。朔夜は悲しい目をルフナにむ

けた。しかし、ルフナは朔夜の気持ちがわからない。

「きみも人間を選ぶんだ」

ルフナのといに朔夜はこたえない。なにもこたえずただ自分をみつめてくる朔夜にルフナはあきらめにも自嘲にもにた笑みをうかべた。そして、自分にいうようにルフナはいつた。

「もう、いい。決着をつけよう」

もう、なにもかも終わりにしたかった。疲れているのだ。ルフナが求めるものはもうなにをしても手にはいらないことがわかつた。朔夜を信じたかった。でも、彼女もフェインとおなじ自分は選んではくれない。そのことがよくわかつた。すべてを終わりにしよう。

アレンはルフナから連絡をもらつたあとインド洋のまんなかからアルだけをつれてリヨクたちの家へといつた。しかし、そこに子供たちの姿はなかつた。もしやとおもい国会議事堂のまえまでくればこの歌がきこえた。もし、瑠希がきいていたとしたらこの声にひきよせられるにきまつている。

アレンは瑠希を氣絶させるとアルにわたした。そして、鎖でつながれた女を見る。アレンにはその女がフェインの複製品だとひと目でわかつた。でも、けつして彼女とはちがう。朔夜もおなじ遺伝であつてもやはりほかの個体であつた。けれど、彼女はどことなくフェインに似ていたけど。そう例えるならまるで親子のような感じなのかな。

アレンも瑠希とおなじように彼女の歌をたよりにここまできた。その選択はただしかつた。彼女はいまも歌いつづけている。言葉でない歌。音の羅列のような歌だつた。彼女には言葉がないのだろう。アレンはその姿にたえかねて彼女にちかづいた。無言で鎖をほどく。両手が自由になつた彼女はくすくす笑いながらアレンに腕をまわす。雰囲気がちがつっていても彼女とはちがうとしても、どうしてもこんな彼女をみていられない。どんなにちがうと感じてもフェインの彼女の一歩だということはかわりない。そんな彼女をこんなふうにほ

うつておくことはできない。

「私はきみを選ばないよ。悲しくなるから」

首を舐めてきた彼女にアレンはいった。フェインにはじめてあつたときをおもいだす。きこえてきた歌声をアレンとルフナは追い求めるように走つた。歌つていた彼女は空や大地に歌をささげているようにアレンの目にうつつた。アレンたち三人をむすんだのは自分たちのなかにある動物としての本能だつたことが悲しい。

「アル、なにもみえない」

視界を手の平でさえぎつているアルに紗枝は文句をいった。なにがどうなつているのかわからない。アレンが鎖でつながれている朔夜ににた人を助けていたるところをみていたら突然、アルの手の平が紗枝の視界をさえぎつてしまつた。

「子供はみなくていい」

アルの言葉に紗枝はブーとほっぺを膨らませてふてくされた。そんな二人の背後からガチャつと乾いた小さな金属音がきこえた。反射的にアルはふりかえる。そこには、高瀬博士たちがいた。

「まったくようすがおかしいとおもつていたら。こちらにつくなりこれですか」

明人が銃口をこちらへむけていった。まさか、高瀬博士たもいるとはおもつていなかつた。一日前の情報では日本にはいなかつたのに。

「まったくだらかあれほどセキュリティーを強化しておくれようじことルフナにいつておいたのに」

明人はあきれながら侵入者をみていった。そして、紗枝をみるとうつてかわつてうれしそうにいつた。

「でも、わるいことばかりではないようだ」

高瀬博士たちの背後からK-01タイプの戦闘員があらわれた。アレンはアルとの距離をはかる。テレポートするのにもアルの体にふれないと彼をつれて逃げることができない。ピリピリとした戦闘独特の空気がながれる。そしてはりつめたなか鐘が鳴つた。戦闘開

始の鐘がなる。

「瑠希と大人しくしている」

アルは紗枝にそういうのこすと銃弾をはなつ。先制攻撃をしかけたがその弾はいともたやすく弾かれてしまう。超人的なＫ－０１と戦うためになんの訓練もしていなかつたわけじゃない。彼らとの戦いで必要なものそれはいちはやく危険を察知する動物の直感。

「アルフ」

アレンは無謀にもつっこんでいつたアルに制止の意味でその名を呼んだ。しかし、もう戦いは動きだしとめることはできない。ならば、アルとともに戦うのみ。アレンは空気中の水分を一ヶ所にあつめる。そして、それを分裂させ瞬間に凍結する。無数の氷の刃がアレンの身を守るようにただよっている。その一部をアレンは敵にはなつた。つきつぎと敵に命中していく。純血のアレンにとつて彼らはなんの障害にもならない。彼らには超人的なスピードと筋力が存在するが、アレンのように神の力だと人々がおそれた力はない。

そんなアレンに明人は銃弾をはなつた。アレンはその銃弾に手の平をむけると彼らがしたように銃弾を弾こうとした。しかし、銃弾はとまることも弾かれることもなく、アレンの肩に命中した。

「この銃弾は特別なんです」

明人はそういうと今度は子供たちのほうに銃弾をむけた。そして、アレンをおどすようにいつ。

「動くと撃ちますよ」

アレンはくつと息をのんでその条件をうけいれるしかなかつた。アルも健闘してはいるがよけきれなかつた傷があちこちにできている。アレンはそんなアルと拳銃をむけられている子供たちをきにしながら明人と明人の後ろで隠れるようにたつてている高志を苦しい表情で睨みつけた。

「チツ」

アルは銃弾が弾かれることにいらだちを覚える。このままでは間違ひなくやられてしまう。アルは自分のこれまでの戦闘経験と直感

だけをたよりにほとんど本能にちかいところで動くしかない。それでも、彼らに決定的な負傷をおわすことができなかつた。ただ、まだましなのは今日は直感がすごく冴えているとゆうことだけだ。今世紀最大といつてもいいかもしない。でなければいまごろ血だけでそのへんに転げまわつていなければいけない。

とつぜん、彼らの動きが鈍くなつた。そして、急にぴたつと動きをとめる。戦いの騒音のなかきづかなかつたが微かに歌がきこえる。これは、彼女の声だ。言葉ではなく音の歌。彼女は歌を歌つていた。朔夜の顔をしたその女の無邪気に歌う歌に彼らはききいつているようだつた。そして、その歌をおわらせるように響いたのは拳銃の荒々しい音。

「邪魔をするな」

傲慢にいつた明人に高志はあわててそれを諫めた。彼女はなぜこんなところにとじこめられているのだとおもつ。

「兄さん、だめだ。もし彼女がツ」

しかし、高志の言葉はもうおそかつた。うたれてしまつた彼女は高い発狂の声をだして、叫んだ。そして、明人にむかつて飛びつく。明人はあわてて数発、発砲した。彼女はそれにひるみあとずさるとふたたび叫ぶ。今度は、すべてのものを弾き飛ばすような突風が吹きあがる。敵も見方も関係なく、彼女以外その場に立つているものはいなかつた。高志が恐れていた彼女の暴走がはじまつた。

紗枝はうちつけられるようにドアにあたる。瑠希もおなじようにどこかへぶつかつてころがつていた。紗枝はうちつけた衝撃でうまくおきあがれない。それでも、瑠希を守らないととゆう使命感でたちあがむとする。

「紗枝」

その時、声がきこえた。その声はパパのものだつた。紗枝は必死にそれにこたえる。

「パパ、パパツ！」

「紗枝ですね。そこにいるんですねツ」

「パパ、たすけて
「パパをここからだしてください。パパたちの力が通用しないんです」

紗枝は瑠希がしていたことをおもいだす。そして、壁づたいになんとかたちあがるとその四角いでつぱりに手をのばすがとどかない。「パパ、とどかない」

リヨクはその言葉に元氣つけるように紗枝に声をかける。
「大丈夫、集中してください。いつも物をうかしているように自分を浮かすイメージをもつて、紗枝ならできます」

紗枝は泣きだしてしまいそうな目を必死に我慢して「うん、うん」とこたえた。そして、いわれたとおりイメージする。物を浮かすときとおなじように自分の体を浮かせるイメージ。しかし、まわりの発狂の声と銃弾の音、それらが邪魔になつておもうように集中できない。必死にパパの声を聞いて集中しようとするけど。

「大丈夫です。紗枝ならできます。パパは信じてますよ」
紗枝は必死に集中する。そして、イメージをつかんだ。体がふわりと浮かぶ。そして、四角いでつぱりまで体を浮きあげていくことができた。

「パパ、なにおせばいいの」

「大丈夫、自分が押したいものを押せばいいんです。きつとあたりますから」

リヨクは彼女たちの直感ににた感覚を信じるしかなかつた。そういわれて紗枝は戸惑いながらボタンをみつめる。そして、押したくなるボタンを順番におしていった。すると、『OPEN』の青い文字が浮かんだ。それをみて紗枝はほつとした。

「紗枝ツ」

誰かのせつぱつまつた声と大きな人影が紗枝のまえをたちはだかつた。赤みをおびた茶色いながい髪が舞う。そして、どさつと紗枝のまえにたおれた。

「朔夜」

リヨクは腹部から血をながしたおれでいる女性をみてつぶやいた。はじめてあつたときとおなじながい髪をした朔夜がそこにいるのだとおもつた。彼女は血を吐きながらもたちあがると明人へとむかつた。明人はどごめをさそと乱発する。彼女はひるまず明人の懷へはいりこむとその首筋に線をひいた。彼女の爪はいつのまにか刃よりも鋭く変形して明人の血に染つていた。

「ゴホ、ゴホ・・・ひゅう、っ」

彼女はそのまま大量の血を吐き明人のうけにかさなるようにこときれる。明人ももう息はしていない。即死だつた。リヨクは蒼白な顔をしてそれをみつめていた紗枝の頭を抱きしめながらふたりをみていた。紗枝は恐ろしくてリヨクの胸で泣いている。彼女はおだやかな笑みをたたえてその生をおえている。アレンはその顔がフェイントと一瞬かさなり、あのときタイムスリップしたかとおもつた。高志はそんな二人に自分のきていた白衣をかぶせた。そして、アレンたちに手をあげるといつた。抵抗などするきはなかつた。もともと自分は争うことにもいってはいない。こんな悲しい結末しか争いはうまないとなんど兄さんに忠告しただろうか。

「私の負けです。朔夜のところへ案内する。きつとあの子も大変なめにあつているだらうから、助けてあげてください」

高志の言葉にアレンやアンは疑心を感じざるおえない。まだ、彼にはK-01が二体はいる。たしかに歩はるいが勝算がまったくないわけじやない。どうするべきか思案しているとリヨクは紗枝を抱いたまま立ちあがるといつた。

「博士、朔夜のもとへつれていつてください」

そして、無防備に高志へとちかづいていつた。高志は悲しくもうれしそうにわらつた。自分はもうとつくに研究者として冷静に朔夜をみられなくなつていた。この場所でうまれた朔夜とリヨクをアレンからひきとつたそのときから朔夜が成長していく過程で自分は彼女に愛をささげてしまつていていた。愛おしいわが子に無償の愛をささげながらこれからもなにも変わらずすごしたい

と自然とおもうよくなっていた。それを、許さなかつたのはただ一人しかいない兄へのおもいだけだった。そのおもいは高志を呪縛するかのようにつなぎとめた。しかし、兄は死んでしまった。もう、自分は兄へのおもいに縛られることはなく、やつと素直に娘に手をさしのべることができる。

朔夜はレセがルフナにむけた拳銃を刃でうけとめた。キイイインとゆう甲高い音をたてて銃弾を阻止する。レセは困惑の瞳をむけた。朔夜はてつ生きり自分たちを選んでくれたのだとおもつていたのだ。しかし、実際はルフナにむけたレセの攻撃を彼女はさまたげたのだ。まるで彼を守るように。

「朔夜、きみはどっちの見方なの」

ルフナが理解できないとゆう感じにいった。理解できないのはルフナだけじゃない、サラもレセもだれひとり理解できていない。朔夜はルフナにむき、まっすぐと意志のある強い瞳をむけていった。「見方とか見方じやないとかどうでもいいの。私は守りたいものを守るだけ」

朔夜の返答にルフナはしんそこ理解できないとゆうように顎に手をあてて頭をかたむけた。そして、朔夜にこたえをもとめるようにいつ。

「僕には仲間かそうじやないかだけだよ。朔夜、ちゃんと選んでよ。僕につくのか彼らにつくのか」

そして、ナイフをなげつける。今度はサラとレセをかばった。レセは困惑の色をかくせず誰に標準をあわせればいいのかきめられな。い。それはサラもおなじだ。サラもいちおうつもつていてる拳銃をだせずにいた。

「人間につくるの？ それとも僕についてくれるの？」

「いいえ、私が望むのは共存よ。だれも傷つかないよう」。あなたもここに子たちもアレンたちや人間もみんないっしょに生きていくのよ。ルフナ」

ルフナは愕然とする。そんなこたえをながいあいだ求めていたわけじゃない。自分が求めていたものはそんなものではないのだ。ルフナは朔夜に失望の目をむける。そして、ほんとうにすべてに疲れてしまった。もうこれ以上、朔夜も自分もそのほかのものたちもこの場所に存在させたくはなかつた。いますぐにすべてなかつたことにしたい。

「この場所ごと消えよ!」

それを合図にどこからか爆音がおこる。そしれとともにそこいらじゅうから悲鳴が聞こえた。ルフナはこの施設ごと自分たちと心中するつもりなのだろうか。噴水のようにあとにちから火があがる。地上の建物をこわしてその火はひろがつていつた。あつというまに炎がつづみこむ。そして、この部屋にも大きな地上へとつながる穴があいた。朔夜は翼をひろげてサラとレセの腰に手をまわしてとびたつ。

「朔夜、逃がさないよ」

ルフナはそういうつて朔夜のあとをおつ。朔夜はルフナがあつてくることにほつとしてしまつ。とりあえずここからでないといけない。そして、逃げおくれた彼女たちの姿に心を痛めた。そのとき、白銀の髪をしたちいさな男の子をみつける。

「ラウトッ」

思わずひきかえそうとしたときリョクがラウトと抱えあげる。朔夜はホツとしてふたたびまつすぐに空をめざした。後ろからはルフナがあいかけてくる。彼もラウトもリョクやレセたちも助からないとこの六年の意味がない。

そのころ、リョクたちは急におこつた爆発から逃げていた。なにが起きたのかわからず、朔夜をさがしたいがこれ以上は危険だとゆう判断でリョクは子供たちをアレンにわたす。

「アレンさきに逃げてください。私は朔夜をさがしますから

「しかしつ」

テレポートで逃げるならみんなで逃げたほうがいい。紗枝も不安

そうにリョクの手をにぎったままだった。しかし、リョクはその手をはなすようになながすと、アレンと紗枝にむかっていう。

「かならず生きて帰ってきます。大丈夫ですよ。普通の人間よりは丈夫にできますから、死んだりしません」

リョクはそれだけをいいのこしてアレンたちからはなれた。そんなわけない。こんな高温で再生がまにあうまえに焼かれればいくらなんでも死んでしまう。アレンはその背中をみつめ高志い声をかける。高志はリョクとおなじようにどこかへここうとしていた。

「高瀬博士、あなたもいつしょにきてもらひこますよ」

「ですが、私は・・・」

アレンは有無もいわせらずその手をつかむとアルや瑠希、紗枝をつれて安全な場所までテレポートした。リョクの無事を祈るように田をとじる。神が力をかしてくださるのならどうか、この子たちに両親を幸せな家庭をあたえてあげてください。

リョクは朔夜の名をよびながらさがしつづけていた。すると、ちいさな子供の泣き声がきこえてきた。そして、そちらへむかうとそこには朔夜といっしょにいた。白銀の髪をした男の子がいたのだった。

「ママ、パパ」

と泣き叫んでいる。その子のまわりには建物の下敷きになつた女性たちや研究員たちがころがつてている。リョクはその死体のなかに朔夜がいないかを確認する。そのとき、上空から「ラウト」「ラウト」とよぶちこせな声をきいた。空をみあげると朔夜の姿がみえた。朔夜はレセとサラを抱えている。困惑しながらこちらへこようとしている。そして、「ラウト」と朔夜がよんだのはこの子供のことだとわかつた。リョクは朔夜の後ろからルフナがせまつてこることに気づき、子供をかかえて飛びあがる。すると朔夜はふたたびまつすぐに天へととびたつていった。自分が子供を抱えて逃げていくことを確認したようだった。

外へでて国会議事堂をみると二本の火柱が龍のようになつていて

いた。研究施設ごと国會議事堂は無にかえすつもりなのだろうか。たくさんの悲鳴は地獄の業火にかき消されその存在もわからない。

朔夜はアレンの姿をみつけた。そして、低空飛行でサラとレセをそのちかくへおろすと突風が衝突するように空へ舞いあがる。国會議事堂の頂点で朔夜はルフナをまちうけた。あつというまにルフナは朔夜の懷へとびこんでくる。朔夜はルフナの刃を寸前でうけとめる。ルフナの刃は首を落とそうと飛んできたのだ。

「くつ、ルフナッ」

朔夜はルフナの太刀筋をうけとめるのが精一杯だった。力でもまけているのだ。まともに戦つて勝てる相手ではないことをしつている。まわりから何本もあらたな火柱がたちあがる。

「朔夜、疲れたんだ。きみは僕といつしょにいてくれないとダメだよ。きみは僕のものだから」

朔夜にルフナはそういうてはなれる。間合いをとつて、さいど攻撃をしかける。朔夜はその攻撃をうけるだけだけつして攻撃にでようとはしなかつた。ルフナはそれすらきにいらない。こうして、自分の命を危険にさらされても自分を敵にもしない朔夜が恨めしかつた。攻撃して傷つけてほしい。自分が彼女にとつてなんであつたのかわからしてほしかつた。それが敵であつてもよかつた。自分はそれだけ彼女を傷つけてきたのだから。

「ルフナ、私は誰も傷つけない。あなたもおなじよッ」

朔夜の言葉にルフナはよけいに逆上する。きみを共用して生きていくほど自分は強くはない。だから、あのときも自分は彼女を許せなかつた。自分たち以外のものになつてしまふ彼女を許すことができずにはつてしまつたのだ。そして、朔夜が彼女とおなじことを望むならいつしょに死のうとおもつていた。もう自分にとつて自分と朔夜以外はどうでもよかつた。この六年ずっとといつしょにいたにもかかわらず彼女は自分を“特別”としてはみてはくれなかつた。それが、こたえだつたのだ。しかも、彼女は自分をそのた大勢とおなじようにあつかう。殺したいほどの憎しみでも彼女のなかで“特

別”ならそれでいいのに、それすらあたえてはくれない。

「きみはなんにもわかつてない」

そういうてルフナは力いっぱい刃をふりあげる。そして、朔夜を

殺そうとふりおろそうとした。

「朔夜は傷つけさせませんっ」

リヨクはルフナの手を背後からおさえつける。ルフナは恵々しそうに自分の背後にいるリヨクを睨みつけた。この男が僕たちから彼女を永遠にうばつたのだ。この男さえいなければ僕たちはこんなことにはならなかつた。ずっとといられたのだ。あの幸せな時間のなかにいられたのだ。

「おまえがいなければよかつたんだッ！」

ルフナはひときわ狂つた声で叫び、リヨクを弾き飛ばす。その力の衝撃に朔夜は両腕をクロスさせてたえる。突風に弾き飛ばされないよう朔夜はふんばつた。ルフナは下をむいてうつむいたまま脱力しているようみえた。朔夜はそんな彼をみつめちがづく。小さい子供にするように抱きしめないとおもつた。六年間、彼はずつと傷ついた子供のような目をしていた。彼をつつむように荒れ狂う力の波を朔夜はものともせず彼にむかつて手をのばす。

「朔夜っ」

リヨクの声が自分を制止させようとするが朔夜は手をのばす。そして、ついに朔夜はルフナを抱きしめた。ルフナはなにも反応しようとしない。朔夜はそれでも、大切なものを抱えるようにその頭をかかえた。ルフナには朔夜の心音だけがきこえる。彼女もよくこうして頭を包み込むように抱きしめてくれた。

「ふたりで死のう」

ルフナは一筋の涙をながしている。ルフナの翼が姿をけす。彼女が息をひきとつたときに自分はおなじように死にたかった。自分たちが滅びゆくことをほんとうにうけいれていた。ただ、彼女にのこされたことに目を背けていたのだ。望んだのはともにいることだけだったのに。

「一人にしてごめんなさい」

朔夜はいった。彼はずっと愛情をもとめていた。わかつていたのにどうしてあげればいいのかわからなかつた。六年もそばにいてわからなかつたのだ。でも、今はわかる。こうして彼をうけいれなければよかつたのだ。リョクや子供たちにはたくさんの仲間がいるけど、彼はずっと一人で淋しかつたのかもしれない。朔夜もおなじように翼をけす。そのまま彼を抱きしめたまま重力に身をませた。彼にはルフナには自分だけしかいない。そのおもいが朔夜の心をつぶんでそのまま彼とともにあることをのぞんだ。こうすれば彼にもみんなにもいちばんいいのだ。

「朔夜っ」

リョクが手をのばして自分をおいかける。それでも、加速はとまらない。このまま死んでしまうのはわるくないとおもつた。生きと叫んでももう彼にはどきはしないのだろうから。だから、彼を一人にするわけにはいかない。いくら朔夜たちでも、この高さから落下すれば確実に死ねる。彼を裏切つて自分だけ助かるなんてできない。

「いつしょにいこう。ルフナ」

ルフナはその言葉に自分の手をひいてくれたフェインをおもいだす。彼女はいつも太陽のように明るく笑っていた。そんな彼女がまたこの世からいなくなつてしまつた。たくさんの子供たちをのこして、自分たちをのこして彼女がいなくなつてしまつたように。ルフナの胸にはそのときの恐怖がうずまいた。彼女は死んではいけない。死ぬのは自分だけでいい。彼女にはたくさんののこしてはいけないものがある。それは自分が彼女にあたえたもの。彼女への愛の証だつたものたち。

「ルフナ ッ」

ルフナに弾きとばされた朔夜は必死にその体をつかもうと手をのばした。しかし、つかめたのは彼がいつも首からさげていた青いペンダントだけ。リョクは朔夜の体をうけとめるとおいかけようとも

がく朔夜をとりおさえた。ルフナはそんな朔夜の姿に自然と微笑がうまれる。そして、彼女にずっと、ずっとつたえたかった言葉をおくつた。はじめからこうすればよかつた。

落下する速度は驚くほどおだやかでルフナはその空間をうけとめる。こんなおだやかな死がむかえられるなんておもわかなつた。フェインが自分を許してくれたのかな。朔夜がこの研究所でうまれたとき自分はしりたかつた。フェインがなぜ人間に恋をして彼らを選んだのか。朔夜もおなじように人間を選ぶのか。ほんとうの彼女の気持ちがしりたいとおもつた。だから、高瀬兄弟に朔夜をわたした。人間として育てさせた。でも、彼女はどちらも愛していたのだ。その愛を疑いうけいれられなかつたのは自分だつた。いつでも、彼女は手をさしのべてくれていたのに。彼女が亡くなつたことに耐えられず自分の気持ちに目をそむけて長い間、どうでもいい言い訳をして彼女をおいもとめた。

アレンはとうにすべてをうけいれていたのに。アレンのよにきみのかえる場所はここだからと手をひろげて彼女のきがすむのをまつていればよかつた。人間に恋をしたときいたとき自分も彼女を許してあげればよかつたのだ。“裏切り者”と罵らなければよかつた。それから、彼女は笑わなくなつた。太陽のよう明るい笑みをもうみることはなくなつた。もういちどみたかつた彼女の笑つている顔を。

「ごめん、愛している

サラと高志はK-02の完全な治療薬を完成させた。その薬は揮発性が高く、K-02の感染を予防する役目もある。完成した治療薬はやはり朔夜の血液を原料としている。大量の薬は感染のひどいアジア地域を中心に無料で配られた。その結果、感染者は急激に減りいまは人口の一割にも満たないとゆう報告がつたえられた。K-02の被害者がいなくなる日もちかいとサラはうれしそうにいっている。

「高瀬博士、私は兄さんが最後までなにがしたかったのかわからない。あれほどのことをしてまで、兄さんはなにを求めていたんだ違うといまでも疑問におもつんだ」

アレンは海をみつめている朔夜を窓^ガしにみながらいつた。高志は朔夜が一歳のときのことをおもいだして彼にきかせることにした。「朔夜は覚えていないでしょが、ルフナが朔夜をみにあの家にきたことがあるのです。幼い朔夜は彼に抱かれながらほほ笑んだことがあつたんです。そのときルフナはなんともいえないうれしそうな顔をしました。それは私がみた最高の彼の顔だつたとおもいます。彼はずっと笑顔がみたかったのかもしません。朔夜はあなたたちとはなれてから今までのようすに笑つたりはしなかつたですから。」

そして、もうひとつ高志はこんなはなしをした。高瀬家は代々ルフナにつかえている家柄だつた。高瀬家はフェインと人間とのあいだにできた子供の子孫でルフナがその子供たちを保護して育てていつたそうだ。この事実にはアレンもおどろいていた。だから、うまくいきだらうとリヨクの誕生に自分の遺伝をつかつたのだ。そして、その思惑はみごと成功しリヨクがうまれ、朔夜がうまれた。そして、ルフナにたのまれてあの家で朔夜をあの病院でリヨクを育てたのだった。

「しかし、ルフナがリヨクにどうしてあんなにつらくあたつたのかわからない。はじめは彼も朔夜とおなじように人間として育てるこになつていていたんです。朔夜と兄妹としてね。しかし、ルフナはリヨクをみて、あんなところに閉じこめ、彼とゆう“個別の存在”が存在してはいけないよう教育するように命じてきた」

アレンにはその理由がわかつた。リヨクをひと目みただけでそのこたえは明白だつた。彼はよく似ていた。ルフナがはじめて誰よりも憎んだあの男に。

「リヨクはよく似ているんですよ。フュインが愛した人間に。リヨクはまるで彼のいきうつしのよつにね

「え？」

アレンは高志になぜ自分が高瀬の人間をルフナが保護したことを驚いたか説明するようにいう。

「ルフナはフェインが亡くなつたあと、彼女が愛した人間を殺したんです。もちろん、その村のことね。私はその人間たちを必死に守らうとしたが結局、守りきれなかつた。これをきっかけに私たちは決別したんです。そのとき、彼のもとにいたフェインが産んだ赤ん坊をつれていつてしまつたから、てつきり今まで私はその子も手にかけたんだとおもつていただぐらいです」

高志はそのはなしをきいて研究所にいた彼女たちの遺伝をおもいだした。ルフナは種族とゆうくくりであつめていると主張したが、彼女たちは共通のおなじ遺伝をもつていた。それは、フェインの遺伝だと高志は途中できづいていた。それは朔夜の遺伝をつかつて薬をつくつたときのことだつた。彼は種族をとゆうより彼女の子供たちを田覓めさせていた。けれど、彼がほんとうに求めていたのはそれらではなかつた。どんなにいい報告をもつてきても彼は興味なさそうに「そう」とこたえるだけだつた。だからよけいに彼が朔夜をだいてほほ笑んだあのときの顔が印象にのこつたのだろう。

「もつとはやく、彼女につたえればよかつたんだ。あんな言葉ばかりを彼女になげかけるのではなく。ずっとそばで笑つていてほしいと」

アレンはルフナのことをおもいながら遠い目をしていつた。そして、いまは朔夜の胸元でひかつてている青い石のペンダントをおもいだした。三本のチューーリップをモチーフにしたそのペンダントは自分も色ちがいのものをもつっていた。彼女からおくられたそれを、自分は彼女が亡くなつてしまつたときに彼女の亡骸とともに埋めたのだ。彼女のそばにいけない自分のかわりに彼女が少しでも淋しくなりようにと。自分が彼女を愛していた証に。でも、ルフナは彼女をもとめるように彼女への愛を叫ぶように大切にもつていたのだろう。本来ならルフナもあれを手ばなしてしまえばよかつたのだ。彼女のおもいがつまつたそれを手にもつていなければ、まだあんなに縛ら

れないですんだかもしない。

「コンコンとノックの音がして、ガチャッと扉がひらく。そこから、瑠希と紗枝そしてラウトが顔をのぞかしている。そして、誰かをさがすように部屋をみると高志に紗枝がいった。

「おじいちゃん、パパとママしらない？ずっとさがしてるの」

高志は三人にほほ笑む。高志はこんなふうに朔夜の子供たちに“おじいちゃん”といわれる口がくるなんておもわなかつた。アレンは無邪気な子供たちをみていると、まるではるか昔にもどつたようなきがした。あのころは三人で生まれてきた子どもたちに囲まれてくらしていた。あたたかな彼女の笑顔と子供たちの安らいだ顔があたりまえのようにそこにあつた。

「じめん、わからないな。部屋にはいなかつたのかい？」

高志の言葉に子供たちは首をふりながらそれぞれにいづ。

「いなかつたよな。パパもママも」

「うん、おふねさがしてもいい」

「おじいちゃんもいっしょにさがすよ」

そういって三人は高志の手をひっぱる。高志は「はい、はい」といいながら部屋をでていこうとした。アレンは朔夜にちかづいてくるリョクの姿を窓越しにみながらいう。

「しばらくパパとママはふたりっきりであげよう」

紗枝はアレンのところへかけてきて窓にまつづく。そして、朔夜とりヨクの姿をみつけるとアレンに抗議するよつこつた。

「どうして？」

アレンは紗枝とおなじ田線になると秘密話をするよつこつに人さし指をあてていった。

「ラブラブだから」

すると紗枝はおかしそうにでも、しあわせそうにわらつてこう。たまに紗枝は女の子の顔になつてドッキとするような態度をとる。ちいさくとも女の子なんだなあと感じさせられる。

「だつて、パパとママだもん」

ラウトと瑠希も紗枝とおなじように窓までくるとしたでよりそつている朔夜とリョクの姿をみた。高志も子供たちの横にたつ。海をみている朔夜によつてリョクはたつていた。

海を眺めているとリョクがショールを肩にかけてくれた。うすいショールをはおり朔夜は胸元でゆれるペンドントをにぎりしめた。そうして、ペンドントにぎる手をリョクはみつめる。そんなときはいつもルフナのことをおもつてているときだ。リョクはそれでも朔夜から目をそらしはしない。自分が朔夜を愛しているのはかわらない。どんなことになつてもそばにいたかった。朔夜のそばにいるために自分は自分の気持ちをおさえつけてまで朔夜の願いをかなえようとした。そうすればそばにいられるとおもつっていたから。

「朔夜、体がひえます」

そういうつてリョクは朔夜を背後から抱きしめた。彼女の体は海風で冷えたのだろうつめたかつた。こんなちいさなほそい体で朔夜はいままで必死に戦つてきたのだとおもえれば切なさがこみあげてくる。そばにいてわかちあいたかった。朔夜がにぎりしめているその手に自分の手をかさねた。彼女の苦しみをすべてしりたい。彼女がいまなにをおもつているのかそのおもいを教えてほしい。それは言葉をかわさないとわからないこと。

「ルフナのことをおしえてくれますか？」

朔夜にそういうと自分がおもつたよりもずっとやさしい声になつたことにおどろく。朔夜はルフナを丁寧におもいだす。ううん、おもいださなくともいい。この六年ずっと彼をみてきた。ちかくでみていてつらくなるほど彼は愛をもとめていた。わかっていたのに。

「私、ルフナの手をはなしてしまつた。ルフナはずつと淋しかつたのに」

ルフナはいつも後悔している子供のような顔をしていた。そして、不器用に自分を主張していたのだった。彼が自分になにを求めてい

るのかわからなかつた。ラウトを「きみの子だ」と手渡されたときもルフナがなにを求めているのかわからなかつた。産んだ覚えのないその子をどうしてふたりの子として自分に育てさせようとしているのか。でも、子供をみたときに自分の子だと本能でおもつた。そして、白銀の髪をしたその子はルフナの子でもあつた。彼との子を愛おしいとおもつていたのは事実だつた。それと同時に抱きしめた腕のなかで無邪気に眠るその姿に手放してしまつた子供たちをおもつてもいた。

「傷つけてしまつた。じゅうぶん傷ついている人だつたのに。だから、ずっとそばにいたのに」

朔夜の肩はふるえていてリヨクはその肩に顔をうずめた。この六年、自分が朔夜のそばにどうしていられなかつたのだろうか。あのとき朔夜の手をはなさなければよかつた。

「ルフナはラウトをみるときに懺悔をささげるような目でみたの。彼がどうして、そんな目をするのかわからなかつた・・・彼には私しかいなかつたのに・・・」

朔夜の言葉にリヨクはちがうとおもつた。朔夜だけを求めていたのはルフナだけじゃない。自分だつて彼となんらかわりはないのだ。彼とおなじように子供で朔夜をしばりつけられるとおもつていた。だから子供がいることに安心していた。そもそもかわらず朔夜が自分のもとからさつてしまつたことが衝撃でうごけなくなつたのだ。朔夜はそれほどに母性のつよい人だつたから。身に覚えのないあの子たちを迷わず産むと育てていくといつた彼女だから。

「ちがいます。あなたを求めたのは彼だけじゃない・・・彼が心ごと朔夜をほつしたように私もおなじようにあなたを求めていました」リヨクは自分の気持ちを語りはじめる。彼とルフナとおなじような過ちを犯さないように、その結果、愛している人を失わないように傷つけないように。朔夜はリヨクをみつめる。こんなふうに背をむけてきいてはいけないようなきがした。目をみて彼の表情を刻みつけるようにきかなければいけないようなきがしたのだ。どうすれ

ばいいのかわからず目をそむけるような過ちをもう犯さないですむように。わからなくとも目をそむけてはいけないのだ。

「私は彼よりするい男です。子供を育てていればいざれあなたがかえつてくると信じてあの子たちを育ててきた。自分ですら子供たちを抱くその手に愛情があつたのかさえわからない」

それは懺悔だった。ずっとずっと隠して目をそむけてきた罪だ。そして、自分も彼とおなじだ。愛しかたもわからずに愛を欲しこそいる子供とおなじなのだ。こうして縛りつけていつしょにいられたとしてもけつして満たされることはなく、そのことにイラついて癪をあこしひどくあたつてしまつ。彼と自分は似ていたのだ。ただ、自分だけのものになつて欲しかつた。

「私はあなたに恩ぐすよつなふりをして、あなたを縛りつけていた。そばにいるだけでいい、と言葉にしながら朔夜の心に自分だけいればいいと願つっていた」

朔夜はリョクの頬にふれる。その頬は冷えていて冷たかつた。それだけじゃない、表情もかたくなで冷えきつている。いつもの優しいあたたかいおだやかさはない。今のリョクには朔夜が好きだったあの温かさはなかつた。リョクがいたからリョクがあんなふうに温かくおだやかにほほ笑むから自分は今まで歩いてこれたのだ。子供を産んで育てようと、子供を手ばなししてルフナのもとへいこうといつも勇気をくれたのは彼だつた。

もう一度、あの顔がみたい。

「ああ、そうか。ルフナの願いがやつとわかつた。彼は願いを口にしていた。いつだつて朔夜をみつめて主張していた。ほんとうにほしいものがなんなのか。

僕に笑いかけてよ

私は彼に笑いかけてあげればよかつたのだ。とびっきりの笑顔で彼を抱きしめてあげるだけでよかつた。それを彼はずっとずっと求めていて、それなのにわからず私は目をそむけることしかできなかつた。

「許して」

朔夜はつぶやいた。ただの一度でも笑つてあげればよかつた。涙でにじんでいるリョクの目をみながら朔夜はじいさくつぶやいた。そして、リョクの顔をひきよせる。頭をくつつけて朔夜は泣いた。やつと彼のために泣けたようなきがした。「うん、彼をおもいつづけていた彼女が泣いているのだ。彼女もきっとちゃんとルフナをもつていた。だから、私がこの世にうまれることができたのだ。彼女が彼を助けるために私はこの世に産みおとされた。

朔夜の言葉にすべてを許されたようなきがした。リョクはやつと朔夜に自分の願いをいえる。長い間おもいつづけた言葉。あの暗い部屋のなかでも、朔夜のそばにいるときにもけつしていえなかつた。どういえばよかつたのかわからなかつた言葉。リョクは目をとじる。閉じた瞳からは一筋の涙が流れしていくを感じた。その涙は自分の罪を洗い流してくれるよう静かにゆづくと頬をつたう。

「愛してください」

神に祈りをささげるよういわれた言葉に朔夜はさらに涙がでる。リョクのことをおもえば次から次へと涙がぽろぼろと流れた。リョクの頭を抱えるようにまわしていた手で頬にふるとリョクの頬もぬれていた。指にふれるその冷たさとおもいに愛おしさと切なさがこみあがてくる。朔夜はリョクの唇にふれた。愛おしい人をきちんと愛せるように、愛してもらえるように。リョクのことをおもうと涙があふれるほど切なかつた。そのおもいをつたえるかのように朔夜はくちづけた。

海が深いように、空がどこまでもつづいていくように、深く深くつままれていくような、どこにいてもどんなに離れていても愛しているとわかつてもりえるように深くどこまでも愛してあげたい。愛おしいとなんどでもわせやいて、なんどでも安心してもうかるように温もりを感じてほしい。

リョクの手が朔夜の手にかさねる。手の平をあわせ指をからませリョクは朔夜を感じるように手をつないだ。愛していると愛された

いとなんどもなんどもその温かさをたしかめるように相手が安らげる
ように手をかさねる。互いの手の暖かさに自分たちを感じながら
誓う。今このときにつべをかけるよつなおもいで誓つてあつた。

あなたのそばにいます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9849c/>

Wing Fabric～はねころも～

2010年10月8日15時34分発行